柳生非情剣
隆慶一郎
講談社文庫

カバーデザイン　荒川じんぺい

り4-1

隆慶一郎　り 4-1　柳生非情剣　講談社文庫　P360

9784061850361
1910193003605
ISBN4-06-185036-9
C0193 P360E (0)

講談社文庫

柳生非情剣
隆慶一郎

定価360円
(本体350円)

り 4-1

剣に生きる一族として将軍家指南役となった柳生。連也斎、友矩、宗冬、十兵衛、新次郎、五郎右衛門……尋常でない修業による技、将軍家と関ることによって起こる一族の相剋、死を見据えて生きる剣士の爽やかさを独自の視点から描いた列伝。圧倒的迫力で胸を打つ、男のための鮮やかな時代小説。

柳生非情剣

隆慶一郎

柳生非情剣

隆慶一郎

講談社文庫

講談社文庫

柳生非情剣

隆 慶一郎

講談社

真名へ

目次

柳生非情剣

慶安御前試合

鯉

柳生石舟斎から新陰流三代の道統を授けられ尾張柳生の開祖となった兵庫助利厳は、何よりも花を愛し、庭を愛したと云う。

別して慶安元年（一六四八）正月、隠居して如雲斎と号するようになってからは、一日はまず花を活けることから始まり、庭の仮山水を見廻ることでほとんど半日を過した。巨石を集めて山と見立て、その下に清泉を引いて盆池を形どり、そこに鯉を放っていた。池のほとりに立って、半日、鯉の動きを見て倦きることがなかったと云う。時々まるで自分が鯉になったようなことを云った。

「この曲り鼻の岩が、どうもこわいな」

とか、

「この辺が変哲なさすぎて倦きたよ」

そんなことを云い立てては、庭師に手を入れさせ、時には手ずから直したりする。

如雲斎の三男兵助は、この父の趣味が大嫌いだった。花はまだいい。立花は芸の一つであり、武人の風雅として悪いものではない。だが仮山水の方はどうにもいただけない。とりわけ、半日の余も池畔にしゃがみこんで、痴呆のように鯉を見つめている姿には、老残という言葉の、何かぞっとさせる感じがあった。

「鯉のどこがそんなに面白いのですか」

ある日、むきつけにそう訊いたことがある。如雲斎はきょろっと兵助を見返した。眼が死んでいる。兵助の質問が理解出来ずにいるのは明白だった。

「面白いから、半日、鯉を見ていられるのでしょう？」

兵助の言葉には突っかかる棘がある。父のこんな姿を見たくないのだ。

「鯉でなくてもいい」

如雲斎の応えは模糊としていた。瞳に茫々の気が漂っている。

「魚になるのが楽しいだけだ」

「魚になる？」

兵助が呆れて云った。

「泰山を仰ぎ、江淮を泳ぐ。島陰をめぐっては、水底に潜み、また花影のただよう水面に浮上する。人間には魚の楽しみがないな」

「泰山ですって、この小さな岩が？　この池が江淮といえますか」

「魚は大小を忘れて楽しんでいる。観ずれば仮山水もまた真の山水となる。お前には魚の気持は分らん」

それきりだった。父の姿勢がそれ以上の質問を封じていた。

〈魚の気持なんて、分りたくもないさ〉

兵助は腹の中で毒づきながら、引き下らざるを得なかった。

兵助は後の浦連也、柳生連也斎である。

如雲斎には男子が三人いた。清厳・利方・連也である。ちょうど五歳ずつ齢が違う。

長男の新左衛門清厳は、父とは別に小姓役として三百石の扶持を受けていたが、寛永十四年、たまたま病いのため静養中だった有馬の地で、島原の乱の起ったのを知り、何も彼も抛って参加した。恐らくはこれがこの時代の最後の合戦になるであろうことは、何人の目にも明白だったからである。この機をのがせば、一生人を斬る機会がなくなるかもしれない。斬人の剣を勉んだ者として逃がすことの出来ない場合だった。清厳は、最初の原城総攻撃に加わり、

『拙者儀、去二十七日有馬ヨリ参着、則、石谷十蔵殿ヲ頼、板倉右近手ニ加リ、今朝一番乗仕、致二討死一候』

という壮烈な遺書を父宛に残して、板倉内膳正と共に討死してしまった。

次男の茂左衛門利方は、新陰流四代の道統を継ぎ、如雲斎の尾州藩剣法指南役五百石の地位を譲られた人物だが、残念なことに病弱で、慶安元年父の後を継ぐと直ちに弟の連也に指南役を譲

り、己れは一般の諸役を勤め重用された穏やかな人物だった。四代の道統を継いだほどだから、利方とて凡庸の剣ではない。その利方が到底及ぶべからずと云って、指南役の地位を譲ったくらいだから、連也こと兵助の剣は尋常のものではなかった。正に剣の天才といえた。

兵助は兄二人とは母が違う。兵助の母珠女は、石田三成の侍大将島左近の末娘である。島左近と云えば関ヶ原の合戦で黒田長政の隊を散々に蹴散らし、合戦後数年を経ても尚、その「かかれーッ。かかれーッ」という掛声を夢に聞いて、深夜はね起きる黒田家の武士が何人もいたと伝えられるほどの猛将である。左近は敗戦と共に行方しれずになり、残された珠女は寄るべを辿って京西陣の呉服屋にいた時、壮年の如雲斎と会い、愛し合ってその側室となった。兄二人はいずれも尾張城三の丸の屋敷で育っているが、兵助だけは幼時を東海道三州御油の旅宿問屋林五郎太夫方で過しているのは、そうした事情によるものかもしれない。名前も初めは島新六あるいは林新六と称えていたようだ。成長すると三の丸の屋敷に引きとられ、姓も柳生を名乗るようになったが、名前の方は、新六・七郎兵衛・兵助・厳知・厳包と何回も変っている。新陰流五代の道統を継ぎながら、後年あえて浦連也を名乗ったのは、柳生家に対してなんらかのこだわりがあったのかもしれない。

奇妙なことに兵助は三人の男子の中で一番父の兵庫助に体形が似ていた。そしてその兵庫助は祖父の石舟斎にそっくりで、だから第三代の道統を受けたとさえ云われている。武術の道統は、出来るだけ流祖に似た体形の者が受け継ぐ方がいいのは、見やすい道理である。六尺に余る大男

の創った流派を、五尺に満たぬ者が受け継ぐことにはなんらかの無理が伴う。宮本武蔵が真の意味での後継者を得られなかった理由はその点にある。武蔵は野獣めいた大男だった。従って、兵助の剣は父兵庫助に酷似していたし、曾祖父石舟斎にも似ていた筈だ。

罠

三代将軍家光の面前で、江戸柳生の総帥柳生宗冬と御前試合を行うようにとの命令が尾張に届いたのは、慶安四年三月下旬のことである。もっともこの下達状には試合のことは何一つ書かれていない。

『御慰みのため、柳生伊予（註・如雲斎のこと）子供の兵法上覧なされたく候旨、仰せ出され候間、当地江差越し候様に、相違せらる可く候。此の由、演達あるべく候。

恐々謹言。

三月十八日

阿部対馬守
重次　花押
松平伊豆守
信綱　花押

成瀬隼人正殿』

これは新陰流道統十四代の柳生厳長氏が読み下し文にされた、当時の文面である。阿部対馬守及び松平伊豆守は時の老中であり、成瀬隼人正は尾州家の国家老である。そして宗冬との試合のことは、特に口頭で伝えられたと云う。兵助、この時二十七歳。相手の宗冬は三十九歳だった。父の如雲斎は前年、即ち慶安三年正月十六日に死んでいる。この試合について利方・兵助兄弟が相談すべき相手はいなかった。だが両人に書状の趣きを伝えた成瀬隼人正が更に付け加えて、松平伊豆守の驚くべき警告を伝えた。江戸柳生はあらゆる手段を尽くしてこの試合に勝とうとする筈である。用心の上にも用心が肝要というのが、警告の内容だった。

この頃の江戸柳生の置かれていた立場から考えて、これは充分に起り得る事態だった。江戸柳生の総師柳生宗矩は、四年前の正保三年三月二十六日に、七十六歳で死んでいる。

一万二千五百石の封禄は、長子十兵衛三厳に八千三百石、三男の主膳宗冬に四千石、残りの二百石は柳生の菩提寺である芳徳寺に寺領として与えられた。当時一万石以上は大名であり、それ以下は旗本である。江戸柳生は宗矩の死と共に、大名から旗本に転落したことになる。更にこの幕府の処置を不服として柳生の里に引き籠ってしまった十兵衛が、昨年（慶安三年）三月二十一日、四十四歳の若さで死ぬと、江戸柳生三代を継いだ宗冬に、十兵衛の遺領八千三百石は与えられたが、その替りに今まで宗冬の貰っていた四千石は公収されてしまった。これで江戸柳生は名

実共に、旗本の地位に定着したことになる。宗冬は勿論、芳徳寺を開基した末弟の義仙（別堂と号す）までもこれを非常な恥辱と感じ、以後大名復帰が江戸柳生の悲願となった。

これが今の江戸柳生の立場である。従って試合、特に御前試合ともなれば、宗冬は絶対に勝たねばならぬ。そうして天下無敵の剣の名を守ることによって、一歩また一歩と悲願の達成に向ってゆかねばならぬ。

だが今度ばかりは相手が悪すぎた。天才兵助の精妙剣は江戸柳生にも聞こえている。尋常に立合って宗冬の勝てる相手ではなかった。だがそれでも宗冬は勝たねばならぬ。尋常に立合って勝てぬ相手に勝つ手は、謀殺しかない。この謀殺の係りが義仙だった。

宗矩以来、江戸柳生は謀略の剣と呼ばれている。その理由は義仙とその選び抜かれた配下たちの役割にあった。この集団の役割は暗殺だったのである。二代将軍秀忠から三代家光の時代にかけて、徳川家の謀略の最も汚い部分を請負って来たのが、俗に裏柳生と云われるこの暗殺集団だった。宗矩の生前、裏柳生の統帥は宗矩から十兵衛に伝えられ、宗矩の死と共に義仙に移った。

義仙は現在の江戸柳生で最強の男である。体力技倆ともに宗冬を遥かに上廻る力を持つ。兵助と互角に闘える者がいるとしたら、この義仙を措いて他にはない。だが裏の者が表に廻ることは出来ぬ。まして御前試合に義仙が出ることは考えられない。義仙に出来ることは一つしかなかった。兵助の暗殺である。そして又これだけが、宗冬の勝利を摑める唯一の機会でもあった。御前試合のことが伝えられると、直ちに義仙が二十四人の部下と共に柳生谷を出発したのは、このた

めである。だが義仙も宗冬も、これが入念に仕掛けられた罠であることに全く気付かなかった。

三代将軍家光は病んでいた。『徳川実紀』によれば、慶安四年正月六日の項に、

『御心地わづらはしくわたらせたまへば、外殿にいでたまはず』

と記録されたのが、病いの最初のようである。暮の間三日にあげず狩りをして来た疲れかと思われた。具合が悪くなってもまだ二回ばかり狩りに出掛けていたのが、十二日を境にふっつりといかなくなっている。替って『御心地なをなやませ給へば』とか『やや御快きにより』とかいう病状の記録と、病間から諸人の武芸を見る記事とが交互に現れて来る。三月下旬、一時小康を得たが、兵助と宗冬の試合をきめたのは、丁度この頃だった。

家光の武芸好みは有名で、正月から四ヵ月にわたる度重なる武芸上覧もその好みの現れと理解されているが、実はこの試合だけは目的が違った。

家光はこの十二年来、江戸柳生を怨み憎んでいた。理由は恋である。恋の恨みであり、憎しみだった。恋の相手は宗矩の次男友矩だった。

友矩は十兵衛三厳・主膳宗冬とは違って妾腹の子である。母のお藤は柳生の名もなき百姓の娘だった。抜けるように色が白く、漆黒のおくれ毛が首筋に絡む様が、少年の十兵衛さえ悩ませたといわれる女性である。友矩はそのお藤そっくりだったと云う。美貌のほどが思いやられる。十五歳の時から家光の小姓をつとめ、寛永十一年夏、家光が将軍として初めて上洛する時は、

歩行頭として供奉した。道中、久能山で休んだ時、家光はようやく、年来憧れていた友矩を己がものとした。恋が成就した。この時、家光三十一歳、友矩二十二歳。『柳生家譜』によればこの時の口説に家光は刑部少輔の官位と、将来大名として四万石を与えることを友矩に約束したらしい。

事実、家光は八月に友矩を刑部少輔とし、禄二千石を与えている。

宗矩はこの事態に困惑し、激怒したと伝えられる。当然であろう。この頃宗矩は惣目付の要職にいた。惣目付とは後の大目付であり、諸大名の監察を職としている。その惣目付の息子が将軍の寵童になっては、父親としてたまったものではない。しかも友矩は家光の寵をいいことに、かなり思い上った振舞いもあったらしい。だが、それにも増して宗矩を怒らせたのは、四万石の大名にするという家光の約束だった。宗矩自身、慶長五年に二千石を賜ったのを手初めに、三十六年かかって、やっと六十六歳の時、一万石の大名になった身である。それが尻一つで四万石とは何事であるか。宗矩はたまりかねて、友矩に柳生の所領への逼塞を命じた。生木を裂いたのである。それでも我慢がならず、遂に寛永十六年六月六日の夜、十兵衛に命じて友矩を斬殺させた。

友矩病死の届けを見た瞬間、家光は事の真相を悟った。友矩の死を告げに来た宗矩に、殺気が立ち籠めていたからである。家光は武芸好きなだけに、自身もかなりの腕である。この殺気がどこから来ているかぐらいの推測はついた。

家光は宗矩を恨み憎んだ。殺してやりたいとさえ思った。だがこの時点で、それは出来なかっ

た。家光の生涯の仕事とも云うべき大名潰しに、宗矩が必要だったからである。それに宗矩が惣目付として、裏柳生を使って果たして来た汚い仕事の数々を万一暴露されたら、それこそ徳川家の屋体骨がゆらぐほどの大騒動になることは、目に見えていた。家光は後日の報復を友矩の霊に誓った。

宗矩が死ぬと、禄を分けて旗本に落したのは、家光の遅い復讐だった。十兵衛の死の後、四千石を召し上げたのも同様である。そして今、死に臨んで家光は、今度こそ江戸柳生を根こそぎ潰してやろうと決意していた。その暗い手だてが、宗冬と兵助の御前試合だった。

松平伊豆守を通じて、利方・兵助兄弟に江戸柳生の陰謀を告げ、警告させたのはほかならぬ家光だった。兵助を暗殺されてしまっては、家光の謀みは無に帰する。兵助に充分の用心をさせ、且つまた腹の底から怒らせなければならぬ。御前試合の場で宗冬を殺すほど兵助を怒らせるのが、家光の狙いだった。目の前で宗冬が殺されるのが見たかった。そしてその時、武道不覚悟の汚名をもって、江戸柳生を潰すことが、家光の秘かな悦びだった。

お了

兵助は恋をしていた。尾張藩の儒者吉田素菴の末娘お了がその相手である。吉田素菴は京都嵯峨の角倉了以の子で通称は角倉与一。早くから父を助けて、貿易商、あるいは土木業という家

業に精勤して来たが、学問を好む心深く、十八歳の時から藤原惺窩について儒学を学んだ。尾張では『史記』や『通鑑』を講ずる学者であると同時に、木曾山の木材伐採と輸送に従事する木材商でもあった。

お了はこの素菴に似ない、ひっそりとした性格の十八歳の娘である。だが控え目な態度で終始しながらも、見るべきものは充分に見、云うべきことはいつの間にか余すところなく云っているという、不思議な力を持っていた。

「そなたには奇妙に剣機を捉える力がある」

兵助はお了を評してそう云っている。仕掛けるとも見えぬ静謐さを保ちながら、いつの間にか撃尺の間境を越えている、そういった恐るべき剣を、兵助はお了の中に感じとっていた。この時も理解出来たのか出来なかったのか分明でない柔かな微笑で、お了はこの言葉を聞いていた。そうした姿が兵助の心を尚更惹きつけるのだった。

お了を知ってから自分の剣は微妙に変ったと兵助は信じている。兄の利方もそう思っていた。とにかく近頃の兵助の剣は、理解を越える早さをもっている。こちらが何も出来ない瞬息の間に、もう撃たれているのだ。それもほとんどが片手打ちだった。片手打ちは正確さを欠き、斬人の剣として充分の力を持たないと云うのが定説だが、兵助のは違う。定寸よりやや長めの二尺の小太刀で、息の止まるほど強力な片手打ちを放つ。前年、藩主義直公が亡くなられた時、尾張柳生の高弟寺尾土佐守直政が殉死を願い許された。その介錯の役目を兵助は引き受けている。この

時も兵助は脇差をとって片手打ちに斬った。土佐守の首は前皮一分を残して切り留まって、落ちなかった。居あわせた者たちは、この妙技に感嘆を惜しまなかったと云う。新陰流で云う『小転』(小太刀)の法なのは明白だが、その入りの自然さと、異常なほどの太刀ゆきの早さが相手にまったく防ぐ手を与えなかった。

兵助とお了は、まだ指一本触れ合ったことがない。時たま会って、庭を歩き、父兵庫助の愛した仮山水をめぐり、言葉をかわすだけである。二人とも、それで充分に倖せだった。兵庫助の死後、その隠居料の三百石と、小林の別荘を兵助は貰っている。仮山水はその小林第にあった。お了と共に池畔を廻り、全く無表情な鯉の顔をつくづくと眺めながら、嘗て父に放ったのと同じ質問が、兵助の心に甦って来ることがある。

〈鯉を見ていて何が楽しいのか〉

だが近頃は表情のない筈の鯉の顔に、時に表情の掠めるのが見えるような気がすることがある。錯覚かとも思うが、その確信も持てない。確かなのは、その思いがお了から来たということだけだった。

「鯉が泣いています」

ある日、池畔に蹲っていたお了が、突然そう云ったのだ。しかも指さしている。何を馬鹿な、と思いながら、細そりとした指の美しさに惹かれて池の中を覗きこんだ兵助は、そこに確かに泣いている鯉を見た。しかも泣いている理由まで即座に悟った。鯉は鼻に傷を負っていたのである。岩にぶつけたのは明らかだった。兵助は印籠から薬を出して、その鯉の鼻に塗ってやり、傷のもとになった岩を探した。どんな理由か不明だが、一ヵ所欠けた岩がみつかった。兵助は庭師を呼んで、その岩を削らせながら、

〈俺は親爺と同じことをしている〉

と思い続けていた。

〈お了さんのせいだ〉

そうも思った。魚の心の分ることが、どれほどのものを人の心に付与するのか分明ではなかったが、ただなんとなく倖せだった。兵助はそれを、所詮はお了と共にいる倖せなのだと理解した。

道中

尾張から江戸は八十一里(約三百二十キロ)。馬をとばしにとばせば、丸一日の旅程だったが、利方・兵助兄弟はそれ程いそぐ旅ではない。江戸で待っているのは大事な試合なのだから、充分に体調を整えておく必要があった。万ずに無理は禁物である。だからこの旅に馬で三日をかけるつもりでいた。道中二泊することになる。

成瀬隼人正の警告を兄弟は忘れてはいない。だから道を往くのは必ず日中の明るい間だけに

し、食事も宿のものは口にせず、連れていった家僕の直吉の調理するものだけ食した。湯茶のたぐいも同様である。いかに裏柳生の義仙が無法でも、白昼街道で人を襲うことは出来ない。そんなことをすれば、江戸柳生は忽ち潰されてしまう。また直吉がゆきずりの店で買う食物に、毒を混入出来るわけがなかった。予定の二泊を無事に終えて、さすがに二人ともほっとした。松平伊豆守の警告は杞憂に終ったのである。考えて見れば、老中に察知されている凶行を、義仙ほどの男が犯すわけがなかった。犯せば疑われるのは目に見えている。将軍お声がかりの剣士を斬って、それが江戸柳生の手の者と知れれば、矢張り家は潰されるだろう。江戸はもう目と鼻の先である。兄弟はようやく警戒心を解いた。まさにこれが義仙の狙いだったのだが、兄弟は気付かなかった。

　川崎の宿で小さな異変が起きた。

手違いで更え馬がおらず、兄弟は暫く待たされる破目になったのである。江戸期の宿駅の制度は厳重を極め、前の宿で雇った馬をそのまま乗り継ぐことは許されなかった。必ずその宿の建場で新たに馬を雇わねばならない。

　待っている間に兄弟は異常なほどの渇を覚えた。昼食の菜が辛すぎたのである。しかも旧暦三月下旬の陽は意外に強く、汗ばむほどの陽気だった。

「直吉。湯はないか」

　たまりかねて利方が下僕に声をかけた。

「申しわけございません」

　直吉が腰の竹筒を逆さに振って空であることを示した。

「あそこに井戸がありますが……」

成程、建場の脇に釣瓶式の井戸が見えている。汲みたての水に毒があるわけがない。

　しかもこの水が、冷く美味だった。利方は、もう一杯、と所望し、更に竹筒にも詰めておくように命じた。直吉は、兄弟の見ている前で、釣瓶の水を竹筒に移した。

　兵助は遂に一滴も、この水を呑んでいない。

　やっと馬が来たのは、午後の陽が大分廻ってからだ。兄弟は早速出発した。なんとか陽のあるうちに市ケ谷御門外の尾州藩上屋敷に入りたかった。それが無理なら、夜に入ってでも、築地の中屋敷まで辿りつきたかった。

　馬にまたがると、利方は更に一杯の水を欲した。

「まだ冷えておりますから」

　直吉はそう云って、竹筒を渡した。利方が咽喉仏を見せて、うまそうに竹筒から水を呑む様を、兵助ははっきり覚えている。

　街道に出ると馬を走らせた。直吉には遅れてもいいと申し渡してある。兄弟は馬をとばしにとばした。

　六郷川を渡り、大森を過ぎ、鈴ケ森に近づいたあたりで、それが起きた。

利方が落馬したのである。それも、手綱まで手放すというみっともない落馬の仕方だった。馬はまるで申しわけないとでも云うように、兵助がとり抑える隙もなく一散に走り去った。品川の建場に向ったに違いなかった。

考えられない事故である。利方は馬術でも名誉の腕前である。それに軀に変調がなくて、こんな落ち方をするわけがない。

下馬して、倒れている利方を覗きこんだ兵助は、ほとんど茫然となった。利方は眠っていた。かすかな寝息さえたてて、熟睡している。

眠り薬を盛られたに違いなかった。そうとすれば、いつ、どこで？　兵助の眼に、利方の腰につけた竹筒が映った。直吉が出発間ぎわに渡してくれたものである。同時にその水をあおっている利方の咽喉仏の映像がちらりと脳裡を掠める。

〈竹筒だ。竹筒に眠り薬が仕込んであったのだ〉

このやり方なら、兄弟の目の前で堂々と汲みたての水を移すことも可能である。

兵助は街道を眺めた。追ってくる筈の直吉の姿は見えない。今頃は西に向って、それも脇街道を必死に辿っている筈である。考えてみれば直吉という男は、小才はきくが実のない男だった。家族もなく、気楽な独り暮しである。これは金で殺されるのに最も適した立場といえた。そんな男を、大事な旅の従者に選んだ自分たちの不覚である。誰に文句をいう筋でもなかった。

肝心なのは、薬が眠り薬だけか、ということだ。兵助は仔細に利方の症状を調べた。別段他に

異常があるようには思われない。それに直吉のような小心な男に、人一人殺すような毒薬を与える者はいないだろう。恐怖のあまり何もせずに逃げ出すか、逆に主人に真相を告げるくらいがおちだからだ。

では義仙の目的は兄弟の双方、あるいはせめて一人だけでも眠らせることにあったということになる。だが何のために？　利方一人が眠ったとしてもたいした違いはない。兵助が自分の鞍壺に利方を乗せ、疾駆させれば足りる。

兵助は先ず利方を街道脇の松の木蔭に移すと、自分の馬を調べはじめた。蹄鉄がなかった。道理で大分前から馬の歩行がとどこおり勝ちだった。このままでは、馬は品川までもつわけがない。

「すまなかったな。知らなかったんだよ」

兵助は馬を撫でながら詫びた。

これで義仙の意図は明白になった。兄弟を陽のあるうちに江戸に入れたくないのだ。品川の手前で夜を迎えさせたいのだ。勿論、闇にまぎれて襲うためである。宗冬との試合を阻止し、宗冬に不戦の勝ち名乗りをあげさせるためだ。

〈くだらないことに手間をかけるなあ〉

兵助は苦笑し、脇でぐっすり眠りこけている利方をつくづくと眺めた。

〈ゆっくり軀をやすめておいてくれよ、兄者〉

そして兵助も仰向けにひっくり返ると、忽ち眠った。

利方が目覚めたのは、夜もとっぷり更けた四ツ時（十時）である。同時に兵助もすっと身を起した。兵助は熟睡しながらも、尚、目覚めていた。これは兵法者に限られた特技ではない。どんな人間でも、危険に曝されれば自然にやってのける、いわば防衛本能に従った行為である。

利方はゆっくりと空を眺め、兵助を見、一頭だけつながれている馬を見た。

「眠り薬だ。直吉だな」

断定だった。兵助は頷いた。

「何故あの馬で運ばない？」

「蹄鉄がない」

利方が呻いた。

「旅の者に頼むことも出来た筈だ。川崎の問屋場にしらせれば……」

「しらせたくなかった」

利方が黙った。確かに問屋場にしらせることは尾張柳生の、ひいては尾張家の恥辱を曝すことになる。それだけは避けねばならなかった。

「軀に異常は？」

今度は兵助が訊く。

「ない。眠っただけだ。だが何のためだ？」

「夜を待つためだろう」

「朝まで動かなければいい」

「そうはさせてくれないだろうな」

兵助は初めて白い歯を見せて笑った。

介者剣術

さすがの兵助も、裏柳生の義仙が、これほどの人数で襲って来ようとは、夢にも思っていなかった。

義仙はなんと二十四人の裏柳生を、この作戦に投入した。なんとしてでも、或るいは何をしてでも宗冬に勝利を掴ませたい、という義仙はじめ江戸柳生の意気ごみが、そこにはっきりと現れていた。

三人を一組とし、二組六人で前後を囲む。その背後に予備の二組がいる。一人でも倒れれば、次の組が替る。兵助と利方にそれぞれ四組十二人ずつを向わせる襲撃法だった。このやり方だと、攻撃に一瞬の隙もなくなる。どんな達人でも、一瞬の絶え間もなく攻めを続けられれば、防禦一辺倒にならざるをえないし、いつかは息切れすることになる。それが義仙の狙いだった。

最後の詰めは義仙自身と横地太郎兵衛がすることになっている。横地太郎兵衛は巨人だった。

身の丈七尺二寸（二メートル十八センチ）、横幅も二抱えはある。錣頭巾を目深にかぶり、全身を鎖帷子で蔽っている。更にその背に負った刀が凄かった。刃長三尺六寸（一メートル余）、柄の長さ一尺五寸（約五十センチ）、併せて五尺一寸（一メートル五十センチ）という肉厚の大太刀なのである。こんな大太刀は常人には抜くことさえ出来ない。まして振り廻すなど論外である。太郎兵衛はこの刀を恐ろしいまでの早さで、楽々と振ることが出来た。

実はこの横地太郎兵衛は柳生の男ではない。もともとは薩摩人で、古い介者剣術の達者である。介者剣術とは戦場で重い鎧を着た者同士が闘うために編み出された、実戦一点張りの剣法だ。ほとんど全身を鎧でかためているのだから、当然防禦は鎧に委せ、攻撃一辺倒の剣になる。それも狙う個所は四ヵ所しかない。鎧の効果の及ばない所、つまり眼、咽喉、右手の拇指、最後に睾丸である。この四ヵ所に向って猛烈極まる攻撃を休むことなく加えるのが、介者剣術の恐ろしさだった。

新陰流をはじめ、近世の剣法はすべて、この介者剣術の否定の上に成立している。介者剣術のゆきつく先は結局術ではなく力である。軀が大きく、長い刀が使え、膂力にすぐれた者が勝つ。そんな当り前の論理では、平凡な体軀の持主は常に殺されるしかなくなってしまう。その貧弱な体軀をもってしても勝てる術が近世の剣法だった。

だが利方や兵助の世代は、ほとんど戦場を知らない。従って真の介者剣術を見たことがない。そこに盲点があった。義仙はその盲点をつくために、わざわざこの巨人を高額の金を払って雇ったのである。

戦闘は、だが、義仙にとって思いもかけぬ形で開始された。

義仙は二十四人の部下を二手にわけ、それぞれを兵助と利方に向わせるつもりだったのだが、兵助がその形を許さなかった。

「うしろを……兄者」

叫ぶなり兵助は走っていた。

「承知」

利方は叫び返すと、その兵助の背に己の背をうちつけるような形で、同様に走りだした。つまり利方は、うしろ向きに走ったことになる。義仙と二十四人の裏柳生は、ほとんど呆気にとられたと云っていい。彼等はこんな奇妙な戦形を、生れて初めて見た。確かに二人の男が多数を相手に闘う際、背中合せになることはある。だがこの場合、二人はほとんど静止している。動く時は、背をはなして個々に動き、また背中合せの形に戻る。それが普通だった。兵助のとった戦形は、これとは全く異質なものだった。なにより走るのである。それも恐ろしい迅さで右に左に、自在に走り廻る。そして利方の方は、まるで膠で貼りつけられたように、その兵助の背に己れの背をぴたりと密着させたまま、同じ迅さで、だがうしろ向きの形で走った。兵助が右に走れば右に、左に走れば左について来る。まるで四本の手と四本の足をもった人間のようだった。そして

走りながら、両人とも脇差の片手斬りで、眼前に立つ敵を、これまた凄まじい迅さで斬ってゆく。

兄弟の移動の迅さに裏柳生の男たちは到底ついてゆけなかった。従って輪を作ってとり囲むことが出来ない。それどころか二人の片手斬りを逃れるために、逆に次第々々に密集隊型にされていった。それは羊飼いの犬が羊たちを集める動きによく似ていた。こうして一団となった裏柳生の角々を、兵助が斬ってゆく。通りすぎる間際に、その隣りの男を利方が斬る。裏柳生の集団は、兄弟の影をしかと捉えられぬままにその数を減らしていった。

義仙が我に返った時は、ほとんど半数の裏柳生が地に這っていた。義仙は思わず呻いた。完敗である。このままでは、全員を失うことになる。義仙が引揚げの合図をしようとした瞬間、横地太郎兵衛の鉄鎖で蔽われた手が肩に置かれた。

「手前の出番のようです」

「だがあの迅さでは……」

云いも終らぬうちに、太郎兵衛は疾走をはじめていた。それは信じ難い光景だった。身の丈七尺二寸の巨人の疾走は、驚くほどの迅さと勢いだったのである。熊のように身を屈め、いつ抜いたか刃長三尺六寸の大太刀を目の前に垂直に立てている。典型的な介者剣術の構えだった。太郎兵衛の突進は、兵助兄弟と軌跡を交叉する筈だった。交叉していれば、果して何が起っていたかは不明である。だが交叉は行われなかった。兵助がぴたりと静止したからだ。戦闘開始以来初め

て兵助は足をとめた。理由は兵助にも分らない。本能的な何かが、この野獣めいた生き物との軌跡の交叉を危険だと兵助に教えた。

兵助たちの静止と共に、太郎兵衛も停まった。太刀構えはそのまま、丸めていた軀をゆっくり起していった。熊が四つん這いから二本足で立ってゆくのに似ていた。体長七尺二寸の巨大な熊が兵助の眼前に立ちはだかった。太刀構えが自然に八双に変化し、太郎兵衛の左肩が、さあ斬れというように突き出されている。

太郎兵衛の眼光は炯々として、圧倒するように兵助を見おろしている。

大太刀が更に高くうしろに引かれた。

「離れる」

低く云うと兵助は大きく左に動いた。利方は逆に右に動く。表裏一体の戦形が、初めて破れた。兵助は太郎兵衛に、利方は義仙と生き残った裏柳生たちに対する形になった。二人とも脇差を軽く振り上げた姿勢だ。それは自源流の『とんぼの構え』に似ていた。

数瞬が流れた。

その間に兵助は、太郎兵衛の全身が、頭から脚まで鎖帷子で蔽われていることを知った。そしてこれが介者剣術であることを知った。鎖が鎧の役を果たしているのだ。

義仙は漸く我をとり戻し、残った裏柳生を散開させ、利方と兵助を大きくとり囲む隊形をとることが出来た。だが生き残った裏柳生、僅かに八人。なんと十六人の男たちが、地に這って二度

と起きることはなかった。
また数瞬が流れた。
何かが兵助に動くことを禁じていた。だが動くべき場合だった。兵助は本能の告げるところに敢て逆らって、僅かに左に動いた。
太郎兵衛が更に大きくなった。爪立ちしたのである。見上げるような高さに達した。
正にその瞬間、太郎兵衛の姿が消えた。跳んだわけではない。全身を蔽う鎖帷子をつけて、跳べる人間はいない。
太郎兵衛は地べたに転ったのである。仰向けに転るなり足から先に兵助に向って滑っていった。大太刀は八双からまた目の前に垂直に立てた形に戻っている。その大太刀を、滑りながら斜め上方に突き出した。これは兵助の睾丸ないし会陰部を狙ったものだ。介者剣術独特の戦法だった。相手が鎧をつけている場合は、左手で敵の草摺り（垂れ）をまくり上げ、右手で突くという。鎧に蔽われていない股間への、効果的な攻めだった。刺突に失敗すれば、そのまま敵を組討ちに引き込む作戦である。
刃長三尺六寸肉厚の大太刀は、この時、凄まじい効果を上げることになる。まるで槍で下から突かれた形になるのだ。下から伸びて来るものは、よけるか、払うか、打ち折るしか防ぎようがないのだが、この剛刀を打ち折ることは不可能であり、払うことも難しい。逆にはじき返されるからだ。よける余裕もない。突然地に這った意外性と、七尺の長身の滑る早さが、咄嗟に跳びの

くことを許さなかった。正に必勝の攻撃法といえた。
兵助の天才が発揮されたのは、この瞬間である。太郎兵衛の大太刀が地から突き上げられた時、この男はその大太刀を払いながらまっすぐ上に六尺を跳んだ。
これで太郎兵衛の奇襲は見事にかわせた筈だった。だがこの時、兵助にとって生涯の不幸が起った。大太刀を払った刀が、二つに折れてけしとんだのである。だが、さすがに兵助だった。空中に身を置きながら、折れた脇差を義仙に向って投げ、着地と同時に抜き討った太刀が、太郎兵衛の鎖で蔽われていない顎の下を充分に断っていた。太郎兵衛の首はほとんど両断されたと云う。
義仙は、兵助の飛ばした折れた脇差を受け損じ、顔に深い傷を負った。寸前まで脇差の飛んで来るのに気付かなかったのである。脇差は義仙の双眼の間を狙って飛んだ。一種の死角である。僅かに顔を振って致命傷を避けることが出来たのは、義仙の鍛練の凡庸でないことを示していた。
だが、今度こそ義仙は恐慌に捉えられた。
「退け！」
短い号令と共に、生き残りの裏柳生の姿が瞬時に消えた。全員、信じられぬほどの兵助の剣技に、おびえきっていた。素早い逃走がそのおびえの深さを如実に示していた。
兵助と利方の兄弟だけが深い闇の中に立っていた。あとは十七体の屍だけである。

「行こう」

利方が声をかけた時、兵助がゆっくり腰を沈めた。あぐらをかくように坐りこんだ。その股間がべっとり血に塗れていた。

太郎兵衛の大太刀の切先は辛うじて兵助の股倉に届いていたのだ。脇差が折れたために払いが不充分だった結果である。太郎兵衛の狙ったように会陰部を突き刺すことは出来なかったが、切先は睾丸を破っていた。玉が二つとも、外にとび出してしまい、しかも傷ついていた。

品川の宿の医者が、破れた睾丸を八針縫ってくれた。生命に別状はなかったが、子を作ることのかなわぬ身になったことを、兵助は医師に告げられた。

子を作れぬ身で女と交ることは淫事にすぎない。兵助は一生女人を断つ決心をした。不犯の誓いである。お了の俤を、断腸の思いを籠めて切って棄てた。

そして兵助は、柳生宗冬を殺す覚悟を固めた。

試合

上覧は将軍家光の御座所で行われた、と兵助自筆の覚え書にあると云う。この覚え書によれば上覧は次のように行われたらしい。

初日。四月五日。

一、燕飛（六箇の太刀）
一、三学（五箇の太刀）
一、九箇（九箇の太刀）
一、小太刀（三）（以下括弧内は番数）
一、無刀（三）
一、小太刀（四）
一、又、小太刀（五）

いずれも、利方と兵助によるいわゆる型試合によって上覧に供された。小太刀の番数が総計十二番にものぼっているのは、江戸柳生には小太刀（『小転』と云う）の術が少なく、家光には珍しかったからである。続いて、

二日目。四月六日。

一、小太刀（五）
一、無刀（三）
一、相寸（五）（相互に中太刀を使うものである）
一、又、小太刀（三）

この日も小太刀を八番も見ている。家光の『小転』についての興味の深さを如実に示すものだ。

問題の御前試合は、この後、暫くの休憩の後に行われることになった。休憩は兵助のためというより、家光のためだった。家光の病いはそれほど重かった。だがうわべはやや安定しているように見えたらしい。この頃の医師の記録には『御気色よろしく』という言葉が頻出している。

兵助はただ一人、御座所の次の間に控えていた。この試合は人払いの上行われると、ついさっき云い渡されたところだ。観るのは家光ただ一人。演ずるは柳生宗冬と柳生兵助厳知の二人。三人だけの御前試合である。兄の利方さえ列席を禁じられた。

兵助は端坐したまま、瞑目して動かない。別して心を鎮めているわけではない。股間の傷の痛みに耐えているのである。型試合の激しい動きで、また傷口が開いたらしく、僅かに出血して褌を染めていた。そして脳天にまで響くような痛みが、間歇的に襲って来る。それ自体はたいした傷でもないのに、痛みがひどいのは、兵助の軀が自分の喪ったものの大きさを訴え嘆いているかのようだった。

人の気配に兵助は目をあけた。お坊主が一人、茶を捧げて入って来る。兵助の前に低頭すると、無言で茶を勧めた。

兵助はなにげなく茶椀を手にとった。ふと何事かを感じ、お坊主の眼を見た。くい入るように茶椀を見ている。尋常の眼ではなかった。そこに示されたものが恐怖であることを悟ると、兵助は静かに茶椀を元に戻した。茶には毒が混ぜられていた筈である。江戸柳生の黒い手は、お坊主にまで及んでいたのだ。兵助の心に、今更動揺はない。既に宗冬を殺すと覚悟している。それに付け加えるべきものは何もなかった。

兵助は間違っていた。このお坊主に毒茶を持たせたのは、宗冬ではなく、家光だった。家光は既に鈴ケ森での決闘を知っている。兵助兄弟を常時見張らせておいたのである。兵助の油断のなさも、その凄まじい剣技も、その怒りも知っている。毒茶は最後のだめ押しだった。兵助の怒りを頂点まで沸騰させ、宗冬殺害の意志を確固たるものにするのが狙いだった。

御座所の反対側の次の間で、柳生宗冬は文字通り慄えていた。膝に置いた双の手の指が、己れの意志とは関わりなく、まるで別個の生きもののようにぴくぴく動いている様を、茫然と見ていた。今の宗冬の心に、もう恐怖はない。深い諦念だけがあった。それなのに、軀だけが心と無縁に恐怖している。奇妙な、しかも胸に沁み透るように悲しい眺めだった。

義仙から襲撃の失敗を告げられた時、宗冬は死を覚悟した。義仙の語る兵助の闘いぶりはまさしく阿修羅だった。どう考えても太刀討ち出来る相手ではなかった。しかもこの卑劣な襲撃で、若い兵助は怒り猛っている筈である。御前試合には今までも多くの死人が出ている。勿論、殺し

た者が罰されることはない。宗冬はこの度は自分がその死人になることを悟った。そしてその時、宗冬は初めて家光の意志を悟った。すべてが江戸柳生を取り潰すための罠だったのである。その罠に宗冬も義仙もまんまと乗せられてしまった。今更どうしようもなかった。何も彼も手遅れだ。宗冬は己れの不明の責めを、己れの死で償うしかなかった。そして江戸柳生は三代で絶える。

宗冬の目から一筋の涙が流れた。

無念だった。なんとも、思い切れないほど無念だった。

せめて一太刀、兵助に、いや、家光に酬いたかった。たった一太刀でいい。江戸柳生の怨念と後世の栄誉のすべてを賭けて、その一太刀が欲しかった。だが阿修羅のような兵助に、自分の太刀が届く筈がない。

宗冬はまた、もう何度目かの諦念に心を沈ませるしかなかった。

お坊主が入って来て、試合の開始を告げた。

兵助と宗冬は家光に爪甲礼をすると静かに立った。これは、上覧試合の場合の礼で、頭を下げることなく、軽く頷くだけのものである。

間合は五間。

宗冬は三尺三寸（一メートル）の定寸、枇杷の蛤刃の木太刀。中段に構えている。

兵助は自身の考案になる二尺の小太刀（小太刀の定寸は一尺七寸五分である）、同じく枇杷の蛤刃の木太刀。だが宗冬のものと違って鍔がなかった。右片手にだらりと下げて、太刀先は僅かに左斜下を指している。いわゆる構えではない。新陰流に云う『無形の位』である。

兵助は静かに宗冬を見た。

宗冬の顔が『泣いて』いた。お了と共に見た小林第の池の鯉さながらに『泣いて』いた。

「鯉が泣いています」

お了の声が聞えた。

池の中を差しているお了の白い細い指。

澄明な水。花影がその水に落ちている。

鯉は水の中で、鼻を痛めて泣いていた。

この男は、どこを痛めて泣いているんだろう。

不意に、兵助は家光もまた『泣いて』いるのを気配で知った。

何故だ？　なぜこの男たちは二人揃って『泣いて』いるんだ？　何のために、何に向って『泣いて』いるのか？

男たちの、生涯を賭けた何物かが、或るいはなんらかの情念が、この二人を泣かせているのだ。卒然とそう悟った時、兵助は正しく池を覗きこんでいた。すべてが澄明な水の中の出来事と見えた。それはすべて、そこはかとない耀きを水によって得ていた。すべてが耀き、すべてが哀

しかった。そして兵助は明らかにその池の外にいた。
「鯉のどこがそんなに面白いんですか」
自分の声が聞えた。馬鹿だなあ、俺は。
「魚になるのが楽しいだけだ」
父の声がする。
親爺は池の中に人の世を見ていたんじゃないのか。ちらりとそう思った。それとも、鯉になることによって、池の中から人の世を見ていたのかもしれない。
唐突に宗冬の『泣いて』いるわけが分った。一太刀。一太刀でいいから浴びせたい。己れのためにも。江戸柳生のためにも。宗冬はそう呟きながら『泣いて』いた。
〈いいじゃないか。斬られてやろう〉
兵助はそう思う。鯉のささやかな望みをかなえてやってどこが悪い。もとよりそれは試合に負けることではなかった。
〈肋一寸だ〉
『肋一寸』は新陰流の極意の一つである。己れの肋一寸を斬らせて、敵の生命を絶つ。
〈なにも殺すことはないな〉
袴の裾を軽くさばいて、するすると間合をつめながら、そう思った。
宗冬は瞠目した。動けなかった。兵助の歩みがまるで自然なのである。『鳶が羽を使うが如く』

と後にこの時の足さばきは評されているが、それほど楽に、自然に、そしてなにげなく、兵助は既に一足一刀の間境を越えようとしていた。
宗冬ははっと我に返った。たった一太刀！　執念の一太刀を振りおろす時が、今まさに過ぎようとしている。宗冬が双手中段の太刀を右片手上段に執り、兵助の左の頸の付け根から右肋骨にかけて、斜太刀に打ちおろしたのは、夢中のなせる業だった。蛤刃の木太刀は、まるで剃刀のように、兵助の着衣の胸を左から右斜下に切り裂いたと云う。
同時に兵助の木太刀は、宗冬の木太刀を握る右拳を打つともなく自然に打ち、その手の甲を粉微塵に砕いていた。

*

宗冬は家光の死後、四代将軍家綱に必死の忠勤を励み、ようやく寛文五年、この御前試合から十四年の後に、一万石の朱印を与えられ、大名に復した。江戸柳生の悲願が達成されたのである。
兵助こと柳生連也斎は元禄七年十月十一日、七十歳で死んだ。生涯不犯ゆえ、子はない。生前に詳細を極めた遺言状を作ったが、その中に二項目だけ異様な注文がある。
『われ等、ふと絶え入り候とも、灸、針、薬、用申す間敷候。死顔、見申間敷候。若し不審事

これ有らば、甥達の内、一人に、庄兵衛、才右衛門（共に召使い）相添え、見申す可く候』

これがその一項だ。次いで第二の項目は更に異様を極める。

『もくよく（沐浴湯灌のこと）且而（決して）無用。着服のまま、乗物に入れ、焼き申す可く候。焼所は、南のさんまい（焼き場）にて焼き、とくと焼け候と、相見え候わば、水を懸け、火をしめし、はいを残さずたわらに入れ、小舟にて熱田海へ押しながし、すて申す可く候』

連也斎が最後まで軀の損傷を隠し通したことが、この文章でよく判ると思う。

連也斎の屍骸は、本人の望み通りに焼かれ、灰は海に捨てられたと云う。

柳枝の剣

九歳

「違う」
厳しい声とともに、ひきはだ竹刀が鋭い音をたてて又十郎の手首を打った。見ていた左門がぎくっとするほどの強打だった。
「ぎゃっ」
又十郎は己れのひきはだ竹刀を取り落とし、道場の床にぺたんと坐りこんだ。身体を丸めて打たれた手首を押さえている。骨に沁みる痛みなのだろう。呻きながら泣声をあげた。
〈まただ〉
左門はうんざりした。何かというとすぐ泣くのが又十郎の悪い癖である。又十郎が泣くと、きまって六歳年長の兄十兵衛は癇癪を起こす。癇を立てれば、余計ひどく打ちのめす。又十郎はますます泣くことになる。悪循環だった。
もっとも又十郎が泣いてもあながち無理とはいえない。又十郎も左門もまだ九歳なのである。

十兵衛は十五歳。体格も並より大きく強力無双といわれた。

父の柳生宗矩が今年から将軍家光の師範になり、型を示す相手に十兵衛が選ばれている。柳生新陰流の型はほとんど仕合と変わらない。宗矩は手加減もせず打ちこんで来る。受け損じたらこっぴどく打たれるから十兵衛は必死である。これで剣技が上達しなかったらどうかしている。十兵衛は父と同じ態度を、幼い又十郎と左門に対してとる。些かの容赦もなく、鋭く打ちこむのである。ひとつには父に対する憤懣もあった。十兵衛が父にされた通り家光を打ちこむと叱るからだ。剣の稽古に身分はない筈だ、と十兵衛は信じている。だから父の叱責が不満だった。その怒りを、揃って九歳の弟たちに吐き出すのだから、たまったものではなかった。

左門と又十郎は同い歳の兄弟である。左門が僅かの差で兄になる。といって双生児ではない。又十郎は正室のお玉の子だが、左門の方は妾のお藤が産んだ子供だった。お玉は直参松下石見守の娘、お藤は柳生の隣村阪原村の名もなき者の娘と書かれてある。それだけにお藤の美しさは群を抜いていた。抜けるように白い、肌理細かな柔肌、漆黒の豊かな髪、切れ長の目、ややうけ口の厚い唇。義理にも高雅とはいえないが、なんともいえぬ淫蕩な気配を濃密に漂わせている。男にとっては、たまらない女なのである。

左門はこの母親似だった。男の子にしては色が白すぎ、眉目も涼しい。唇が紅を塗ったように紅い。女の小袖を着せたら、そのまま美しい少女になりそうだった。又十郎の方は父親似である。色黒く、あくまでいかつい顔、手足も大きく、なんとも泥臭い感じがする。悪いことに又十

郎はそれを意識している。父親の見る目がはっきり違っているのだから、これは当然だった。だからいつもいじけている。子供の潑剌さがなく、愚図で年寄りじみていた。そして何かというと泣いた。泣きが又十郎の唯一の武器だったのである。だがこれは十兵衛にだけは通じない。

「また泣くか！」

はたして滅多打ちにあって忽ち昏倒した。

左門は無言で見ていた。

十兵衛が喚いた。

「何故とめん、左門」

「母が違うからか」

ひどいいいがかりだったが、左門はこの手のいたぶりに慣れている。顔色も変えずにいった。

「とめればもっとひどくぶつでしょう」

十兵衛がちょっと虚をつかれた顔をした。左門の云った通りだからだ。制止や意見は、十兵衛の兇暴さをかきたてる役しかしない。

「小ざかしい！」

十兵衛は左門を打った。左門は打たれた勢いを利用して一回転するとぴょこんと立った。あとはひきはだ竹刀を顔の前に垂直に立てたまま、打たれるに委せている。だがそれだけではなかった。前もって打撃の来る方向と場所を知り、僅かに先に動く。少なくとも動こうとする。その上

身体を硬くせず、柔らかに受けているので、その分、打ちの効果を殺している。十兵衛は忽ちその点を見抜いた。
〈こいつ、出来るようになるな〉
天稟を感じとったのである。それにしても顔をかばう垂直の剣が気に入らなかった。十兵衛は最高の迅さの斬撃を送り、左門の脳天を打った。左門は又十郎同様昏倒したが、その直前にひきはだ竹刀を上げて、一応だが十兵衛の剣を受けていた。十兵衛の打撃の強さが、受けの竹刀もろとも、左門の脳天を斬ったことになるが……。
〈恐ろしい奴だ〉
十兵衛は一瞬、左門の反射神経のよさに強い衝撃を受けた。
〈それに較べて……〉
ぶざまに伸びている又十郎を見た。ご叮嚀に青洟までたらしている。
十兵衛は又十郎を一蹴りして道場を出た。蹴りのお陰で息を吹き返した又十郎は、またびいびいと泣きだした。

十五歳

六年たった。

寛永四年。兄弟は十五歳になった。左門は友矩、又十郎は宗冬を名乗った。この年、左門は家光の小姓になり、剣の相手を勤めることになった。前年、五年間家光の相手を勤めた十兵衛が家光の怒りに触れ、側近を離れて小田原に蟄居し、やがて柳生の庄に引き籠ってしまったためだ。
十兵衛が遠ざけられた理由は、いくらたっても家光をこっぴどく打ちすえることをやめなかったためとも、放埒が過ぎたためともいわれる。十兵衛の放埒ぶりは余程有名だったらしく、品川東海寺の沢庵和尚が特に宗矩のために書いて与えた『不動智』の中に、
『御賢息御行状の事、親の身正しからずして、子の悪しきを責むること逆なり。先ず貴殿の御身を正しくなされその上にて御意見もなされ候わば、自ら正しく、御舎弟主膳殿も兄の行跡にならい正しかるべければ、父子ともに善人となり目出たかるべし』
と書いてある。さらに沢庵は宗矩が賄賂をとること、依怙贔屓の激しいこと、能が得意で人にも強要することなどをむきつけな言葉で叱責している。文中『御舎弟主膳殿』とあるのは又十郎宗冬のことで、宗矩の正妻の子は二人とも出来が悪かったようだ。宗矩の出世主義で強欲な一面が、この結果を招いたのかもしれない。
ひとり妾腹の左門友矩だけが、端正な生活を続けていた。女にも酒にも狂うことなく、この頃流行した踊りにも興味を示さない。ひたすら剣に没頭した。左門を教えたのは宗矩の高弟木村助

九郎だが、その助九郎が左門を「金春大夫の再来か」と称賛している。これは七代目金春大夫を継いだ金春七郎氏勝のことである。金春七郎は剣を柳生石舟斎に学び、慶長十五年、惜しくも三十五歳の若さで死んだが、不世出の剣の達人と評された人物だ。

『中々によハきををのがちからにて
柳がえだに雪折ハなし』

これは七郎が剣の極意を詠んだ歌だが、柔軟無類、まさに舞いを思わせる剣だったという。左門の剣はその柳のように柔らかな剣によく似ていた。

二十歳に達した十兵衛三厳の剣は凄まじい豪剣で、宗矩さえ受けかねる時があったが、左門はこの剣を十本のうち八本までかわすことが出来る。十兵衛が歯ぎしりして打ちこむのを、それこそ柳のようにかわし受け流すのである。さすがに打ち返すには至らないが、木村助九郎はこれを嫡子の兄への遠慮ではないかとひそかに疑っていた。十兵衛の思いも同じらしく、仕合うたびごとに叱責するが、左門は穏やかに微笑して、

「でも打てないんです」

そう答えるだけだった。宗矩が左門を家光の稽古相手に選んだのは、この穏やかさを買ったためかもしれない。だが家光に会ったことによって、左門友矩の人生は大きく屈折することになった。

*

「どうした。参れ。参らんか」

家光が喚いた。家光、この年二十四歳。宗矩について六年の研鑽の結果、殿様芸とはいえぬ剣の遣い手に成長していた。

左門は困惑していた。仕合をしようといわれたのである。今日は稽古日ではないので、宗矩がいない。それを理由に一度はことわったのだが、家光はきかず、到頭道場にひき出されてしまったのである。

左門の目から見れば、家光の腕は、いくら殿様芸を抜けているといってもそこそこのものでしかない。そのくせ傲慢な剣である。十兵衛が痛打を与えたくなるのも当然だった。だが打ちこむのは論外となれば左門のとるべき道は二つだけだ。打ちこみをかわしにかわし、最後に一、二本お義理に打たせるか、あるいは家光の得物を叩き落とす。左門は双方とも気に入らなかった。剣の稽古とはそんなものではない、という思いがある。この二つの手段は、ともに阿諛である。剣の道で立つ家が、剣の道で阿諛できるわけがなかった。こちらから打ちこむことなく、しかも剣は生き死にのものだと示さねばならぬ。

左門は心をきめた。手は一つだった。徹底的に打たれるしかない。家光を刺戟し、どうしても

必要なら怒らせ、徹底的に自分を打たせるしかない。昏倒するような打たせ方はしない。昏倒してはいけないのである。打たれても打たれても、平然と立っていなければならぬ。そのことで家光に恐怖を覚えさせなければならぬ。打たれることの、あるいは斬られることの凄絶さを示すことによって、剣とは生き死にの問題であることを、それ以外ではありえぬことを、いやというほど悟らせねばならぬ。

左門はひきはだ竹刀を下げ『無形の位』をとった。そのまますらすらとすすんで無造作に間境を越えようとした。

「それは悪し」

家光は宗矩の口ぶりを真似て叫ぶなり打った。左門は腕を打たれ、微笑した。九歳の時に身につけたこつで、打撃の力を殺している。そのまま、家光の身体にぶつからんばかりに間合をつめる。家光は跳び下って間合をとった。左門は前進をやめない。同じ軽い自然な足どりである。

「それも悪し」

家光が逆に一歩踏みこむなり打った。左門は胴を打たれ、また微笑した。家光にぴたりと据えた目は、打撃の痛みを些かも示していない。そのまま間合をつめる。家光は三度跳び下り、ひたひたと進んでくる左門を打った。今度は頭である。左門は軽く刃筋を避けて、肩を打たせた。袈裟斬りである。そしてまた微笑し、間合をつめてゆく。跳び下った家光は羽目板に身体をぶつけた。同じ足どりで近づいて来る左門を見る目に、恐怖が浮かんだ。人間はこわいと残虐になる。

それからの家光の打ちこみは数こそ多いが滅茶苦茶だった。刃筋が立っていず、真剣だったら恐らく殴るだけで斬れていない不様な打ちこみである。左門は一撃も避けることなく、常に微笑を浮かべて、前進を続けた。いくら勢いを殺していても、これだけ打たれて平気な筈がなかった。左門の身体は痣だらけだった筈だ。だが左門は微笑を消さず、息一つ切らさず、平然と間合をつめ続けた。

遂に限界が来た。左門にではない。家光にである。何度目かに羽目板にぶつかると、家光はそのままずるずると腰をおろした。両足を投げ出し、ふいごのような息を吐いた。顔色は蒼白だった。

左門は初めて足をとめ、微笑した。息も切れていず、涼やかな顔だった。すらりと云った。

「本日の稽古、これにて終わらせて戴きます」

家光は化け物を見るような目で左門を見た。

*

その晩、左門は高熱を発した。自分で水を汲み、打たれた個所を冷やし、薬を塗った。

一晩じゅうそれを続け、一睡もせずに翌日定刻に登城している。熱は引いていなかったが、気力で耐えた。あくまで涼しい顔を保った。

家光は依然として化け物を見るように左門を見ていた。

この日は稽古日ではなかったが、宗矩が御機嫌伺いに伺候した。その宗矩に家光がせがむように云った。

「余にもあれを教えろ」

「何でございましょう?」

「身体を鉄に変える法だ」

宗矩は苦笑し、当流にはそのような術のないことを告げ、海彼岸の明の国にその術のあることを仄聞したが、実際を見たことがないと告げた。

「嘘だな。現に左門がその術を使った」

「左門が?」

家光は昨日の仕合の様子を、克明に語った。己れの激しい恐怖、敗北感まで包み隠さず伝えた。宗矩は即座に左門の苦衷と、その剣に対する誠実さを悟った。

「左門をお呼び下さい」

左門は小姓部屋に端坐しながら、ほとんど失神していた。家光の前まで達するのが、死ぬほどの苦痛だったが、なんとか耐えた。

「熱が高いな」

一目見るなり宗矩が云った。

左門は無言である。

「御前ではばかりあるも、裸になれ」

左門は動かない。宗矩の胸に、急にこの伜へのいとしさがこみ上げて来た。

「上様はそなたが身体を鉄にする術を心得ていると思っていられる。それでは本意ではなかろう」

左門は無言のまま裃をはずし、着衣をはねて上半身を曝した。

家光が思わず声をあげた。

昨日の打撃の痕がすべて紅く腫れあがり、明らかに熱をもっていた。別して肩と脇腹、腕がひどい。首から上は奇妙にも無傷だった。

「ご覧の通りです」

宗矩が静かに云った。

「鉄の身体なら、かようにはなりますまい」

家光は見たものが理解出来ずにいた。

「ただただ打たれていたというのか」

「御意」

宗矩が左門にかわって云った。

「真剣なら膾のように切り刻まれていたぞ」

「御意」
　また宗矩である。
「だが……だが……余の負けだったぞ」
「御意」
　宗矩は微笑した。
「何故だ!?」
「上さまには死兵の恐ろしさにお負けになったのです。死人(しびと)が生者に勝つことのあることを、左門はお伝えしたかったのだと存じます」
〈そして本物の剣の稽古の恐ろしさを〉
と云うべきだったが、宗矩は黙っていた。家光に稽古を恐れさせてはならぬと判断したためである。剣法指南役としての打算だった。
「そなた自身は……」
　家光がその左門にじかに訊いた。
　左門は素早くそれを察して、かすかに唇を歪(ゆが)めた。
「それでなんの稽古をしたことになるのだ?」
　左門は微笑して、答えた。
「死んでなお勝つ法を……」

　家光にはこの言葉は分からない。
「剣法は死なぬためのものではないのか」
「黙って殺されねばならぬ場合もございましょう」
　家光は黙った。昨日の左門の姿が浮かんできた。斬られても斬られても、微笑しながら間合をつめて来る左門の、凄絶ともいうべき恐ろしい姿が……。家光は思わず慄(ふる)えた。
「そなたを斬った者は、終生、夢を見るだろうな」
　家光は剣の道の真の恐ろしさを知った。

*

　そして家光はその夜、本当に左門の夢を見た。
　純白の雪の肌のそこかしこに印された赤く腫れ上がった打撃の痕。それは痛々しいと同時に、胸をしめつけるような美しさを備えていた。元々がぬめるような肌理(きめ)のこまかい肌だからこそ、この美しさがある。
　夢の中で家光はその肌をそっと撫でた。さらさらと乾いて、ひんやりと冷たく、そのくせ吸いつくような手ざわりだった。目が覚めても、その触感が残っている。家光は暫く恍惚の中を漂っていた。隣りに女が眠っていた。手をのばしたが、すぐひっこめた。この肌はうっすらと汗ばん

で、ねっとりとしていた。
〈いやだな〉
身体をずらせて離れた。夢の中の乾いてさらさらした肌が好ましかった。
家光は深い溜息をついた。

次の日。
家光はまた左門を呼んだ。
「熱は下がったか」
「お気づかいなく」
昨日は大変だった。宗矩にしらされたお藤が目の色変えてやって来て、医師は呼ぶわ、侍女を一人つききりで傷を冷やさせるわで、左門はおちおちと眠ることも出来なかった。医師は身体じゅうに膏薬をべたべたと貼ったが、あまりの気味悪さにすぐはがし、水をかぶって身体を清めた。そのお陰でまた熱が上がったが、左門は侍女に厳しく命じて、お藤に知られないようにした。
実の母なのに、左門はお藤が苦手である。妙にべとべととまつわりつく感じが、たまらなくいやだった。それが色気というものらしいことは左門にも分かったが、それなら色気などというものは真っ平御免だった。

お藤は女の勘でそれを知っていたらしく、左門に付けた侍女は、およそ色気のない、少年のような姿態の女だった。名は半である。何より清潔な感じがよかった。その半が、
「お城にお上りになるのはご無理です」
顔色を変えて云ったほどの熱を押して登城した。
家光がつと立って来ると左門の額に触れた。
「まだひどいな。何故休まぬ」
「お気づかいなく」
左門はもう一度同じ返事をした。
「傷を見せろ」
宗矩のように、裸になれ、とは云えなかった。家光の方になんとない恥ずかしさがあった。
左門は躊いもなく、昨日と同様に上半身を曝した。赤い腫れはどうやらひき、今日は青痣になっていた。
家光はまたもや、美しい、と思った。躊ったが、そっと触れてみた。傷痕の熱は引いているようだ。
「痛いか」
「いえ」
触られると妙に疼くような感じがある。それだけだった。

家光は指を伸ばして傷のない部分に触れた。思った通りだった。陶器のようにすべらかで、さらさらと乾き、ひんやりとしていた。家光は無意識に、夢の中と同じようにそっと撫でていた。左門の肌がぴくりと慄えた。ちょっと身を引くようにした。反応のあったことが家光を大胆にした。白い肌の部分に、そっと唇をつけた。かすかに吸いながら、つつと唇を動かした。左門の肌がまたぴくりと慄えた。

軽いしわぶきの音がした。

はっと顔を上げた家光は、廊下に立っている人物を見て顔色を失った。それは大御所秀忠だった。秀忠は父家康にならって、早く将軍の座を家光に譲り、西の丸に入って大御所政治を行なっていた。自分がかつてそうだったように、家光には政治に深くかかり合わせることなく、重要なことはすべて自ら処理していた。

家光は秀忠が嫌いであり、同時に恐れてもいた。性酷薄（こくはく）な点は家康も秀忠も似たようなものだが、家康の陽に較べて秀忠はあくまでも陰である。何を見、何を考えているか、側近といえども窺（うかが）い知れぬところがある。それだけに不気味であり、恐怖のまとだった。

その恐ろしい大御所が、自分と半裸の左門を深沈とした目で見つめている。

「傷を改めていました」

家光は慌（あわ）てて云った。

左門は急いで衣服を改め平伏した。

家光がまた云った。

「私がつけた傷です」

「宗矩から聞いた」

秀忠は暗い声で云った。

「天晴れな男だ」

家光は自分がほめられたように嬉しかった。

「だがその者に手を出すな。宗矩の自慢の子だ」

厳しい声だった。秀忠は家光の癖を知っていたのである。

「きっと申しつけたぞ」

脳天唐竹割りのような命令だった。家光は一語も発することが出来なかった。

うつむいて辛（かろ）うじて憤怒の表情を隠した。

＊

その夜、左門は自分でも思いもかけぬことに、お半を犯した。別段女体を欲したわけではなかった。何か胸の中が騒いで、どうしても寝つけなかったのである。心配して膏薬を貼ろうとするお半の手を捉えて、自分の上に引きよせた。お半の身体を割り、侵入した時、左門はすぐ己れの

間違いに気づいた。お半は痛みがすぎるとすぐ悦びの呻きをあげはじめたが、左門はしらけていた。果てた後も、違うという感じは去らなかった。胸の騒ぎは一向におさまろうとしないのである。

「許せ」

左門がお半に詫びたのは、だから本気だった。お半は悦びに涙を流しながら、激しく首を振った。

〈お半は誤解している〉

左門は困惑していた。暁方、お半は再びすりよって来たが、左門は眠ったふりをしていた。

数日たってお藤に呼ばれ、問いただされた時も、正直に本当の気持を告げた。

「あの子なら大丈夫と思ったのに……」

お藤は落胆したように云い、お半には暇を出した。お半が大川に身を投げたことを、左門は大分たってから聞いた。すまぬことをした、と心から思った。だがどう仕様もなかった。その時の、またそうなった後の女の仕種が、左門にはわずらわしいとしか感じられないのだった。どうしてもっと淡白に出来ないのか、そう思う。君子の交わりは水の如し、という。そうしたさらりとした愛があってもいいではないかと思う。女の愛には節度も恥じらいもない。そして凄まじいまでの所有欲がある。本来所有欲は愛からもっとも遠いものなのではないか。それなのに女は、その所有欲さえ愛のあかしだと思いこんでいる。もっとも頻繁に愛について語りながら、もっと

も愛には無縁な存在が女なのではないか。それに愛について語るとは何か。愛は語るものなのか。己れのうちこんでいる仕事について、己れの夢について、人の世の素晴らしさ、醜さについて、深い理解をもって話し合いながらそこはかとなく倖せを感じることこそ愛なのではないか。そんな愛が女たちと果たして交わされるものだろうか。そんな愛に応えられるのは、男しかいはしない。衆道というとひどく忌わしい感じがするが、それは女たちの嫉妬にすぎないのではないか。男を本当に理解できるのは男だけである。理解の上に基づいた愛を望むなら、男は男しか愛の相手に選ぶことは出来まい。

二十二歳

だが左門と家光の愛の成就には、七年の歳月が必要だった。大御所秀忠の厳しく酷薄な目が、二人の上にじっと据えられていたからだ。

寛永九年正月、秀忠はやっと死んだ。その年、柳生宗矩は家光から三千石の加増を受け惣目付の要職につけられている。

その翌々年、三十一歳の家光は初めて京に上った。実に三万の軍勢をひきつれた示威行動だった。家光が真の将軍になったのはこの時からだ。左門は徒歩頭としてこの上京に供奉した。父の宗矩も同行している。そしてその帰途、久能山に立ちよった時、家光と左門は初めて結ばれた。

左門は二十二歳の匂うような若武者だった。

左門は倖せに酔った。初めて真実の恋の相手を得たからだ。徒歩頭として二千石の領地を得たことも、父の宗矩が遂に一万石の禄を得て大名の座に列なったことも、この倖せには無縁だった。純一無雑の恋だったのである。恋を得た乙女同様に、左門友矩は花の咲いたように美しさを増した。誰の目にも隠しようはなく、また家光も左門も隠そうともしなかった。

家光はかつて自分の地位を奪いかけた、弟であり宿敵でもある駿河大納言忠長を自殺に追いこみ、年来の宿願を果たした。もう家光を邪魔する者は、この世に一人もいなかった。

家光は左門との恋の永遠に続くことを信じた。

二十六歳

「これ以上、放置するわけにはゆきません。あれは柳生一門の恥辱です」

寛永十五年。宗矩が大名に列してから二年たっている。

ここは虎の御門にある柳生藩上屋敷だった。

百目蠟燭の下に、三人の男たちが集っている。柳生宗矩と嫡男の十兵衛三厳、そして又十郎こと主膳宗冬である。

又十郎は左門の剣技が上達すればするほど、剣法が嫌いになっていった。病と称して稽古を休んでは、能楽にこり、やがてその道ではひとかどの男になった。奇妙なことに能に秀でるようになると、逆に剣への関心が深まって来た。今までいやいやさせられて来た剣の稽古が、全く違う形で目に映って来たのである。

元来、能と柳生新陰流はどこかで深く関わりを持っていたらしい。

『(柳生新陰流は)技法、心法の具体的内容に関しては、大和の国という同じ文化基盤に成立した能と、かなり緊密な交渉があったらしい』

と柳生研究の第一人者渡辺一郎氏も指摘されている。宗矩の高弟木村助九郎の手になる『兵法聞書』には、金春流猿楽に『一足一見』という秘伝があり、柳生石舟斎はこの秘伝を手に入れるために、柳生新陰流の秘伝『西江水』との秘事交換を金春七郎の父、六代目金春大夫八郎に申し込んだことが書かれてある。『西江水』とは『石火の術』であるという註解があるが、『一足一見』が何を意味するかは筆者には分からない。

とにもかくにも、能は又十郎に剣法への新しい目を開かせてくれた。又十郎は剣法修行のために山へ入ったと伝えられている。あるいは十兵衛と同じく柳生の庄に籠り、石舟斎以来の剣の道を引き継いだ古い弟子たちを頼り、本来の柳生新陰流の研鑽に明け暮れたのかもしれない。父宗矩の柳生流は石舟斎の正統からは大分はずれたものだった。宗矩は柳生家再興の悲願を背負って、若年から各地を遍歴しており、石舟斎に手ずから教えを受けた年数はごく短い。だからこそ

石舟斎は一国一人の新陰流の道統を、宗矩ではなく、その甥である柳生兵庫助に譲っている。

又十郎はこの数年の研鑽によって、生まれ変わったような剣士として江戸に戻って来ていた。左門が家光の寵愛を受けるようになってから、又十郎も三百石の封禄を貰っている。十兵衛もまた御書院番の地位にあった。柳生一族は父子共に幕府に重用され、石高は少なくとも羽振りのいい立場にあった。

それがすべて左門のお陰だというのは間違いだろう。少なくとも宗矩の大名昇格と惣目付就任は、秀忠の遺志ではないかと思われる。秀忠の時代には完全な蔭働きだった隠密の役目を、自分の死とともに公けの立場に直させたのである。家光には、柳生を蔭で働かせておくだけの陰険さも才覚もなかったからだ。

だが、秀忠時代の宗矩の働きは極秘である。当然、幕閣のごく一部を除いては、誰一人知る者がない。人々の眼前にあるのは、柳生新陰流の総帥、将軍家剣法指南役という表向きの顔だけである。剣法指南役に一万石の禄は大きすぎる。新陰流道統の正式の継承者である柳生兵庫助さえ尾張藩剣法指南役としての禄高は、たかだか五百石にすぎない。

宗矩の一万石は世人には不可解である。もっと不可解なのは、左門の二千石だった。しかも家光と左門がほとんど公然の仲だったのだから、ろくでもない噂が立つのは当然といえた。

「但馬殿はまことによい御子息に恵まれなされて」

という間接話法型から、

「先祖代々の槍先の功名も、遂に尻一つに及ばぬとは世も末だ」

という直接話法罵倒型まで、それこそ蜂の巣をつついたような騒がしさがいつまでも続いたのである。

最悪の噂の火元は、奇怪にも家光の側近である小姓組から出ていた。左門と家光の恋がなまじ真正の恋だったのがいけなかった。小姓組の何人かは、家光の寵をえていた。だがそれはあくまで情事であり、ほとんど肉体的なもののみにとどまっていた。左門の場合のように、七年も待った全身全霊の恋とは較べようもなかった。だが情事の相手が、本物の恋の相手に強烈な嫉妬を抱くのは、女も男も変わりはない。八つ裂きにしてもあきたらない恋敵である。その上、左門の名誉の剣は高名である。つまりこの恋敵は、天下無双の剣の達人でもあるのだ。いかに憎み嫌おうと、喧嘩を売って殺すことのかなわぬ相手なのだ。殺されるのは喧嘩を売ったほうにきまっていた。まるで万全の恋敵だった。それだけに憎む者たちの怨念は深い。

左門は今や四面敵だった。大名、直参はもとより、御台所を初めとする大奥の女性たちまで、左門に憧れ、左門を憎んだ。そして、そのとばっちりが柳生一族に及んだ。

最も困難な立場に立ったのは、他ならぬ宗矩である。惣目付とは、大名ぜんたいの監察に当たる職務である。諸大名の政治のしぶりから奥向きの行状まで探索の手をのばし、少しでも傷があるとその大名を呼び出して注意を促し、それでも聞かぬ場合はその家を潰すこともある。そんな立場にいる者の伜が将軍の愛人ではどうにも格好がつかないのは当然だった。もっと困るのは、

倅を将軍に捧げることによって今の地位を得た、という評判だった。秀忠時代の実績をもち出すことが不可能である以上、この評判については歯をくいしばって耐えるしかない。

十兵衛は十兵衛で、御書院番という役柄上直参旗本たちからの絶えざるいやがらせに曝されている。永い柳生の里暮しでかなり抑えられるようになってはいたが、十兵衛の癇癪は今にも爆発しそうなところまで来ていた。一触即発といっていい。明日にでも、城中で十何人かの直参たちが叩っ斬られるという惨劇が勃発しても少しもおかしくない状態だった。

それでも宗矩と十兵衛の立場は、又十郎宗冬よりましだった。この二人は地位の上からいっても、剣の腕からいっても、そう軽々に嘲(あざけ)ることの出来る男たちではない。ましてからかうなど論外だった。いつむかっ腹を立てて剣をすっぱ抜くか分からない。

そこへゆくと、少なくとも外見上は又十郎は穏やか一方の男である。剣の腕もそれほどのことはないという噂だったし、なにより内省的で無器用で、はきはき口もきけない田舎者だった。ただでさえ、からかいの対象にぴったりの男だ。あてこすり、嘲笑、罵言、それこそ雨霰(あめあられ)である。左門に較べればまことに不当な待遇であり状況だったが、意外にも又十郎本人はさほど気にかけていなかった。幼時から兄に、次いで父に、罵詈雑言(ばりぞうごん)を浴びせかけられて育ったために、この手のことに慣れていた。今風にいえば挫折に強い型なのである。左門との不平等にしても、当然のことだと思っている。これも幼時からの慣れでもあったし、そのうえ又十郎は平気で左門の才能を認めていた。

〈左門はひどい損をしている〉

逆にそう思っているくらいだった。家光とのことさえなければ、左門はもっともっと華麗に花咲いた筈の男である。その輝かしい前途を棒に振ってまで家光の愛人でいるということは、真剣に惚れたからに他ならない。又十郎はそう見ている。つまり又十郎は肉親の中でほとんどたった一人の左門の恋の理解者だったのである。

「病いを理由に……」

宗矩が重い口で云った。

「左門にお役辞退を申しこませ、柳生に隠棲(いんせい)させることにしよう。江戸から離しさえすれば……」

そうなれば左門は家光と会うことが不可能になる。家光の方もまさか柳生まで出掛けてゆくわけにはいかない。会う機会さえなければ、そこはそれ、去る者は日々にうとし、というではないか。

「生木を裂くわけですか」

又十郎がひどく辛そうな声で云って、宗矩と十兵衛を驚かせた。

「悲しみますよ、二人とも。可哀そうだな」

又十郎の声はしめっている。

「勝手に悲しませておけ！」

十兵衛が怒鳴った。
「いやだなどぬかしたら、その時こそ一刀のもとに斬ってやる」
本気だった。それほど十兵衛は頭に来ていた。
又十郎が小さく呟いた。
「兄上に斬れますかね、左門が」
十兵衛は横つらを張られたように、まじまじと又十郎を見た。

二十七歳

柳生一族の不安は杞憂に終わった。
左門は素直に父の命令をきき、病いと称して徒歩頭を辞任し、柳生の里に引き籠った。左門は前々から、父たちの苦衷に気づいていた。家光との恋が終わったわけではなかった。左門はただ己れの倖せだけをむさぼることを一個の男として恥じた。家光との恋も五年になる。沈静期に入ったといってよかった。たとえ会うことがかなわなくても、充分に心は通う筈である。そう信じての柳生落ちだった。
だが恋もまた剣の道と変わりはなかった。一日一日が真剣勝負だった。会わずとも確かに心は通うかもしれない。だが心が通うだけでは足りなかった。どうしても身近に置いて、声を聞き、

手に触れ、表情を見たい。その思いが何にも増して強くなってゆくのである。
先に耐え難くなったのは家光の方だった。家光とて左門が柳生にやられた理由は知っている。だから正当の、かつ、のっぴきならぬ理由のない以上、左門を江戸に呼び返すことのかなわぬことも知っていた。
家光は思案の揚句、その理由を見つけた。左門を大名にすればいい。毎年四月に大名を江戸に下らせ、住まわせるいわゆる参勤交代が、条文として定められたのは、寛永十二年に家光の発布した『武家諸法度』からだ。大名になればこの法によって、どうしても江戸に出て来なければならない。当時、一万石以上を大名といった。家光はなんと十三万石のお墨付を左門に送った（四万石という説もある）。左門はこのことをすぐ宗矩にしらせた。
宗矩の怒りは凄まじかったという。関ケ原以来のたび重なる隠密・暗殺の蔭働きによって、宗矩はようやく、一万石の最低の大名になった。左門友矩はなんの武功もなく、ただただ恋のために十三万石の大名になるというのである。怒らない方がどうかしていた。
宗矩は同時に、幕府に禄を食むすべての武士が、この加増に対して、自分と同じ怒りを示すであろうことを思った。怒りは家光に向けられるべきものであるが、それが出来ぬとなれば柳生一族に向くしかない。一族は当然すべての徳川家臣団の怒りと怨みのまとになってしまう。それは直ちに柳生一族の崩壊につながる筈だった。もう遅疑する場合ではない。宗矩は十兵衛をよび、ひそかに柳生に向かうことを命じた。目的は左門友矩の暗殺である。これこそ江戸柳生の本業だ

った。

十兵衛が柳生の隣村大河原村に足を踏み入れたのは、寛永十六年六月五日の夜である。ここは左門の二千石の領地の中であり、屋敷もまたここにあった。

十兵衛は任務上、絶対に里の者に顔を見られてはならない。十兵衛がこの土地にいたことが分かれば、家光はすべてを察する筈である。家光の怒りは、柳生家を滅ぼすかもしれなかった。

蒸し暑い夜だった。家々はいずれも戸を開け放ったまま、眠りについていた。

左門の屋敷も同様である。やすやすと塀を乗り越えた十兵衛は、庭に面した縁先に白い帷子を着た男の影を見た。

左門だった。

涼やかに端坐して、茶を喫しながら、月を見ていた。

「遅かったですね」

十兵衛が音もなく近づいたにも拘らず、左門が先に声をかけてきた。顔も向けようとしない。月を見る姿勢を崩さなかった。

「昨夜はもう少し涼しくて過ごしやすかったのですよ」

十兵衛は三池典太の佩刀を抜いた。一切口をきいてはならぬと宗矩から厳命されている。誰に聞かれて、十兵衛と見あらわされるかもしれないからだ。その気持を見抜いたように、左門が云

った。

「河原へ降りましょう。あそこなら人っ子一人いません」

白帷子に案内されるのは、なにやら地獄めぐりに似て、無気味だった。

河原に出ると瀬音が高く、話をしても遠くまできこえる心配はなかった。

「又十郎が……」

十兵衛が卒然と云った。

「わしにお前が斬れるか、と云いよった」

左門が微笑した。

「又十郎殿は手をあげられました」

これは又十郎の言葉を肯定したことになる。十兵衛は不思議なものを見るように、左門を見つめた。

「大分自信があるようだな。俺の剣をよけきれるというのか」

「私は二十七です」

左門は微笑のまま云った。

「二十七で死なねばならないのなら、せめて何か一つ、この世に遺してゆきたいと思います」

「ほお」

十兵衛が嘲るように云った。

「柳枝の剣。柳の枝の剣です。柳枝は力ずくでは折れず、はね返って兄上の右眼を刺すでしょう」
十兵衛の右眼を貰うと前もって宣言したことになる。大胆不敵といえた。
「柳枝の剣か。見せて貰おう」
云うなり十兵衛は斬撃を送った。凄まじい早さを誇る石火の剣である。左門はかわすともなく、その剣をはずし、すらりと抜刀した。剣尖を垂れ『無形の位』につけた。憎いまでに落ち着いている。
「どうぞ」
十兵衛の胸に怒りが湧いた。怒りが豪剣の速度を信じ難いものにした。眼にもとまらぬ斬撃が、雨霰のように左門を襲った。
信じ難いことだった。左門はその十兵衛の剣をことごとく、しかも余裕をもってしのいだのである。だが攻撃はしない。ひたすらしのぐ。十兵衛は子供の頃の左門を思い出していた。まさにあのしのぎだった。まるで骨がないように柔らかく、身体を撓わせてすらりとかわす。かわせぬ剣ははじき返す。
実に四半時（三十分）に及ぶ攻撃であり、しのぎだった。さすがの十兵衛が、ようやく疲れた。十兵衛の斬撃は一つといえども左門に触れず、帷子は依然純白を保っていた。
十兵衛が息を入れた時、左門が云った。

「そろそろ終わりにしましょう。川猟師が来る頃です」
十兵衛が新たに旋風を巻いて斬撃を送った時、左門の刀は下からすり上げながら、正確に十兵衛の右眼を突いた。十兵衛は一瞬に視界を失った。
「うぬ」
呻きながら十兵衛は、反射的に疾風のような剣を横ざまに送っていた。
今度は左門はかわしもしのぎもしなかった。十兵衛の剣はその腹を充分に斬った。まるで左門が自ら切腹したような傷になり、左門は微笑を浮かべたまま、ゆっくり膝をついた。
「柳枝の剣。忘れぬぞ」
十兵衛が云った。

ぼうふらの剣

泣き虫

柳生飛騨守宗冬は運のいい男だといわれている。

柳生宗矩の子息中、剣技において最も劣る身でありながら、兄二人の夭折によって不思議にも柳生家を継ぐことになったからだ。同じ齢の兄友矩は寛永十六年（一六三九）六月六日、二十七歳で死に、長兄で家を継いだ十兵衛三厳はその十一年後の慶安三年（一六五〇）三月二十一日、四十四歳で川猟中に急死している。この二人が永生きしていたら、宗冬が柳生の当主になり、時の将軍家綱の剣法指南役になることなど絶対になかった筈である。

それだけではない。

柳生家は宗矩の晩年に一万二千五百石を頂戴している。一万石以上は大名と呼ばれるから、柳生家は小なりといえども大名の席に列ったわけだ。それが宗矩の死と共に、後継ぎの十兵衛三厳に八千三百石、宗冬に四千石、末弟の義仙に二百石（これは柳生芳徳寺の寺領である）と三分割されてしまった。結果として柳生家は大名ではなくなり、元の直参旗本に戻されたことになる。

十兵衛三厳が怒り狂って、病いと称して柳生に引き籠り、以後二度と江戸に出なかったほど、これはあんまりな仕打ちだった。最愛の恋人だった友矩を、病死と称して殺した十兵衛への将軍家光の復讐だったといわれる所以である。

以後、柳生家にとって元の大名に戻ることが藩をあげての悲願となった。

その悲願を、宗冬は実に十八年の努力の末、達成している。寛文八年（一六六八）十二月二十六日、千七百石の加増を受けて、一万石となり、翌九年十一月十五日にその御朱印を頂戴しているのだ。柳生家は再び大名に復帰出来たわけだ。以後幕末に至るまで柳生家は変っていない。その意味で宗冬は柳生家の基礎を磐石にした人物といえる。

父宗矩が惣目付になったような、格別政治的に重要な役割をつとめたわけではない。ただただ剣法指南を続けただけでこれだけの処遇を受けるとは、泰平の時代においては稀有のことだ。

ここにも宗冬の運のよさがこの結果を生んだのだといわれた理由がある。

家庭的にも宗春・宗在の二男と三女を持ち、後継者という点で些かの不安もなかった。十兵衛三厳が女の子ばかり二人しかいなかったために家の絶えたことを思えば、これも好運の一つといえるだろう。

だがこれはすべて後世の評価である。宗冬本人は、幼年の時から、自分ほど不運な男はいないと堅く信じ切っていた。呪われた子だと思うことさえ屢々だった。

不運は出生の時からあった。柳生家の家譜『玉栄拾遺』には友矩は宗冬の二歳年長のように書

かれているが、実は同じ年の生れである。友矩の方が僅かに早かったので、兄ということになった。宗冬は宗矩の正妻の腹だが、友矩の方は妾のお藤の生んだものだ。生れた時から人形のように目鼻立ちの整った、色の白い赤子だったという。お藤に似たのであろう。これに反して又十郎と呼ばれた宗冬の方は父に似て容貌魁偉、なんとも可愛げのない赤子だった。宗矩の寵愛が左門友矩に偏したのは見やすい道理である。

母が生きていれば、宗冬の不幸はそれほどではなかっただろうが、その母は産後の肥立ちが悪く、その年に死んでいる。宗冬の養育はお藤の手に委ねられた。

又十郎は泣き虫だったと云われる。あたかもそれが重大な欠陥であったかの如く云われる。だが当歳で生みの母を失い、同年の兄の生母に当る女性に養育された子が、泣き虫だったと云って非難されていいものだろうか。顔も知らぬ亡き母への恋慕の情が又十郎を泣き虫にしたのである。底なしの淋しさがいつでもこの子供の胸の中にあった。その淋しさが涙を呼ぶのだった。武門の子にしては感じやすすぎるかもしれないが、又十郎の気持は充分理解出来る。又十郎の眼に映じた世間は、幼時から既に悲しみの色に染め上げられていたのである。

だが父の宗矩も、六歳年上の兄十兵衛も、又十郎の悲しみに気づくほど優しくはなかった。それに宗矩は忙しすぎた。又十郎の生れた翌々年、大御所家康が死に、将軍秀忠はやっと自分の思い通りの政治が出来るようになった。関ケ原以来、秀忠の側近として生きて来た宗矩にとっては、正に絶好の働きどころだった。

秀忠にとって目の上のこぶの如き存在だった異母弟松平忠輝の改易と流罪を皮切りに、福島正則など豊臣恩顧の大名を次々ととりつぶし或るいは転封させ、娘の和子を強引に後水尾天皇の妃とし、元和大殉教と呼ばれたほどキリシタンを大量に処刑し、という調子で、秀忠本来の残忍酷薄な性情がほとんど一気に爆発し露呈したのは、すべてこの元和年間なのである。宗矩はそのほとんどの事件の裏で、諜者のかしらとして、或るいは刺客人の総帥として、全国をとび廻っていた。

一方、長兄の十兵衛は元和二年から、小姓として秀忠に仕えている。十歳である。更に三年後の元和五年には家光付きになる。家光十六歳、十兵衛十三歳。十兵衛は父宗矩をしのぐ剣の天才だった。十三歳で既に家光の相手ではなくなっている。だが十兵衛の役は打たれ役である。宗矩が教えた型に従って、家光は十兵衛を打つ。癇の強い十兵衛にはこれが気に入らない。いくら将軍とはいえ、こんな下手くそな剣に斬られてたまるか。その思いが、三本に一本は家光の剣をはずさせ、十本に一本は逆にこっぴどく打ち返させるに至った。当然その度に宗矩から激しく叱責され、時にぶん殴られもするが、十兵衛は頑として態度を改めない。この性癖がわざわいして後に家光の機嫌を損ね、小田原に蟄居ということになり、更に十年の諸国回国修行と発展するのである。

とにかく十兵衛は面白くない。勢い屋敷に戻ると幼い弟たちに当ることになる。道場にひっぱり出し、稽古と称して袋竹刀でひっぱたくのである。勿論又十郎だけではない。左門も同じ目に

あうのだが、あまりの美貌がさすがの十兵衛に左門への打撃を躊わせた。頭や顔に傷をつけたら大変だという気持が自然に働くのである。父も怒るだろうし、お藤に冷くされるのも気色のいいものではない。そこへゆくと又十郎の方は誰にはばかる必要もなかった。面相もぶっこわした方がいいような代物だ。遠慮会釈なくひっぱたくことが出来る。

これで泣くなというのは無理であろう。泣けば十兵衛は焦だって余計強くひっぱたく。又十郎は前に倍してぴいぴい泣く。まるでいたちごっこだった。

それでも又十郎は一度でも十兵衛のしごきから逃げたことがない。やや長ずると左門の方は要領よく、十兵衛が帰邸する直前に屋敷を出てしまったり、仮病を使ってみたりしたが（勿論お藤のさし金もある）、又十郎の方はそれが出来ない。つまり要領が悪いのである。必ずとっつかまってひっぱたかれる破目になった。

だが人生とは奇妙なもので、変なところで平衡を保っているようなところがある。又十郎について云えば、ひっぱたかれればひっぱたかれるほど、痛みについて鈍感になった。その証拠に口ではひいひい泣き喚くくせに、又十郎は気を失ったということがない。まともに脳天をぶん殴られても、実のところそれほどの衝撃は感じないのである。けろりとした顔をしていようと思えば出来ないことはない。だがそれでは十兵衛が益々躍起になるのが勘で分るから、泣いてみせるのだ。

やがてそれが外貌にも現れるようになった。背は低いがどっしりと腰が坐り、小肥りのように

見えるが実は全身筋肉の塊である。首は異常に太く、胸は厚く、うしろから見ると背中がつい立てのように広く見える。腕も脚も太い。もっともこれは父の命令を馬鹿正直に守って、日に千回の素振りと三里の疾走を欠かさなかった結果である。

ちびで、ずんぐりむっくりしていて、度重なる打撃のため耳も鼻もつぶれている。痩せぎすですっきりと背が高く、柳のようによくしなう身体と、端正で色白な顔を持った左門友矩とは文字通り月とすっぽんだった。

己の容貌を気にかけない男はいない。当然又十郎は不幸だった。

五丁町

「兵法がいやになったよ。人のを見ているだけで気分が悪くなる」

又十郎が云った。頭の下に柔かな女の膝がある。

吉原の京町一丁目の角店『大三浦屋』の一室だった。もっともこの吉原は後年『元吉原』と云われた庄司甚右衛門の創立になる初期の御免色里である。

寛永九年の秋。又十郎は二十歳になっている。

女は局女郎だった。太夫、格子、局と云われる順位の中の最下級の女郎である。又十郎のような部屋住みの男が買えるのは、せいぜいがこの位の女である。それでも決して楽ではなかった。

この当時、太夫と格子は揚屋に呼ばねば遊べないしきたりである。客が指名すると揚屋では『揚屋指紙』という一種の借用証文を遊女屋に書き、それに応じて女がやって来る。

江戸町から京町へ、或るいは逆に京町から江戸町へと太夫又は格子が行く。それを『道中』と洒落て云った。局女郎は揚屋へ行かない。遊女屋の中の自分の部屋（これが『局』だ）で客を取る。だから今、又十郎は『大三浦屋』の二階にいた。

「兵法をやめなんして何をしなさんす」

女が訊く。当然の問いである。剣法指南役の家に生れて、剣法がいやだ、では通るまい。

「そんなこと知るか。とにかくいやなものはいやだ」

又十郎が吐き出すように云った。その額が青黒く腫れ上っている。明らかに木刀の打撃によるものだが、これは十兵衛ではない。父の宗矩に思い切り打たれて、又十郎はないことに失神したのである。目が醒めた時、又十郎は兵法をやめようと決心していた。

城中だった。将軍家光に対する宗矩の指南の助手をつとめていた。打太刀の役である。打太刀は常に敵方を意味する。打太刀に対して柳生新陰流の術を使うのが使太刀で、この役は勿論、宗矩が演じていた。家光が納得するまで一つの型を繰り返し見せ、次いで、家光に使太刀を使わせる。それが宗矩の指南である。

本来ならば新陰流は他流のような型稽古は行わない。型を教えるのも試合形式なのだ。つまり敵方である打太刀は、必ずしも使太刀に都合のいいように振舞わなくてもいいのである。使太刀

側に明かな隙があれば、逆に打太刀側が使太刀側を斬ってもいい。だからこそ十兵衛三厳は、時に家光をこっぴどく斬ってみせて不興を買った。そのため国もとで謹慎を命ぜられ、いわゆる諸国武者修行に出ていた。隠密行ともいわれるが、いずれにしても家光に嫌われた末であることは、前後のいきさつから考えて明らかであろう。

十兵衛に替って、左門と又十郎が交互に宗矩及び家光の打太刀をつとめることになっていた。

事件は又十郎が『三学の太刀』の打太刀を宗矩相手につとめていた時に起った。

原因は不明だが、この日突然、又十郎には宗矩の太刀が見えた。まるで時間の運びが突然遅くなったように、宗矩の太刀ゆきが順を追ってはっきりと見えたのである。太刀ゆきが見えれば、これをかわすことも、或るいは逆をとって斬ることも可能だ。即ち、少なくともこの一瞬において、又十郎は宗矩を超えたことになる。

又十郎の気分は嘗てないほど楽々としていた。相手の手が見えればいやでもそうなるものだ。

〈親父を斬ってやろうかな〉

ふっとそう思った。今なら出来そうな気がした。又十郎はその逆襲の軌跡を脳裏に描いてみた。たった一つ障碍があった。この時、又十郎の持っていた木刀は定寸を少し欠けていた。ほんの一寸五分ほどだったがそれが肝心の時に僅かに太刀ゆきを遠くする。その分踏み込みを深くすればいいわけだが、この踏み込みの加減が難しかった。

〈まあいいさ〉

又十郎は承知の上で、使太刀の打ちこみをはずし、意外の反撃を送った。だがさすがに宗矩である。身体をそらしざまに再度の反撃で又十郎を斬った。予測通り一寸五分の不足が致命的だった。又十郎は思わず、

「やっぱり短かったな」

そう呟いてしまった。

これがいけなかった。独り言のつもりだったのに、家光に聞こえてしまったのである。

家光は自分の腕はさほどではないが、眼だけは肥えていた。いわゆる見巧者である。今の型で又十郎が危く宗矩を斬るところだったのを充分に見ていた。

「長いのに替えてやってみよ」

又十郎は宗矩の顔が怒りで青黒く変ったのに気付いた。

〈まずいことになったな〉

そうは思ったものの上さまの命令では仕方がない。又十郎はやや寸の延びた木刀に替えた。宗矩は無言だった。凄まじい眼で又十郎を睨んでいる。

〈何もそんなに怒ることはないじゃないか〉

又十郎はまだ気楽な気分でいた。

型通り向い合った。宗矩は木刀を垂らしたままだ。これは先刻の型とは違った。

〈何か云うつもりか〉

又十郎は一瞬迷った。宗矩が家光に何か解説するのかと思ったのである。それは許すべからざる油断だったが、それにしても宗矩の足運びは異常な早さだった。進んだとも見えぬ間に、宗矩は間境いを越え、又十郎の眼前にいた。

「せがれ、推参なり」

宗矩は喚くなり真向唐竹割りに又十郎を斬った。

〈あの足の運びは何だ〉

女の膝の上で、又十郎は又してもあの一瞬を胸の中で再現して見ている。不審だった。十何年の間、父の剣を見て来て、一度たりと見たことのない足の運びだった。

〈どうして俺は動けなかったんだろう〉

蛇に魅入られた蛙同然に自分は茫々然として、いつ宗矩の足が間境いを越えたのかも見ていない。はっと我に返った時は、もう眼前にいた。相手の心を虚にするような足の運びと云えようか。

〈親父殿は俺を憎んでいたな〉

自分を斬る直前の宗矩の顔を、又十郎は鮮明に覚えている。凄まじいまでの憎しみが、全身から立ちのぼっていた。それが双眸の光に集約され、又十郎を射た。

〈殺されるかもしれない〉

そんな予感があった。このまま屋敷にいることの危うさが切迫した思いになって、又十郎はお藤に金を貰うと吉原へすっとんで来たのである。

「親父に殺されるのはいやだ」

思わず声になった。なんとかして屋敷を出なければならぬ。女が不審そうに又十郎の顔を見下していた。

又十郎は仲の町の通りを大門に向って歩いた。

黄昏が降りて来ている。

遊女たちの弾くみせすががきの音が廓の中を満たしている。店先の提灯に火が入った。

かわたれどきと呼ばれるこの時刻ほど、吉原の華麗さともの悲しさを同時に感じさせる時はない。

又十郎はうら淋しかった。屋敷に帰りたくない。出来るものなら幾晩でも居続けしていたかった。だがそんな金があるわけがない。それに侍は夜は必ず屋敷に居なければならぬ。それがきまりだった。

〈侍なんてつまらないもんだな〉

今日の又十郎にはその思いが身に沁みて感じられた。妙な掟で日常の暮しさえがんじがらめに縛られていて窮屈この上ない上に、実の父に斬られる心配までしなくてはならない。こんな割に合わない暮しはなかった。といってこの暮しを捨ててどんな生き方が出来るか、又十郎には皆目

分らない。

〈八方塞がりか〉

自嘲するように笑いかけた時、又十郎は人にぶつかりかけた。さすがに鍛えている身体である。咄嗟に素早く身をかわして、実際に衝突することはなかったが、相手はのめってたたらを踏んだ。見ると六方者といわれる無法者である。派手な格好で馬鹿長い刀を一本差した連中が六人いた。

「六方者だと思って馬鹿にしやがったな」

ぶつかりかけた相手が喚いた。他の五人が素早く又十郎を囲んだ。

又十郎の方は何が何だか分らない。ぽかんと相手の顔を見つめて無言である。

「薄ら笑いなんかしやがって気に入らねえ。刀を抜け、この野郎」

いうなり長い刀をすっぱと抜いた。見事なものだ、と又十郎は感心した。まるで手妻である。

「何ぐずぐずしてやがんだ。手が震えて刀が抜けねえか」

又十郎の沈黙をいいことに、男は益々いきり立った。他の五人も刀の柄に手をかけて、腰を落とし、いつでも抜き討てる格好である。

ひとわたり見廻して、又十郎は馬鹿々々しくなった。どの男にも本物の殺気は見当らない。つまりこれは一種の見世物なのだ。見世物は又十郎の最も苦手とするところである。

別に格別の思案があったわけではない。ほとんど無意識に又十郎は双刀を鞘ごと帯から抜きと

っていた。

「刀が欲しいらしいな。ほら、やるよ」

顔を真赧にして喚いている相手の足もとに無造作に放った。相手は一瞬虚をつかれたような顔をした。その時はもう又十郎は歩き出している。相手の脇を平然とすり抜け、大門に向っていた。ひどくさばさばした感じだった。もう侍はやめた。兵法ともおさらばさらばだ。

六方者たちは茫然と見送ることしか出来なかった。こんなに簡単に両刀を捨ててゆく武士など考えることも出来なかったからである。

又十郎はそのまま屋敷へ戻らなかった。

猿楽師喜多七大夫の家へ向った。

猿楽

『寛永九壬申年、公一日土居氏ニ至リ、喜多十大夫カ猿楽能ヲ見玉ヒ、其術妙神ニ入、公感悟シ、煉磨日夜ニ進ミ云々』

これは柳生家の家譜『玉栄拾遺』の中で又十郎が猿楽に入れこんだことを録した言葉だが、にわかには信用出来ない。何よりも喜多十大夫は寛永九年には九歳で、まだ舞台に立っていない。十大夫の初演は翌寛永十年十歳の時で、それも深川八幡造営のための勧進能に、父七大夫と共に

五日間の興行に出たのである。『玉栄拾遺』に云う「土居氏」とは恐らく時の老中で才物の聞こえ高い土井利勝のことかと思われるが、その土井屋敷で九歳の十大夫が舞ったとは思われず、ましてや『其術妙神ニ入』とは到底考えられない。これは多分喜多七大夫の誤りであろう。

北（喜多）七大夫長能は堺の医師の子に生れながら金剛大夫の嗣子格となり、金剛三郎を名乗り、金春大夫安照の女婿となったが、その異能ぶりを見て子孫の仇となると警戒した安照が充分指導してくれなかったと伝えられるほどの名手である。大坂の陣では豊臣方につき、槍をとって実戦に加わったという豪気さで、戦後は浪人して京都で遊女に能を教えたりしていたが、元和五年に許され、金剛七大夫を名乗って秀忠の寵を一身に集めた。

寛永九年、七大夫四十八歳。今尚斯界の頂点に立っていた。又十郎が頼ったのは、この七大夫だった。

又十郎の猿楽好みは父の宗矩ゆずりである。

宗矩のは好きを通りこして溺れるに近かったらしい。沢庵和尚が宗矩へ戒告のために与えたという『不動智』の中に次の文がある。

『貴殿乱舞を好み、自身の能に奢り、諸大名衆へ押して参られ、能を勧められ候事ひとへに病と存じ候なり』

大名の屋敷に押しかけて行ってまで能を演じたと云うのだから、尋常ではない。

実は柳生家と能、殊に金春流との間には、並大抵でない深い結縁があったのだが、この時の又十郎は全く知らなかった。

兵法の道を捨て、猿楽一筋に生きてみたいという又十郎の願いとその由って来る事情を、喜多七大夫が深沈とした表情で聞き入っていたのは、金春の女婿として柳生と金春の秘事をある程度知っていたからである。

「その最初の立合いの時……」

暫くの沈黙の後で七大夫が云った。

「お手前の太刀は父上のお身体に当りませんでしたか」

「掠った程度です。何分、寸が足りず……」

これは又十郎の間違いである。この時の又十郎の木刀は、宗矩の着物の胸を裂き、肌襦袢まで斬っていた。木刀の鈍い切先きで、刃物で切ったような鋭い切口だった。宗矩は肌にその刀尖を感じ、慄然とした。明かに自分の負けだった。又十郎のいう通り刀身が一寸長かったら自分が斬られていたことを宗矩は悟った。又十郎の腕はいつの間にかそこまで上達していたのだ。

だがこの時、宗矩は又十郎に負けるわけにはゆかなかった。少なくとも家光の前で負けを認めるわけにはゆかない事情があった。

この年の正月、大御所秀忠が死んだ。家光にしてみれば大嫌いな父親がいなくなったのである。快哉を叫びたいほどだった。家光の秀忠嫌いは有名で、常時身につけていた守り袋の中の書

き付けには、家康の後が自分で間に秀忠などいないように書いたものまであると云う。家光は何も彼も、秀忠の使っていた物は捨ててしまいたかった。柳生宗矩は正しくその捨てたい物の部類に属していた。

柳生石舟斎は知らず、少なくとも宗矩は秀忠と共に歩いて来た。秀忠の汚い蔭の仕事を人知れず果すことで、その懐ろ刀と云われて来た。今、それが裏目に出ようとしている。家光の気紛れ一つで、柳生は一介の無役の旗本の一人と化してしまいかねなかった。

秀忠の生前、秀忠と宗矩の間には一つの黙契があった。今までの蔭働きに酬いるために、それにふさわしい役職を作り、宗矩をそこに据えようというのである。惣目付、と役職の名称まできまっていた。それさえ家光の気分次第で吹きとんでしまうかもしれない。

宗矩にとっての救いは、柳生の剣が天下無敵であるという家光自身の評価と、左門友矩に寄せる家光の思いだけだったと云っていい。

そんな時に、宗矩が又十郎に負けるわけにはゆかない。天下随一の剣の伝説が崩れてしまうからだ。だから宗矩は必死だった。二度目の立合いの時、秘伝中の秘伝ともいうべき『西江水』の剣を使ったのはそのためである。

「せがれ、推参なり」

とは、後世伝えられるように、刀の長短など問題にしたのが新陰流の心法にはずれると云う叱責ではない。実は宗矩の心の底からの悲鳴だったのである。

だが又十郎はこの時点でもそんなこととは全く気付いていない。逆に喜多七大夫の方が朧気ながら真相を察していたと云える。七大夫は同時に宗矩の憎しみについての又十郎の勘を信じた。

〈本当にこのお子は殺されるかもしれぬ〉

そう思ったのである。

七大夫は舅である金春安照の激しい憎しみの目差しを今もって忘れられずにいる。金春一族の将来のために、この素人上りの不世出の天才を抹殺すべきではないかとまで思いつめた安照の気持を一番よく知っていたのは、当の抹殺さるべき七大夫だった。芸とは魔である。それは猿楽も剣法も同じであろう。魔に憑かれた者の思案は、屡々常人の枠を超える。

「確かに家を出られた方がいいかもしれませんな」

と七大夫は云った。

「ですが手前共のところでは差し障りが大きすぎます」

それはそうだろう。天下の柳生の伜が剣を捨てて猿楽師に弟子入りしたとなったら、一番困るのは宗矩である。厳しい掛合いが来るのは目に見えていた。

「柳生の庄にお戻りなさい。それが一番」

又十郎は頬をふくらませた。それでは父による危険は避けられるかもしれないが、能役者になりたい望みの方はどうなるのだ。

「柳生村から月ケ瀬街道を半里行きますと中ノ川村です」

又十郎はまだ分らない。柳生に行ったことがまだ一度もないのである。七大夫は辛抱強く云った。

「中ノ川村は金春の領地です。金春大夫七郎重勝は彼の地に居ります」

又十郎はあっとなった。

名人第六代金春大夫八郎安照の孫、第八代金春大夫七郎重勝はこの年三十八歳。四座の大夫の中で唯一人大和に住んでいた。大和の中ノ川村及び坊城村で知行五百石。これは元々秀吉に貰ったものだが、徳川の代になってもそのまま継承を許されている。

柳生から僅か半里なら、毎日三里を走る又十郎にとっては隣りのようなものである。それに柳生に引き籠るという分には、宗矩が文句をつける心配もなかった。柳生にはまだ石舟斎からじきじき稽古をつけて貰った老人たちが生きている。この連中はなんとなだめすかしても江戸へ出て来ようとはしない。大殿直伝の秘術を抱いてそのまま死ぬつもりでいる。

宗矩は早く石舟斎の膝元を離れ、仕官のため全国を流浪していたので、手ずから稽古をつけて貰ったのはごく短い間だけだった。だからこれら古老から出来るだけ多く、石舟斎直伝の剣を引き出したい。だが自分で柳生に行き、何ヵ月も古老たちと剣をまじえる暇は宗矩にはない。だから息子たちが柳生へ行くのは大歓迎だった。先に諸国回国修行に上ったといわれる十兵衛も、実は秘かに柳生の庄に引き籠っているだけかもしれないのである。

又十郎は父に柳生谷に籠る旨の手紙を書き、七大夫に託した。どうしても家へ帰る気がしない

ので、路銀も七大夫に借り、夜中にもかかわらずその場から東海道を大和へ向った。刀はこれも七大夫の好意で短いのを一振り貰って差している。いわゆる大脇差で、いざという時は充分役に立つし、何より軽い点がよかった。髪も服装も武士のままなのに、大脇差一本というのは旅姿として異様である。だが又十郎は平気だった。自分がどんなに着飾ってみても映えないかわりに、どんなひどい格好をしていても目立たないことをよく知っていた。大脇差一本の武士は馬鹿にされるかもしれないが、喧嘩を売られる心配もあるまい、というのが又十郎の計算だった。なんと云っても又十郎は二十歳の若さだ。気楽なものだった。夜道を歩きながら好きな謡も出るという呑気さである。手形類を一切持たないのが若干不安だったが、小田原まで行けばなんとかなるとたかを括っていた。小田原藩には道場での顔見知りがいた。兄の十兵衛が世話になっていた家もあった。

柳生家では宗矩が珍しく気むずかしい顔で思案していた。つい今しがた喜多家から又十郎の手紙が届いたところだった。

又十郎の遁走ぶりが余りにも鮮やかで薄気味が悪かった。見事にかわされたという感じがどこかでする。

〈あいつ本当に腕が上ったのかな〉

宗矩は首をひねった。昼間のことはまぐれということもある。だがこの逃げっぷりはどうだ。

自分でも父親からあれほどの憎しみの炎を吹きつけられたら逃げ出しただろう。だがその夜のうちにやれるかどうか疑問だった。そこまでの思い切りとなると、これはもう芸のうちだ。

〈ひょっとすると十兵衛を超える〉

宗矩は気に入らなそうに唇を噛んだ。

西江水

八代目金春大夫七郎重勝は正直のところ半信半疑だった。叔父に当る喜多七大夫からの添書は持参しているが、又十郎の猿楽への執心がもう一つ疑問なのである。七大夫の添書には確かに、武士をやめて能役者になるのが本人の望みだと書かれ、又十郎もきっぱりそう云っているのだが、重勝には何となくからかわれているのではないかという思いが強い。

又十郎の熱意の程は疑いの余地がなかった。毎朝、半里の道をほとんど全力疾走して、柳生からこの中ノ川村までやって来る。何人かの幼い内弟子たちと一緒に稽古場の掃除をし、身体を清めて稽古を待つ。その態度は真摯そのものだった。

だがどこか違う。強いて云えば又十郎は必死すぎた。余裕がなさすぎるのである。能役者になるには年をとりすぎている、ということもあるが、そういう例はないではない。それで結構名手となった者もいる。だがそんな人々も決してこれほどの必死さを感じさせはしなかった。

真剣勝負を間近かに控えて、初めて剣法を学ぶ男の必死さに似ている。さんざん考えた揚句、重勝が達した結論はそれだった。だが、能は真剣勝負ではない。気持はそれに近くても、立合能で能役者が死ぬことはない。また能を学んで、文字通り真剣による生命のやりとりに役だつことは、通常の場合にはない。但し通常の場合には、だ。

〈やっぱりあれだな〉

他流は知らず、金春の能には、その通常でない秘伝がある。たった三十五歳で夭折した父の七代目金春大夫七郎氏勝から重勝はその伝承を受けている。だが……。

〈他流なら分るが柳生新陰流の子息がどうして……?〉

秘伝は柳生側にも伝えられてある筈なのだ。何も金春に求める必要はないのである。それに又十郎はその件について一言も口にしてはいない。ひょっとすると重勝の勘繰りすぎなのかもしれなかった。

〈暫く様子を見るしかないか〉

堂々めぐりの末、結局はそこへ落着くしかなかった。それにしてもなんともいらいらさせられる相手だった。

又十郎の方は師匠のそんな気持に微塵も気づいていない。ただもう毎日が楽しくて仕様がないのである。幼時から兵法しかやったことのない、それも地獄のような荒稽古しか受けたことのな

い又十郎にとって、能の稽古は楽しくて楽しくて仕方がない。その上、不思議なほどすらすら入ってゆける。所作の一つ一つが素直に理解出来るし、身体も自然に動く。呼吸も剣の呼吸とさして違いはない。

〈どうしてもっと早く能を学ぶ気にならなかったんだろう〉

それだけが悔いとして感じられた。

又十郎は柳生正木道場の古老たちが、一向に剣の稽古をせず、猿楽にうつつを抜かしている自分に、激しい怒りを抱いていることにまったく気づいていない。その怒りが次第に高まって、今や爆発寸前にあることも。

丁度そんな時に、兄十兵衛三厳が突然柳生に戻って来た。

「爺いどもの話では、剣の稽古をなおざりにして、猿楽にうつつをぬかしているそうだな」

十兵衛の言葉は、いつもながら切りつけるような鋭さだった。

又十郎は返事が出来ないでいる。

〈兄者は変った〉

回国修行の間に何があったのか、又十郎は知らない。十兵衛もそのことについては一言もいわない。ひょっとすると回国修行はただの口実で、厳しい隠密行だったのかもしれなかった。そう思わせるような陰惨ともいうべき翳が、今の十兵衛には感じられる。

〈人を斬ったんだ。それも少ない数ではない〉

それだけは確かだった。今の十兵衛の暗さは、その結果としか考えられなかった。

又十郎は人を斬ったことがない。それだけに逆によく分る。十兵衛には明らかに夥しい血の臭いがしたし、死人の怨霊によるとしか思われぬ底の知れぬ暗さが、皮膚の下に痣のように拡がっていた。

又十郎にはそんな兄が恐ろしくおぞましかった。

〈剣の道が人をこんなに暗くするのなら、俺はごめんだ〉

腹の中でそう喚いていた。

十兵衛は突き刺すように無言の又十郎を見つめていたが、不意に音もなく立った。

「道場へ出ろ」

これでおしまいだ、と又十郎は観念した。

〈俺は殺される〉

そう直観した。理屈ではなかった。理屈で考えればいくら十兵衛でも弟を殺すわけがない。だが又十郎は感性で一瞬に悟る余裕しかなかった。その感性が、殺される、と告げた。抗いはしなかった。素直に道場に出た。十兵衛の云う通り、ひきはだ竹刀ではなく木刀を手にとった。

又十郎と十兵衛は向い合った。道場に人気はない。全くの二人きりである。

突然……そう、全く突然に、又十郎はあの日の宗矩の動きを見た。あの日には全く見えなかっ

た宗矩の動きが、緩慢に、それだけに細部まで明瞭に見えた。その不思議な足運びは、今は不思議でもなんでもなかった。金春の稽古場で日毎鍛えている猿楽の足の運びだった。

〈なあんだ〉

一瞬、裏切られたような気がした。その時、又十郎はもう動き出していた。口の中で謡をうたっているような気楽さで、つつと進んだ。十兵衛が近よるともないその足運びに気付いた時、又十郎はもう一足一刀の間境いを越えていた。又十郎は全く無造作に、脇に下げていた木刀を持ち上げ、十兵衛の額を斬った。十兵衛は物も云わずに昏倒した。

又十郎はそのまま道場を出て中ノ川村へ走った。十兵衛が昏倒から覚めたら、今度こそ絶対に助からない。そう思ったからだ。思い切りの良さは又十郎の身上である。二度と柳生には戻るまい。咄嗟にそう思って中ノ川村に走った。もとより金春にかくまって貰う気などない。柳生の門弟の半ばは隣接した伊賀の忍びである。十兵衛がその連中を繰り出せば又十郎の生命など簡単に吹き消されてしまう。金春宗家がそのとばっちりを受けるのは又十郎の本意ではない。

又十郎はただ師匠の金春重勝に一言詫びを云って行きたかっただけだ。

又十郎の話を注意深く聞いていた金春重勝は、暫く待つように云いおくと姿を消した。やがて戻って来た時、数巻の巻子本を手にしていた。

「いずれは見せるつもりだったのだよ」

重勝はそう云って和紙を拡げた。

又十郎の見たこともない物がそこにあった。

それは絵だった。それも斬り合いの図である。夥しい斬り合いの図が詳しい文章と共にそこにあった。

『新陰流兵法目録事』

一番最初にそう書いてあった。次いで、

『三学円太刀』

とあり、長袴をはいた二人の武士の斬り合いの図があった。

又十郎の心臓がことことと大きな音を立てはじめたように感じられた。

これはまぎれもなく祖父柳生石舟斎宗厳の筆跡だった。なんと新陰流の極意の絵目録なのである。文章も簡潔ながら見事に要点をおさえている。

夢中になって次々に紙をくっている又十郎を見ながら、重勝はこの絵目録が金春家に所蔵されている所以を語った。

重勝の父七代目金春大夫七郎氏勝は、能以上に兵法の天才だった。槍を十文字鎌槍術宝蔵院胤栄、新当流長太刀を穴沢浄見、大坪流馬術を上田吉之丞といった当代一流の師に学び、いずれも皆伝を得ている。その氏勝が剣の師と仰ぎ、皆伝を許されたのは柳生石舟斎だった。

又十郎は思わず声を上げそうになった。さっき道場で突然父宗矩のあの日の足運びが見えたの

も、決して偶然ではなかったのである。金春氏勝が能の所作に新陰流兵法を映したのか、柳生新陰流が金春の足運びを映したのかは知らないが、宗矩の足運びは明かに金春流の能と無関係ではなかった。

「それは新陰流が当金春の秘事を映したものです」

又十郎の問いに重勝はきっぱりと答えた。

金春流に『一足一見』という秘事がある。氏勝からそれを聞いた石舟斎は是非知りたいと懇望し、新陰流の秘法『西江水』と交換教授をしようと云い出した。その結果金春家から伝えられた『一足一見』の法に、宗矩の足運びはかなっているという。

この事実は江戸柳生と尾張柳生双方に石舟斎から伝えられたらしく、双方の弟子の書いたものの中にその記述がある。

江戸柳生の高弟木村助九郎の『兵法聞書』に宗矩の言としてこう書かれてある。

『一、一足一見の事、理あり。金春流の謡能の心持に有、是兵法に実面白き也』

極めて漠然として掴みきれないところが宗矩らしいではないか。これに反して尾張柳生の伝承として近松茂矩が『昔咄』に録した記述はもう少し詳しい。

『金春流に一足一見といふ大事の秘密あり。これを柏崎の能にかづけて、二まはり半の伝といふ。此事を故ありて、金春家より柳生家へかたりしかば、殊の外懇望にて、柳生家の一大事西江水とかけあひぬ。故に互に弟子となりて、仍て金春大夫、かの九十三番を自筆に書きて相伝せし。後にこれをわけて取りし故、此方へ来られし兵庫（柳生兵庫助利厳のこと）も所持なりし由』

江戸柳生の勿体ぶった秘密好きと、尾張柳生のかくしだてのない合理性の如きものがまざまざと感じられはしないだろうか。その秘密好きのために、又十郎はもとより十兵衛まで『西江水』の秘事は勿論のこと『一足一見』の法も宗矩からまだ伝えられていなかったのである。

金春重勝は、この絵目録がその交換の後に石舟斎自らの手で氏勝に譲られたものであることを語り、『没茲味手段』の『一見之事』のうちにある『一、清（西）江水之事』の部分を示し、自ら立って亡父から伝えられた『西江水』の秘伝を又十郎に教えた。

「元々は柳生のもの、手前はそれをお返ししたまでのことです」

と重勝は笑ったが、それは正しく宗矩があの日に使ったものであり、又十郎が先刻十兵衛を倒した手だてに違いなかった。

宗矩は後年の伝書の中で『西江水』についてこう書いている。

『この心持、石火の機と申候、つつとはやき事なり。……みるやいなや、ちやくとひつとり、きくやいなや、ちやくとひつとるを西江水と申也』

ちなみに、この西江水という言葉は『碧巌録』第四十二則の、

『待㆔儞一口吸㆓尽西江水㆒、即向㆑汝道』

から採ったものだと云う。

又十郎は又ぞろ、今度は金春重勝から路銀を貰って江戸に向った。今度も大脇差一振を腰にしただけの気楽な旅だった。相変らず手形の類は一切持っていない。

〈なんとかなるさ〉

その気楽さだけが頼みの綱だった。そしてその通りなんとかなるところが不思議だった。あるいはそれが後世云われる又十郎宗冬の運のよさだったのかもしれない。

江戸の屋敷に戻っても、格別どうということはなかった。宗矩の前に手をついて、

「只今帰りました」

そう云って、それだけだった。宗矩は僅かに頷いてみせただけだった。

宗矩は又十郎に気を使うゆとりなどなかったのである。又十郎出奔の年の暮に願い通り惣目付に就任し、諸大名の上に睨みをきかせていたのだが（惣目付は大名監察がその職分である）、ここへ来てまずい事態が生じた。半ば予期したことだったが、左門友矩が家光の愛人になってしまい二千石を頂戴し、更に四万石の大名とするという内意を得たのである。大名監察の立場にいる者が、こんな出鱈目な大名取り立てを許せるわけがない。まして我が子となれば尚更である。宗矩は家光の機嫌を損ねる危険を冒して、友矩に逼塞を命じた。友矩は領地である柳生の隣村大河原村に引き籠った。丁度又十郎と入れかわりになったような形だ。

それでも家光の執念が冷めず、遂に宗矩が十兵衛を使って友矩を斬ることになったのは、寛永

十六年六月のことだ。

友矩がいなくなった穴を暫くは又十郎が埋めてくれた。家光の相手を又十郎がつとめたわけだが、宗矩の危惧にもかかわらずこれが極めて巧くいったのである。

宗矩は漸く又十郎を見直すようになった。又十郎の良さは、その気楽さと明るさにあった。それにその不格好さである。友矩を失って不機嫌この上ない家光でさえ、この猪のような首の太く短い男の野放図な気楽さには思わず笑ってしまうのである。決して意図しているわけではないのに、奇妙に道化めいたところがあった。それが見る人の心を例外なくなごますのである。十兵衛のような剛でもなく、友矩のような柔でもない。強いて云えば陽だった。とにかくこの男がそばにいると何となく愉しいのである。おまけに信じ難いことだがこの男は能の達人だった。踊りの好きな家光にとって格好の遊び相手である。家光は風流が好きで、能の後が風流になることが多かったが、又十郎はやすやすとそれについて来る。天性踊りに向いているとしか思えなかった。とにかくこれといった目立った特徴もないくせに、又十郎は家光の心をなごやかにした。柳生家が家光の癇癪の犠牲者たることを免れたのは、ひとえに又十郎のお蔭だったのだが、宗矩を除いては柳生家の誰もそのことに気付かなかった。

〈わしは不運な男だ。不運のお蔭で、剣も能も中途半端で終ってしまった〉

又十郎宗冬は終生そう思っていたらしい。

晩年に至って柳の木蔭を散歩していた時、池で動くぼうふらの微妙な動きに剣理を会得し、自ら『柳陰斎』と号したと云う。この号には柳生家の陰で生きて来たという卑下の意味が多分に含まれているような気がする。

又十郎宗冬は、柳生の表で生きた宗矩、十兵衛の二人が揃って彼の剣を極度に恐れていたことを終生知らなかったのである。

柳生の鬼

傲慢

沢庵和尚が柳生宗矩に書き与えた『不動智』という戒告の文章の中に、十兵衛三厳に言及した個所がある。

『なかんづく御賢息御行状の事、親の身正しからずして、子の悪しきを責むること逆なり。先づ貴殿の御身を正しくなされその上に御意見もなされ候わば、自ら正しく、御舎弟主膳殿も兄の行跡にならひ正しかるべければ、父子ともに善人となり目出たかるべし』

宗矩の門弟取立てに依怙の沙汰の多いこと、欲深く、大名から賄賂をとり、それによって将軍への取りなしを変えること、能が好きで、諸大名の屋敷へ強引に押しかけては舞ったりすることを、強く戒めた上での言葉である。

一代の剣豪と思われた柳生宗矩が、実は政治家的色彩の濃厚な男であったことがよく判る文章だし、宗矩の家庭的な悩みにまで言及した点で、沢庵と宗矩の交友の深さのほども推し測れるものであるが、とにかく宗矩は十兵衛三厳と又十郎宗冬という二人の息子の行状に、よほど手を焼

いていたらしいことが察せられて面白い。

　宗矩の子供の中で、十兵衛三厳がずばぬけた剣の素質の持主であることは、諸書に照らしてみて明らかである。柳生道場でも、少年の時から既に高弟たちと五分の立合いをしたし、父宗矩をうちこむことも屢々であった。

　それだけの腕を持っていて、傲慢になるなというのが無理である。

　三厳は元和五年、十三歳の年から、後の三代将軍家光の小姓として出仕していた。家光は三歳年上の十六歳だ。宗矩が正式に家光の兵法師範役に任命されたのは二年後の元和七年。この年から十兵衛は家光の打たれ役になった。

　宗矩が先ず一つの型を使ってみせ、次いで家光が同じ型を使う。相手をするのは両方とも十兵衛である。今日のような防具は一切つけず、ひきはだ竹刀という柳生新陰流独特の竹刀を使う。これは革の袋の中に割竹を仕込んだもので、皮に皺がよってがま蛙の肌のように見えるために、ひきはだと呼ばれた。木刀と違って、これなら寸止めをせず、思い切って打っても死ぬようなことはない。だが防具がないのだから痛いことは痛い。

　宗矩はきちんと当る寸前で止めてくれるが、家光の方は遠慮会釈なく打つ。現実に打たれるのだから、当然痛い。だが痛いだけなら、まだ我慢出来る。我慢出来ないのは家光の術の拙劣さだった。

〈こんな下手な奴に、なんで打たれなきゃいけないんだ〉

　ついそう思ってしまうのである。家光は終生剣法を愛したが、自分の腕の方はさほど上達しなかったらしい。いわゆる見巧者として、試合を見る方が好きだった。それになんと云っても、習い出したのが遅い。ほとんど物ごころつく時からひきはだ竹刀を握っていた十兵衛とは、段ちがいの腕前であることは当然だった。

〈まっすぐ打つことも出来ないのか〉

　不正確な打撃を受けるたびに十兵衛は腹の底でそう毒づく。まだ十五歳の少年だった。思っていることを顔に出さないでいろと云っても無理である。家光も十八歳の多感な齢頃だ。十兵衛の気持を敏感に読み、屈辱を感じた。いわば打つ方も打たれる方も、お互いに屈辱にまみれた稽古になった。それが五年も続いたのである。

　二十歳になった十兵衛を打てる者は柳生道場にはいなくなった。宗矩でさえ三本の中二本はとられる始末である。それなのに江戸城に上ると、理屈ばかり達者になって実技は一向に進歩しない家光の下手くそな打撃を受けなければならない。家光は家光で十兵衛の見下げたような顔が気にいらない。この頃は寸止めぐらいは出来るようになっていたのだが、わざとそれをしない。思いきりぶん殴るのである。またその気持が十兵衛には手にとるように判る。時にかっとすることがある。だが家光は元和九年から将軍の座についている。いくらかっとなっても、まさか将軍を殴るわけにはゆかなかった。憤懣のはけ口が必要になるのは当然の成行である。さすがに喧嘩・斬り合いのたぐいはしなかったが、その分酒と女にのめりこんで行くことになった。

これが沢庵のいう『御賢息御行状の事』の実態である。原因が原因だから宗矩としても強く意見することが出来ない。下手に意見して、御前で反抗的な態度でもとられた日には、柳生家の一大事である。

そして寛永三年十月、この五年にわたる心理的葛藤にいやけがさした家光が十兵衛を罷免することでけりをつけた。

十兵衛は一時小田原に謹慎し、やがて大和柳生の庄に戻った。

故老

十兵衛は柳生で生れ、江戸で育った。柳生については、幼年期の僅かな記憶しかない。だがその記憶に残る素朴な柳生谷の印象が、今度帰って見ると一変していた。

山川のたたずまいに変化があったわけではない。柳生の人々の十兵衛を見る眼が激変していたのである。

とにかく氷のような冷たさだった。

十兵衛自身はかなり大きな期待を抱いて柳生へ戻って来ていた。

十兵衛が剣を勉んだのは、勿論宗矩についてだが、その宗矩は父の石舟斎宗厳から多くを勉ぶ暇がなかった。諸国を廻っての仕官さがしに忙しかったからだ。二度の鉄砲傷でまともな歩行の

出来なくなった兄新次郎厳勝だけが柳生の庄に残り、宗矩と兄の五郎右衛門は早くから良き主君を求めて全国を放浪していた。それほど柳生家は窮迫していたのである。関ヶ原合戦を境に、宗矩が秀忠の側近となることによって、柳生家にやっと春が廻って来たのだが、石舟斎は死の時まで宗矩の剣を認めていなかった。将軍秀忠の兵法師範という名のために柳生新陰流の印可こそ与えたものの、それは形だけのことで、実質的に一国一人の新陰流道統を石舟斎が伝えたのは、新次郎厳勝の息子、宗矩にとっては甥に当る柳生兵庫助利厳だった。

宗矩が秀忠に認められたのは、兵法者としての剣技によるものではない。秀忠の影軍団の長としてである。影軍団の職務は探索であり、陰謀であり、暗殺だった。昔から柳生の門弟には、伊賀の忍びが多かった。ほとんど隣り合った土地のためだ。その在地の伊賀忍びを組織することで、宗矩はいわゆる裏柳生を作ったのである。家康の下で伊賀同心、甲賀同心として早くから使われ、すっかり牙を抜かれてしまった忍びたちと違って、在地の伊賀忍びは昔からの剽悍さを失っていない。裏柳生の働きは、戦国生き残りの武将たちさえも慄然とさせる残忍酷薄なものだった。若冠二十七歳で征夷大将軍の地位についた秀忠が、いずれもひとくせもふたくせもある全国の諸大名に君臨してゆくためには、非情な政策と同時にこの残忍無比の影軍団がどうしても必要だった。柳生宗矩の権勢が一介の兵法師範を遥かに越えていたことは、同じ兵法師範だった一刀流の小野忠明の地味な生涯と比較すれば明らかであろう。

従って剣技という点では、宗矩の実力はこの兵庫助利厳に大きく劣るものだったのは当然であ

る。その宗矩に剣を勉んだ十兵衛の剣技も同じことだ。少なくとも正統の新陰流ではない。十兵衛はその事情を宗矩から聞いてよく知っていた。本来なら兵庫助利厳のもとでみっちり剣技を勉びたいところなのだ。だがそれが出来ない事情があった。兵庫の妹は初め山崎惣左衛門という者の妻となったが離別され、宗矩が引きとって柳生の老職柳生主馬と再婚させた。ところが、この柳生主馬という人物が異人種だったため兵庫は怒って宗矩と絶縁するに至ったと『玉栄拾遺』にある。

　それでなくても兵庫は尾張の徳川義直の兵法師範である。将軍の兵法師範宗矩の嫡男が尾張家の家臣について剣法を勉ぶのは差し障りがある。だから兵庫に直接新陰流の奥儀を勉ぶことが出来ない。

　倖いなことに柳生の庄には、石舟斎の教えをじかに受けた高弟が八人、今も現存していた。いずれも高齢ではあるが今尚矍鑠として、日毎道場に立ち、石舟斎直伝の奥儀を若者たちに伝えることに専念しているという。十兵衛の期待とはこの八人の故老たちについて、正統の新陰流を勉ぶことだった。

　ところが実際に柳生に来て見ると、八人の故老たちは道場に全く姿を現わさない。十兵衛が相手に出来るのは剣技未熟な若者たちばかりだった。たまりかねて、八人のもとに使いをやり、道場に招いた。率直に己の剣が正統からはずれていることを語り、祖父石舟斎ゆずりの剣技を伝授してくれるよう、頭を下げて頼んだ。返って来た答は、にべもない拒否だった。自分たちは老い

て石舟斎さま直伝の剣など忘れてしまった。仮りに覚えているとしても、自分たちには既に力がない。それを石舟斎さま直伝ととられては故石舟斎に対して申し訳がたたない。この儀だけは御容赦願いたい。八人が八人、揃ってそう云うのだった。

　一応理屈は通っているが、十兵衛は嘘だと直感した。八人の眼が揃って冷たいのだ。せせら笑っているような気配まである。理解出来なかった。父がこの故老たちを怒らすようなことをする筈がなかったし、自分に至っては初対面である。悪意の対象になる理由がなかった。道統を継いだ兵庫助利厳への義理立てかと思ったが、それにしても眼の色の冷たさが尋常でない。

　八人が帰ってから老職の者に問い訊すと、いずれも公職をしりぞき、家で百姓をして貧しく暮しているという。その態度にどこか反抗的なもの、依怙地なものが感じられるのは確かだが、罰するほどのことでもないし、石舟斎在世中はもとより新次郎厳勝の頃もよく仕えてくれた者たちでもあるので、捨扶持に近い僅かな手当を渡して放し飼いにしている状態だというのである。御立腹ならその手当をやめることも出来ますが、と老職は云ったが、そんなことをしたら宗矩がまた我がままが出たと思うにきまっていた。放置して様子を見るしかない。それに現実に対面した感じでは、八人共老いさらばえて、嘗ての剣技など本当に持ってはいないのではないか、とさえ思われた。

〈案外本音を吐いていたのかもしれぬ〉

　十兵衛が半ばそう思ったのは、所詮剣と人についてまだまだ暗かったためかもしれない。

十兵衛が已の甘さをいやというほど知ることになったのは、それから十日もたたぬ夕暮のことである。

この日、十兵衛は心鬱するままに道場にも顔を出さず、屋敷で昼から酒を飲んでいた。兵法者にあるまじき振舞いなのは、自分でもよく判っていたが、酒でも飲まないとやり切れなかった。柳生にいる意味が全くなくなってしまった。未熟な連中に稽古をつけるのがいらだたしかった。下手な者といくら稽古をしても、自分の腕は上らない。むしろ悪くなってゆくばかりである。これでは家光を相手にしているのと変りがなかった。いっそ柳生を出て、全国を廻る武者修行に出ようか、とも思った。後年は剣術の上手といえば大半が江戸に集るようになったが、この頃はまだ各地に錚々たる遣い手たちが存在した。その剣客たちとの試合は、半ばは真剣勝負に似たものになる可能性が強かったが、それでもこんなぐうたらな生活よりはましだった。正直のところ、十兵衛は酒も女もたいして好きではない。仕様ことなしに励んでいるようなものだった。芸事も駄目だ。父がどうしてあんなに乱舞に夢中になれるのか、どうしても理解出来なかった。十兵衛が好きなのは剣だけだった。自分でも馬鹿ではないかと思うほど剣が好きなのである。それほど好きな道のためなら、試合の揚句殺されたって本望だと思った。

回国修行に出よう。漸くその決心がついた時は、日が暮れかかっていた。決心したことで幾分気が軽くなり、躰を動かしたくなった。ふらりと屋敷を出て村の中を歩いた。野良帰りの百姓

が、皆、道端に寄って丁寧に挨拶するのがうっとうしくて、街道に出る道を登っていった。知らぬ間にかなりの量の酒を飲んだと見えて、珍しく息が切れた。常には酔ったことがなく、いくら大酒しても剣技に衰えはないと広言していた十兵衛だった。

坂道の途中の道端に、なんということなく坐り込んでいる老人がいた。村の子供たちが『あほの太平』と呼んでいじめの対象としている男だった。昔は道場にも熱心に通い、かなりの手利きだったという噂だが、息子をなくしてから急速に老い、今ではすっかりぼけ老人になっている。見たところさすがに昔鍛えただけあって足腰は頑丈そうだが、表情は弛緩し、よだれをたらし、喋る言葉もれろれろで一向に要領をえない。別段わるさをするわけではなく、時を構わず村の中をうろついて、道場を覗きに来ることもある。といって稽古を見るわけでもなく窓の外に放心したように蹲まっているだけだった。要するに無害で哀れな老人というだけのことだった。

十兵衛は全く気にとめることなく、その『あほの太平』のそばを通りすぎようとした。

太平が珍しく、木刀を持っているのに気付いたが、それもどうということはない。昔剣をやったことがあるのなら、持っていて当然の道具だった。杖がわりに使っているのだろうとしか思わなかった。

何事もなく通りすぎ、一間（二メートル弱）と行かぬうちに、十兵衛は背後に凄まじい殺気がふくれ上るのを感じた。咄嗟に思い切り前に跳んだ。跳びながら身を捻って、殺気の主を見た。なんとそれが『あほの太平』だった。

相変らず弛緩した表情で、よだれを流し続けている。そのくせ動作は俊敏の一語に尽きた。十兵衛が跳ぶと同時に太平も跳んだに違いない。着地したのは、ほぼ同時だった。距離は一間あるかなしか。太平の木刀は斜め左下段に構えられている。

太平はそのまま何気なくすたすたと歩いて、十兵衛が気付いた時はもう一足一刀の間境いを越えようとしていた。十兵衛が刀の柄に手をかける暇もなかった。凄まじい逆袈裟が襲って来た。恐ろしい太刀ゆきの迅さである。十兵衛は辛うじてこの剣をかわした。太い木刀が真剣のようにきーんと鳴って鼻先を通り抜けた。木刀は間髪を入れず袈裟に振りおろされて来た。これもやっとの思いでかわした。躰が異常に重い。明らかに酒のためだった。また逆袈裟が来た。第一撃とは逆方向からだった。かわしたが足がもつれた。

〈この次は斬られる〉

そう確信した。相変らず刀の柄に手もかかっていない。そんな暇も余裕もなかった。それほど迅速な斬撃の連続だった。息を吸う隙もないのである。十兵衛は息がつまって来た。

第四撃が真向から落ちて来た。

〈駄目だ〉

十兵衛は己の死を信じた。

瞬間、ぴいいんという澄んだ音が起り、太平の木刀が空に向って飛んだ。

八人の故老の一人、野方甚右衛門が脇差を握って立っていた。太平の木刀を抜き討ちに上へはね上げたのである。そのままの勢いで脇差が落ちて来ると、太平の首筋を斬った。だが血は飛ばない。いつの間にか脇差は握り変えられていた。峯うちだったのである。太平はあっさり失神して、くたくたと崩れた。

野方甚右衛門は素早く脇差をおさめると、膝をついた。

「老耄の愚者の仕業にござりまする。何とぞお目こぼしの程を願い奉ります」

十兵衛はまだ荒い呼吸を続けながら、茫然と甚右衛門を見つめていた。

今の鮮やかな抜き討ちが、いまだに眼前にあった。それは今まで見たどんな抜き討ちよりも迅く、的確だった。動作は流れるようで、一点の無駄もなかった。あんな抜き討ちをくったら、十兵衛がたとえ素面でも、一瞬に斬られていたにきまっていた。それほど見事な剣だった。

「今の技の名は？」

やっと息を整えながら、十兵衛は訊いた。

「別に。咄嗟のことでございましたので……」

甚右衛門は淡々とそう応えた。

そんな筈がなかった。咄嗟に出るにしては端正すぎる剣である。日頃鍛えに鍛え、贅肉をとるように無駄な部分を削りとって完成させた技に違いなかった。本当に咄嗟にあんな磨き抜かれた剣が出るなら、甚右衛門は剣聖である。つまりは石舟斎秘伝の剣を、一かけらといえども十兵衛に教えたくない、その一念なのだ。

「甚右衛門」
　呼びかけた時は、十兵衛の憤怒は腹の底にずしりと根を据えていた。
「その男を斬れ」
　甚右衛門が愕然と十兵衛を見た。
「ぼけていようがいまいが、領主の息子を殺害せんとし、危く成功しかけた男だ。許すことはならぬ」
「お許し下さいませ。ぼけ老人がいたずらに木刀を振り廻しただけのことでございます。仮りにも十兵衛さまの御身に触れる筈もございません」
　甚右衛門は十兵衛の虚栄心をあてにしている。柳生の嫡男が、まさか『あほの太平』に殺されるところだったとは云うまい、と思っている。それによって太平の生命を救うという魂胆だった。
「違うな」
　十兵衛は冷たく云った。
「あほの太平は、もう少しで俺を殺すところだった。俺には刀を抜く暇さえなかった。恐るべき剣だ。お前がはねあげねば、あの一撃で俺の頭はくだけていた筈だ。明らかに獅子洞入の秘剣だ。だが俺はあんなに迅いものだとは、今の今まで思ってもいなかった」
　甚右衛門はつまった。十兵衛の言葉が真実をついたからである。

「それに獅子洞入の剣を払い上げる術など、聞いたことも、見たこともない」
「そ、それは……太平は嘗て柳生の庄きっての難剣の遣い手でございました。太刀ゆきが異常なまでに迅いのがその理由です。しかし、慣れますと欠点が見えるようになります。迅いが軽い。ですから強く払いますと、必ず剣が飛びます。永年のつきあいで手前共は充分慣れておりまする故……」
　甚右衛門は汗をかいていた。なんとか十兵衛を納得させたいのである。自分の術が石舟斎に教えられた、というより、石舟斎と共に研究した秘術であることを、なんとしてでも隠したい一念だった。十兵衛にはその思いだけがよく判った。
「斬らぬか、甚右衛門」
「お許し願います。愚者を斬る剣は新陰流にはございませぬ」
　十兵衛の憤怒が一気に爆発したのはこの時である。
「甚右衛門！」
　喚くなり一気に間合を詰め、必殺の抜き討ちを浴びせた。六十を越した老人が、よもや受けとめることの出来る剣ではなかった。大袈裟に云えば、その一剣には江戸で、宗矩の下で勉んだ柳生新陰流のすべてが籠められていたと云っていい。
　結果は無残なものだった。十兵衛の大刀は太平の木刀と同様、天空高く跳ねとんでいたのである。

甚右衛門はいつ抜いたとも見えぬ脇差をそろりと鞘におさめながら、呟くように云った。

「即刻、柳生を退転つかまつる。それにてお許しの程を」

深く低頭すると、相変らずにたにた笑っている太平を抱くようにして、ゆっくり遠ざかっていった。

〈とめなければいけない。絶対に出てゆかせてはいけない〉

そう思いながら、十兵衛は声も出なかった。

そのうち躰の奥底から慟哭がこみ上げて来た。口惜しいのか、悲しいのか、そんなことはまるで判らなかった。ただ泣いた。樹の幹に顔を押しつけるようにしながら、泣きに泣いた。

旅立ち

屋敷へ戻ると、十兵衛はすぐ老職を呼び、野方甚右衛門の離村をひきとめるように命じた。

「俺の方が出てゆく、とそう云え」

本気だった。とてもこの里にいられるものではなかった。一夜明けたらすぐさま旅立つつもりだった。回国修行の自信さえなくなってしまった。一流を建てた兵法者相手に互角に勝負出来るなどとは考えられなかった。どこか深山にでも籠って、一からやり直すしかない。何年かかるか不明だが、それ以外に自分の剣を見出す道はあるまい。そう決心していた。

完全な自信の喪失である。傲慢の度が激しかった分、落ちこみ方も激しかった。野方甚右衛門は見事に十兵衛の天狗の鼻をへし折ったのである。十兵衛はその夜、輾転反側して、遂に一睡もすることが出来なかった。

早朝、まだ家人たちの眠っている時刻に、十兵衛は旅姿に身を固め、屋敷を出た。誰にも見られずに柳生を出たかった。だがそうはいかなかった。

門を出たところにその女は立っていた。しかも旅姿である。齢の頃は二十二、三。普通ならとっくに嫁に行っている筈だが、この女には人妻の匂いは皆無だった。眉が黒々として白歯なのは娘のしるしである。髪は長く背中に垂らし、美女とはいい難いまでも尋常な顔立ちだった。だが肌は日灼けで黒い。そんなところは百姓女のようだが、挙措に奇妙な優雅さがある。何とも正体の摑みにくい女だった。

女は十兵衛を待ち構えていたように、軽く一礼して、無造作に云った。

「お供つかまつります」

十兵衛は度胆を抜かれたと云っていい。何しろ見たこともない女なのである。それがこんな早朝から待ち構えているとは、どういうわけか。

「供などいらん。大体、そなた、何者だ？」

「きぬと申します」

「名前などどうでもいい。俺はそなたを知らぬ」

「あほの太平の娘でございます」
きぬがさらりと云った。十兵衛はあっと口を開けたが、声にはならなかった。
「父が御無礼を働きましたのにお許し下さったと、野方の小父さまから伺いました。父の生命のお礼を致さねばなりませぬ」
「甚右衛門がそう命じたのか」
「小父さまは、父を引き取って世話してやると申されただけです」
十兵衛は沈黙した。何かいまいましかった。あの爺いは俺の旅立ちの時刻まで、正確に見抜いていた。誰にも見られずに出て行きたい気持を読んでいたのだ。憎たらしかった。ぶちのめしてやりたかった。だが今のままではぶちのめされるのはこっちである。
「気持は判った。だが供はいらん。まして女子など足手まといなだけだ」
「自分の喰い扶持は持参しております」
きぬの足もとに大きな頭陀袋が置かれてあった。恐らく米でも入っているのだろう。十兵衛はうんざりした。
「いい加減にしろ。当てもない旅だ。女子はいらん」
きぬが驚くべきことを云った。
「どこぞの山にお籠りになりますのでございましょ？　女子がいなくては、炊事・洗濯を誰がなさいます？　若様にお出来になることではございません」

十兵衛は絶句した。甚右衛門はそこまで見抜いていたのだ。そして山籠りの決心をした時、喰い物はどうしたらいいのか、と一瞬考えこんだのは確かである。洗濯など考えてもみなかったが、喰い物だけはそうはいかない。十兵衛は米一つ炊いたことがなかった。仕様がない。木の実でもとって喰うか。そう思った。現実にそんなことになったら、のたれ死するだけだったろう。木の実などそう簡単に手に入るものではなかったからだ。女の言葉は憎いほど十兵衛の弱点をついたことになる。
十兵衛は黙って歩きだした。どうせ女の足で自分について来れるわけがない。振り切ってしまえばいいのだ。こんなところに立って押し問答をしていたら、そのうち家人が起きて来るに相違なかった。そうなれば騒ぎになる。とにかく四半刻（三十分）でも早く柳生の庄を離れるのが先決問題だった。
きぬはこの無言を同意ととったらしい。大きな頭陀袋を軽々とかつぐと、嬉々としてついて来た。女にしては長身で、少年のようにしまった躰だった。
意外なことにきぬは恐ろしい健脚の持主だった。振り切るどころか、十兵衛の方が音をあげたくなるほど速く疲れを知らない。結局は供を承知したのと同じことになった。それに旅の間でも、きぬのいる方が随分と便利だった。この女は屈託というものを知らないし、恐ろしく人なつこい。旅籠の人々ともすぐうちとけ、まるで身内のように、忙しい時は助人を買って出るのだか

ら、その主人である十兵衛が大事にされるのは当然だった。お蔭で十兵衛は嘗てないほど快適な旅が出来た。

　この時、十兵衛がなんという山に入ったかは一切の記録を欠くので不明である。だが後に十兵衛の書いた『月之抄』の序文には、もっぱら柳生谷の故郷に帰って山谷を駈けめぐり、『先祖の跡をたずね、兵法の道を学』んでいた、とのみあるから、この時もそうそう遠くまでは行かなかったのではないか、とも思われる。それに全く人跡未踏の深山に入ったのでは、何年も生きてゆくことは不可能だ。やはり里に近い、さほど高山でないところだったのではないだろうか。前記『月之抄』の序文に次のようにある。

『物なき山のすまひ、柴の庵りの風のみあ（荒）れて、かけひ（懸樋）ならでは、つゆ音なふものなし。此世の外はよそならじと侘ても至つれづれ……』

　これを読んだ限りでは、人の訪れることのない山奥という感じはあるが、嶮しく厳しいという感覚はない、と思うのは私だけではあるまい。

　とにかくそのような山中で、十兵衛ときぬの二人だけの生活が始まった。きぬのお蔭で、十兵衛は剣の修行一筋に励むことが出来た。

　十兵衛の思案は、父宗矩が石舟斎から授けられ、自分に伝えてくれたあらゆる剣型と、『あほの太平』と野方甚右衛門が見せた、あの凄まじいまでに迅い太刀ゆきにあった。心を落着けて思い出してみると、二人の使った剣型は十兵衛が父に授けられた型の中に含まれていた。すべて既

知の剣型だったのである。それが全く未知のものに見えたのは、専らその太刀ゆきの迅さのためだった。

　十兵衛は先ずその迅さを身につけることに専念した。父から伝授されたすべての型を、倍の速さで使うことを目標として、ひたすら重い木刀を振った。太平と甚右衛門の太刀ゆきが、常に眼前にあった。それよりも迅くなくてはならぬ。なんとしてでも迅くなくてはならぬ。

　十兵衛ときぬは、山中に入って一月もしないうちに、男と女の関係になった。きぬは生娘だった。父の世話をするためにこの齢まで嫁にもゆけなかった。肉親は父と娘、二人きりだった。だからきぬを娶れば太平もついて来る。誰も『あほの太平』を引きとりたいとは思わなかった。勿論、いたずらを仕掛けて来る若者はいた。五人がかりで手ごめにされかかったことも、一度だけある。その時は突如太平が現れ、木刀を振って五人ことごとくの頭蓋をくだいた。野方甚右衛門が老職に懇願し、この事件は闇から闇に葬られたが、以後きぬに手を出す男たちは絶えた。太平が嘗て甚右衛門と並んで、柳生谷の竜虎と呼ばれた剣士だったことを、住人のすべてが思い出した。頭はぼけても、剣の腕は健在だったのである。いずれも一撃で殺された五人の若者の死体が、そのことをはっきりと示していた。甚右衛門は老職から太平の監視を命ぜられた。太平が暴れ出したら、抑えられるのは甚右衛門一人だったからである。

　十兵衛はきぬが名前に恥じぬ肌の持主なのを知った。衣服に包まれている部分は異常なまでに白く、絹のようにすべらかだった。きぬは明るく野放図ともいえる性格のくせに、閨の中では恐

ろしく羞かしがり屋だった。一切声を上げず、奔放さなど薬にしたくもなかった。十兵衛が離れるとはじめてほっとしたように元々の明るさに戻るのである。なんともいとしい女だった。

十兵衛は完全に酒を絶った。太平に襲われて、手も足も出なかった不覚を忘れることが出来ない。酒さえ飲んでいなければ、あれほどの完敗は喫しなかった筈だった。勝てたとは思えない。だが、せめて抜刀することぐらいは出来た筈だ。酒ぐらいで腕は変らぬ、と広言していた自分が羞かしかった。そして酒を絶った分、きぬの躰に溺れた。それと同時にきぬの控え目な挙措が物足りなくなって来る。なんとか声を上げさせたい、と思った。一方的な交りを嫌うのは男の本性である。十兵衛には閨の智識は皆無だった。平安の昔から我が国に導入された中国の房中術は、公卿の独占する智識であり、武士にまでは及んでいなかった。だから十兵衛は、この面でも全く独学で智識を蓄えてゆくしかなかった。

十兵衛の剣は日一日と迅くなり、遂に眼前に常に映じていた甚右衛門と太平の太刀ゆきの迅さを超えた。だがそこまでだった。ある一点で進歩はぱたりと止まり、なんとしてもそれ以上の迅さにはならない。当然のことだった。だが十兵衛は焦った。これでは不充分だった。もっともっと迅くなければならぬ。勝負に勝つには、人間の限界を超えた迅さが必要である。ひたすらそう信じ、無理な訓練を続けた。

ある晩、腕に激烈な痙攣が走り、動かなくなった。限界に達したのである。十兵衛は絶望し、死を思った。きぬが名も知れぬ木の葉をとって来てはその腕に湿布を繰り返した。旬日で腕の痛

みはとまり、動くようになったが、すぐさま稽古にかかろうとする十兵衛を、珍しくきぬがこわい顔でとめた。十兵衛は歯牙にもかけず稽古を再開したが、報いは立ちどころに来た。また腕が動かなくなったのである。きぬの云う通りだった。無理は禁物だったのである。だが十兵衛はやめなかった。湿布は続けたが、ほとんど動かない腕で木刀を振り続けた。意地になっているとしか思えなかった。

「腕をなくしたらどうなさるのですか」

きぬがたまりかねて詰った。

「迅くない腕なら、なくなってもいい」

十兵衛はそう答えた。

腕は丸太ン棒のように脹れ上り、最後の限界が来た。ある日、歯をくいしばって木刀を振っていると、がきん、というような音と共に、嘗て味わったこともない凄まじい痛みが両腕に走った。十兵衛は危く失神するところだった。木刀は自然に地に落ち、拾うことも出来ない。

〈終りか〉

十兵衛は絶望し、小屋に戻るとすぐ寝こんだ。きぬが湿布を施したが、十兵衛は知らない。今日までの疲労が一気に発したかのように、只もう眠りこけた。

朝が来た。自然に目覚めた十兵衛は、無意識に腕を動かした。軽くそれは動いた。今までとは全く違う軽さなのである。おや、と思った途端に、昨日のことを思い出した。

〈腕を切りとられた……〉

恐怖が襲いかかり、十兵衛ははね起きた。錯覚にすぎなかった。腕は依然として生えていた。しかも信じられぬほど軽々と動く。気のせいか脹れも引いているような感じがした。

十兵衛は大声できぬを呼び、湿布をとらせた。きぬが目を瞠った。確かに脹れは引いていたのである。

「どういうことなんでしょう」

十兵衛は首を横に振った。さっぱりわけが判らなかった。木刀をとって外に出た。一瞬躊ったが、思い切って振った。嘘のように一切の痛みが消えていた。斬撃を次第に迅くしていった。腕に異常はなく、斬撃の迅さは旧に倍するかと思われた。しかも一貫目はある木刀が、箸のように軽く感じられる。

「出来た！」

十兵衛は叫んだ。

「出来たよ、きぬ！」

きぬは土間にぺったり坐りこんだまま、身も世もなく泣いていた。

無刀取り

十兵衛がきぬを連れて柳生谷に戻ったのは、三年後の寛永六年である。十兵衛、この年二十三歳。三年前に較べて躰はむしろ痩せたかのように見えた。あの頃の、立っているだけでまわりの者を威圧するような覇気が、拭ったようになくなっている。だがそれはみせかけだけだ。一見して隆々たる筋肉は見当らないが、僅かに力を入れただけで、腕も太股も倍近い厚みになる。躰じゅうにくっきりと凄まじいまでの筋肉が浮び上る。力を抜けば忽ち元に戻る。一種伸縮自在の柔らかい躰に出来上っているのだった。

十兵衛はまっすぐ陣屋屋敷に行き、驚いて出迎えに出た老職に云った。

「野方甚右衛門たち八人の故老は生きているか」

「はい。いずれも無事息災に暮しておりますが……」

「今日、道場で会うと云ってくれ。太平はどうだ」

「これも相変らず……」

「太平も道場に入れろ。他の者は追い出せ」

無造作に云って出てゆこうとした。老職が慌てて迫った。

「お待ち下さい。八人の老人ども、以前のように道場に来る気はないかも……」

「今度は必ず来る」
あっさり云って十兵衛は去った。
十兵衛が云った通り、道場には野方甚右衛門以下八人の故老たちが、いずれも改まった衣服をつけ威儀を正して坐っていた。若者たちの姿は一切ない。
十兵衛は座につくと見廻して訊いた。
「太平はどうした？」
「只今」
甚右衛門が素早く答えて立つと、控えの間から太平を引っぱって来た。一応紋服は着せられているが、相変らずよだれを流し、表情はうつろだった。
「木刀を渡せ」
十兵衛の声は聞きようによっては氷のように冷たかった。
甚右衛門は一瞬躊ったが、すぐ刀掛けから蛤刃の木刀をとって来て、太平に渡した。
うつろだった太平の眼に、瞬時に光が甦った。木刀を軽く握って立った。
「しゃーっ」
鋭い掛声が洩れた。木刀の先は斜め左をさし、自然に下段につけられている。柳生新陰流にいう無形の位だった。新陰流では『構え』という言葉を嫌い『位』と云う。『構え』が固定したも

の感を与えるのがいけないのである。
十兵衛が立って来て、道場の中央に立った。素手である。だらりと両腕を垂らした自然な態度だった。なんと脇差も差していない。
甚右衛門が何か云いたそうに口を開きかけて、又つぐんだ。いずれにしても遅すぎた。
『あほの太平』はもうするすると十兵衛に向って歩き出していた。無造作に一足一刀の間境いを越える。
十兵衛は全く動かない。僅かに身体が前傾している。
甚右衛門以下八人、ほとんど息を殺して十兵衛の挙措を見つめていた。
木刀が恐ろしい迅さで撥ね上った。三年前と同じ逆袈裟である。相変らず凄まじいまでの迅さだった。
驚くべきことが起った。木刀が撥ね上るよりも早く、十兵衛の躰がかがんだのである。しかも空を裂いてゆく逆袈裟の木刀を下から追うように弾ね返った。その速度は太刀ゆきの速さを遥かに上廻った。そして右の拳が太平の握った木刀の柄を下から上に向って強く叩いた。木刀はすっぽぬけたように飛び、音をたてて天井にぶつかった。
甚右衛門たちは思わずどよめいた。
「無刀取り！」
という声が上った。

確かにこれは柳生新陰流の秘中の秘ともいうべき『無刀取り』の術だった。流祖上泉伊勢守がどうしても工夫がつかず、柳生石舟斎にその完成を託したといわれる、曰くつきの秘術である。石舟斎は永年かかってこの術を生み出し、それによって伊勢守から、新陰流の道統をさずけられている。今の世にこの術を伝える者は、尾張柳生の兵庫助利厳ただ一人と信じられて来たものである。宗矩はこの術の姿は知っていたが、遂に自分のものにすることが出来なかった。それを、今、十兵衛が見せたのである。

八人の故老たちにとっては、驚天動地の出来事だった。十兵衛には何ほどのことでもなかった。すべては迅さの問題だった。上手の者をも遥かに超える太刀ゆきの迅さを身につけた時、眼もまたその迅さを獲得した。相手の動きがすべて緩慢に見える眼である。相手の動きの一つ一つがゆっくりと虫の這うように見えれば、かわすことも、隙をつくことも容易であろう。十兵衛の眼も動作も、最早常人の世界にはいなかった。数段高い迅さの世界にいた。だから充分の余裕をもって、太平の剣を迎えることも出来た。

十兵衛は茫々然と佇んでいる太平の肩を抱いた。

「おきぬを有難う。あんな素晴しい女はいないよ」

突然、太平の眼から大粒の涙が流れ落ちた。次いで大きな声をあげて泣いた。

「きぬ！　きぬ！　どこへいったんだ、きぬ！」

暴れようとしたが、十兵衛が両肩を抱いた腕に力を入れると、ぴりっとも動けなかった。

「きぬは帰って来たよ。俺と一緒にな」

太平には十兵衛の声がきこえないようだった。益々大声をあげて泣いた。十兵衛はいたわるように何度も抱きしめていた。

野方甚右衛門が不意に立って出ていった。

やがて道場の裏で、ぴたりと正坐したまま泣いている甚右衛門の姿が見られた。

「どうやらお役目を果しました、石舟斎さま」

甚右衛門は涙の中でそっとそう呟いた。

跛行の剣

戦場

新次郎厳勝は走っていた。

濛々たる砂塵が立ちこめ、人影は朦朧として影絵のようだ。

兵士たちの喚声、法螺貝や陣鉦の音が、耳を破りそうに鳴り響いている。その中で自分と味方の兵士たちのずしんずしんという足音が、まるで主調低音のように抑えられ、だが腹の底にこたえる頼もしさと力強さをもって響き続けていた。

この調子だけをはずさずに、どこまでもつっ走ればいい。新次郎はいつかそんな気になっていた。

新次郎の前には誰もいない。味方は全員一間のうしろにいた。新次郎はこの徒歩部隊の隊長だった。隊長がまっ先駆けて走らなくては、部下は誰一人ついて来はしない。部隊の全員を引っぱり、酔わせ、狂気にとりつかせるのが隊長の役目である。引っぱるだけで酔わせることが出来なければ、隊長は一人だけ突出することになり、確実に死ぬ。部下に自分の熱と狂気を伝染させせね

ばならない。殺人への渇望に燃え上らせなければいけない。すべては隊長の気力一つにかかっていた。

新次郎厳勝の気力は充分に充実している。頭の中には斬人への思いだけがぶんぶん音をたてている。他のものは一切消えていた。

新次郎がたった一つ気にしているのは、自分の走りが遅いことだった。これだけはどう仕様もない。新次郎にも嘗ては羚羊の軽さで風のように走った時期があった。十六歳の初陣の時である。その時は部下たちは新次郎について来るのに難儀したものだ。だがたった一発の銃弾が新次郎からその疾風の足を奪ってしまった。左腰骨を射たれ、危く死はまぬかれたものの、以後躰を大きく傾けずには歩行出来なくなってしまったのだ。だから今懸命に走っている新次郎の姿は、一歩一歩左に傾き右に傾き、見ていて辛くなるような不様なものだった。それでも並の人間の速さは保っているのは、血を吐くような修練の結果だった。部下たちは全員それを知っている。狭い村の中のことである。毎朝毎朝、雨が降っても風が吹いても、一日として休むことなく、ひょこたん、ひょこたんと走り続けていた新次郎の姿を、彼等のすべてがいやになるほど見て来たのだ。どんなに格好が悪くても、人並の速さで人並の距離を走り通せるまでに、四年の歳月がかかっていた。

だからこそ、今、最前線に立って、顔中口にしてわけの判らぬ怒号を喚きながら、陣太刀を肩にかつぎ、ぶざまな格好で敵陣へ駆けて行く新次郎の姿が彼等には充分感動的なのだ。それだけ

で新次郎は彼等を酔わせ、狂気に駆り立てることが出来た。その上、部下たちの腹の底には一種のつぐないの気持がある。初陣の時、あんなに独走させず全員が一丸となっていたら、新次郎は狙撃されなかったかも知れないのだ。誰もがそれを自分の罪のように感じ、なんとしてでもつぐないたいと思っていた。それがこの部隊を恐るべき戦闘集団にしたてている。

不意にさっと砂塵が晴れ、敵の部隊がぎょっとするような鮮明さと大きさで目の前に現れた。自分たちを圧倒する巨大な壁のように見える。しかもその壁は恐ろしい迅さでこちらに殺到して来ているのだ。

不思議に新次郎に動揺はなかった。

〈今日は色が見える〉

そう思った。初陣の時には、こうして敵と向い合った瞬間、忽然とすべての色が消えてしまったのを今でも明白に覚えている。色が消え、すべてが白と黒に変ってしまったのである。眩しいような白と吸いこまれるような黒。そして白い部分に行きつくために、黒に向って渾身の力でぶつかっていった。相手の首筋を斜めに切り裂いた時、凄まじい勢いでほとばしり出た大量の血でさえも黒だった。断じて赤くはなかった。

〈今日は血は赤く見えそうだ〉

頭の片隅でそう思いながら、新次郎は自分の正面の鎧武者に向って跳躍した。躰を傾けた場所からの突然の高い跳躍は、大方の相手の意表をつくことになる。この相手も例外ではなかった。

思わず見上げた男の咽喉笛を新次郎の太刀が正確に切り裂き、鮮血をほとばしらせた。

〈やっぱり赤い〉

思いながら着地すると、今度は地べたに這うようにして一人の両脚を切断し、返す刀で別の一人の股倉から腹まで思い切った逆袈裟で斬り上げた。

〈顔が見える!〉

新次郎は素直に驚いている。初陣の時には相手の顔など見てはいなかった。見ても見ていない。戦いが終ってただの一人も思い出せなかった。それが今日は鮮明に見える。痛さで歪む顔。自分の血の量に茫然としている間の抜けた顔。睾丸を掴んで泣きべそをかいたような顔。初太刀で斬った三人の武者の顔は、到底忘れられそうにもないほど頭に焼きついた。

同時に奇妙にも、今まで昂っていた気持がすとんと落着いてしまったようだ。

〈なんて馬面だ〉

替って前に立った男の顔が異常に長かった。その顔に恐怖と憎しみの入り混った気持がありありと浮んでいる。

新次郎はその馬面を正確に額から顎まで真一文字に斬り割った。同時に我から転って、横の敵の片脚を刎ねとばす。

上から槍が降って来た。

〈有難うよ〉

その槍を掴み、相手の引く力に乗って起き上りながら逆袈裟に斬り上げ、ついでに隣の髯面の咽喉を突き刺した。

鉄砲の出現によって甲冑は昔より簡単になり軽くなったが、その分堅固さも増し、冑や胴丸の部分などは一枚鉄で刀が通りにくくなっている。だから刀で斬る部分はきまっている。顔、首、腕、脚、股間の五ヵ所だった。勢い斬撃の方法も限られたものになる。要はどれだけ正確にどれだけ迅く太刀が振えるかにかかっていた。

新次郎はもう何人の敵を斬ったか判らなくなっていた。眼の前が赤い靄に包まれているようだ。眼に映るものすべてが赤い血の色だった。彼自身の躰も真っ赤だった。すべてこれ返り血である。不思議なほど怪我は負っていない。

〈しまった!〉

不意に眼の前の人間の壁がなくなった。空白の野原が拡がっていた。いつの間にか敵の前線を突破していたのである。第二陣までは三町もありそうな、何もない空白地帯だった。

〈鉄砲にやられる〉

条件反射のように悲鳴を上げたくなった。

初陣の時と変りなかった。自分だけが突出しすぎたのだ。もっとも今度の条件は前とは少し違った。新次郎の斬撃が余りに迅く凄まじすぎて、敵が争って彼の前から逃れたためだった。部下たちの伎倆をもってしては、その後を追い切れなかった。総崩れになった敵を蹴散らして、新次

郎のすぐうしろまで迫ってはいたのだが、僅かに遅れた。

一斉射撃の轟音が起り、新次郎の躰は丸太ン棒でぶん殴られたかのように後方へすっとんだ。

新次郎は頭を一つ振ると立ち上ろうとした。驚くべき生命力だった。だが腰から下に感覚がない。怪訝そうに自分の躰を見おろした。前に射たれたあたりに、又被弾したらしい。血でぐしょ濡れになり、骨がくだけているようだった。

〈また走る稽古か〉

そう思ったのが最後だった。柳生宗厳の嫡男、柳生新次郎厳勝の意識はそこでぷつんと切れた。元亀二年（一五七一）初秋八月のことである。

地獄

もう走る稽古さえ出来なくなった。

左の腰骨が今度こそぐずぐずに崩れてしまったのである。

新次郎は丸二年、坐ることも出来なかった。天はどうしてあの時自分を死なせてくれなかったのかと、そればかりを思いながら天井を睨んでいる二年だった。

その間に骨の間に肉が入り込み、それなりになんとか固まったらしい。射たれてから二年目の天正元年（一五七三）晩秋のある晩、新次郎は突然起き上ることが出来るようになった。

新次郎の妻宗は伊賀忍びの頭領仁木伊賀守義政の娘である。徳川家康の正妻築山殿の姪だと云われている。新次郎が十九歳の時、三つ下の十六歳で嫁に来た。

新次郎の負傷以来、宗は新次郎の寝間の隣室で寝ていた。夫婦のことは全く絶えている。新次郎は不能者になっていたのだ。

それなのにその晩、新次郎は宗のあの時の声を聞いた。腰から下が動かなくなって以来、まるでその代償とでも云うように、新次郎の眼、耳、鼻の感覚は異常なほど鋭敏になっていた。その耳が聞きつけた喜悦の喘ぎだった。考えられることではなかった。新次郎は宗の名を呼ぼうとして、はたと口を噤んだ。今度は男の呻く声が聞こえた。その声が聞き慣れた父宗厳のものであることに気づいて、新次郎は凝然となった。悪夢の中にいる思いだった。

〈醒めろ！　醒めてくれ！〉

祈るように思ったが、男と女の声は嫋々と続き、悪夢は深まる一方だった。

限界だった。

喚こうとしたが、咽喉が塞がったように、声が出ない。

だが何かせずにはいられなかった。

躰を捻ってうつ伏せになった。

腕の力だけで這った。隣室との境まで何とか達した。息をつめて僅かに襖を開けた。闇だった。底深い闇の中に、獣の蠢く気配だけが濃密に立ち籠めていた。

見えない。何一つ見えない。新次郎は焦れた。両腕に渾身の力を籠めて、上体を起そうとした。上体は持ち上ったが、まだ見えない。動かない腰に鞭うつようにして更に躰を伸ばした。

その時、それが起った。躰の中で、ばしっというような音が聞こえ、次の瞬間、新次郎は坐っていた。きちんと膝を揃えて坐っていた。だがそんなことは新次郎の意識になかった。

見えたのである。

どうやら部屋の境に丈の低い枕屏風を立ててあったらしい。正座することによって、その向うが見えた。しかも正にその瞬間に仄に月光が部屋の中にさしこんで来た。

信じられない光景だった。

宗の白い脚が宗厳の胴を抱え、その背でしかと組まれていたのだ。白い脚は月光に濡れながら、それ自身生ある物のように、緩やかに律動を繰り返していた。

新次郎は放心したように、この新しい夢を、新しい地獄を見つめるばかりだった。

翌朝、身仕度を整え、いつものきりっとした主婦に変貌した宗は新次郎の部屋に入った。入るなり、思わず悲鳴を上げた。

新次郎が坐っていた。昨夜と同じ姿勢で、戸口に背を向けたまま、宗の部屋に向って、きちんと正座していた。襖の隙間だけが閉じられていた。

「お坐りに……」

宗の声がつまった。新次郎の姿勢に疑惑が生じたのである。何故あんな所に……。だがその疑惑より、新次郎が坐れたという奇蹟の方が重大だった。

「お坐りになれたのですか!」

新次郎はゆっくりと両掌を躰の脇に降ろし、腕の力で下半身を持ち上げるようにして身体の向きを変えた。脚は折れ曲ったままである。だが腰は崩れなかった。

宗は息を呑んだ。新次郎の顔が一夜で変貌していた。幾条もの深い皺がその顔に刻まれていた。それは地獄の中で荒れ狂った男の顔に、鬼の刻んだ長い爪の痕だった。とりわけ口のまわりの皺が深く、二十二歳の新次郎を翁のように見せていた。

「利平を呼んでくれ」

利平は宗の父仁木義政の下忍だった男である。雑用を果すために宗につけられて柳生に来た。その器用さを買われたためだ。本当に利平は何でも出来た。商売ものの忍びの術も一流だったが、鍛冶・木工に巧みで、鉄砲づくりから家の建築まで朝めし前にやってのける。料理人はだしの包丁使いだし、薬の調合にも詳しい。医師と云っても通るほど診立ても確かなら、外科の腕もいい。新次郎の再度の負傷以来、いつか新次郎付きになり、つきっきりで世話をするようになった。年齢のほどは判らない。三十七、八と云っても通るし、五十を過ぎているようにも見えた。肝心の本人さえ、何歳になるか知らないのである。利平はこの二年、木枠のようなものを作り、新次郎の腰を支え固定させて来た。苦痛を軽くするためと傷が自然に固まるのを邪魔しないため

だった。結果としてそれが有効だったことになる。

新次郎は宗も近づけず、利平と長いこと何事かを相談していた。

次の朝、利平は異様な道具を作って来た。今日で云う松葉杖である。但しそれは鉄製だった。かなりの重量があるところを見ると無垢のようだった。杖の先は木でくるみ、当りが柔かいようにしてある。

新次郎は松葉杖を両脇に挟み、利平に持ち上げられるようにして辛うじて立った。

その姿を見た時、宗は思わず声をあげて泣いた。二年ぶりの立ち姿だったのである。

新次郎の脚には本来何の故障もなかった。だが二年寝たきりだったために、その機能を忘れていた。脚に本来の働きを思い出させてやらなければならないんです。利平はそう云った。腰を守る枠はそのままに、松葉杖をついた歩行訓練が始まった。足に重い鉄の高下駄をはいたりもした。それだけではなかった。鉄の松葉杖もまたそれなりの訓練の道具だった。それは腕の筋力をつけるためのものだった。新次郎はそれを振り、握力と筋力を鍛えた。少しずつ少しずつ、歩行の距離は延び、やがて柳生谷の人々は、松葉杖をついた新次郎が一日中村のまわりを歩く姿に慣れていった。

この頃、足利将軍義昭に味方していた父柳生宗厳は、義昭が織田信長に追われ、足利幕府が滅びたのを境に、一切の公職を去り、石舟斎と号し、柳生の庄に籠って剣の修行一筋に生きることになった。所領二千石を奪われ、一介の牢人になったのである。家臣たちはほとんどが帰農し、

野良仕事のかたわら剣を勉ぶことになった。この逼塞の状態は以後二十年に及んだ。

だが新次郎はそんなことには一切関わりがないようだった。心にかける気配もなかった。毎日毎日判で押したように歩行練習と筋力をつける鍛練を繰り返すだけだった。その傍らには常に利平の姿があった。

宗と石舟斎の関係は続いていた。あの朝、何故新次郎が自分の部屋との境に坐っていたかという疑問は、宗の胸を去ることはなかったが、宗は新次郎に訊すことも、石舟斎に告げることもなかった。

〈仕方のないことです〉

そう諦めていた。居直ったような形だった。

新次郎も宗を責めることはなかった。まるで空気を吸うように自然に対していた。だがあの晩に刻まれた地獄の鬼の爪痕は、日一日と深くなるようだった。新次郎の顔は年に似合わぬ老成したものになっていった。

宗は時に新次郎の眼の底に冷やりとしたものを見るように思った。妻でもなく、人でもない、何か別種の生物を眺めるような冷たい眼だった。その時だけ宗の胸の中に深い悲しみが拡がる。だがどう仕様もなかった。何を云い、何をすればいいのかと、自分に問うてみることは出来る。でも答えはなかった。誰も、何も、決して答えてくれようとはしなかった。

そんな二人を、周囲の者たちは、穏やかないい夫婦だと噂した。

そして三年が経ち、宗は男の子を産んだ。長男久三郎である。天正四年（一五七六）、新次郎は二十五歳。宗は二十二歳だった。

宗の懐妊が明らかになった時、利平が新次郎に淡々と云った。

「お父上を殺しますか」

利平は新次郎が男の機能を失っていることをとうに知っていた。

新次郎は短く、

「いや」

と云っただけだった。

この頃には永年新次郎の腰を支えて来た木枠は姿を消していた。腰は完全に固まり、どんなに動かしても何の痛みもなかった。両脚も自分たちの役目を思い出し、立派に機能を果たすようになった。だが走るのだけは無理だった。走ろうとすると大きく平衡が崩れて転倒する。跳ぶことも無論出来ない。脚の弾力はあっても、腰が支えられないのだ。新次郎に出来ることは、上体を大きく傾けるという異様な形で、だが常人より遥かに速く歩行することだけだった。

「杖を変えたいと思う」

新次郎はそう云い、どんなものが望みなのか詳しく説明した。利平が難しい顔で意見を云い、新次郎が反論し、いつ果てるともない争論になった。利平も石舟斎を殺す話よりずっと愉しそうだった。

「父上が道場でお待ちです」

と宗が告げたのは、それから数日後のことだった。

新しい杖が出来て、利平がそれを新次郎の躰につけているところだった。肱まで伸びた支えがついていて、更に手で握るようになっている鉄の杖である。前のよりずっと短かった。それだと脇に挟むことなく、もっと自由な感じで躰が支えられる。

「すぐ行く」

新次郎は新しい杖をついて部屋中歩いて見た。利平が目を細めて見ている。

「身体がお軽そうに見えます」

嬉しそうだった。

「本当に軽いんだよ」

新次郎がくるりと回転してみせた。宗ははっとした。今迄なら、こんな真似をしたら間違いなく転んだ筈だ。だが新次郎は平然と立っていた。そればかりかまた回った。更にもう一度。回るたびに躰が低くなってゆくのに、利平だけは気づいていた。目を光らせて見つめた。

はたと回転がとまった。その瞬間、突如として新次郎の背が伸びた。それだけでどきりとするような迫力があった。

宗さえもそれに気づき、顔色を変えた。何故か斬られたと感じた。
利平がにたっと笑った。
「出来ましたな」
「いや」
新次郎が渋い顔で云った。
「まだまだだ」
暫く考えこむように歩いた。杖の調子を見ているように見えた。そのまますっと庭に降り、道場の方へ歩き出した。利平がなにげなく追ってゆく。
宗は躰がしびれたように動かない。ぺたっと坐りこんだまま、大きく傾斜しながら去ってゆく新次郎の後姿を見送っていた。
〈私は何を見たのだろう〉
判らなかった。新次郎は三度回転し、とまった。外面的にはそれだけだった。だが絶対にそれだけではなかった。新次郎の中の何かが、永いこと身を潜めていた、何か途方もなく恐ろしい物が、忽然として姿を現し、そして一瞬に消えた。そんな感じがした。その途方もなく恐ろしい物が何であったのか。それが宗には云えなかった。それが新次郎の胸底に潜む地獄の鬼の姿だとは宗には遂に判らなかった。だが自分の生命も、ひょっとしたら石舟斎の生命も、その途方もなく恐ろしい物の前では、ひとたまりもなく失われそうな予感がした。

宗の胸は波立ち、躰はいつまでも震えていた。

石舟斎は道場の中央に坐っていた。まわりには誰一人いない。
新次郎は全く表情を消してひょこたんひょこたんと進み、石舟斎の前に正座した。杖は二本とも自然に躰の両脇に置いている。腰には短い鎧通しが差されているだけだ。
石舟斎の方は大脇差を腰にし、膝の上に鉄製の孫の手を横たえていた。尺五寸ほどの長さだ。
新次郎は無言で石舟斎の顔を見つめた。父が何故人払いした道場に自分を呼んだか、新次郎には判っている。下手をすると斬られるかもしれぬと覚悟もしていた。身内の恥が曝されるようなら、斬るしかない。そう決意している父の気持が手にとるように判った。
〈勝手なもんだ〉
新次郎は些かの怒りの感情もなしに、冷静にそう思った。もっとも家長という者は、常に勝手なものだ。別して今の石舟斎には柳生新陰流と云う流儀以外には何物もなかった。流儀を守るためなら、何でもする筈だった。
「新次郎」
石舟斎の声は新次郎でさえ聞きとりにくいほど低い。
眼は炯々と新次郎の眼を見つめている。
「わしには子が要るのだ。健やかで天才を持った子が要るのだ。一国一人の柳生新陰流の道統を

伝えるべき子がな」
　それだけだった。いいわけも謝罪の言葉もない。自分の都合だけを述べた。後は黙りこんだ。返事を待っているのだった。
「返事が要るんですか」
　暫くして新次郎が訊いた。
「わしには要らん。だが宗には要る」
「好きなように、とお伝え下さい」
　突然、石舟斎の顔に朱がさした。怒りに違いなかった。だが新次郎の冷然たる表情を見ると、急速に平静に戻った。
「変ったな、お前」
　嘆きではない。ただの確認だった。
「変りました」
　新次郎の言葉にも何の感情もない。事実を伝えただけだ。
　石舟斎が頷いた。
　新次郎は新しい杖を両肱にはめ、すっと立った。ほとんど腕の力、それも左腕の力だけでだ。右腕は石舟斎の攻撃に備えておかなければならなかった。大人しく斬られるつもりなど新次郎には毛頭ない。

　石舟斎の眼がすっと細まった。
「その杖、仕掛けがあるな」
　質問ではない。断定だった。
　新次郎は無言で右の杖を持上げ、指で一個所を押した。かしゃっ、という音と共に、杖の先に長い槍の穂が生えた。
「左もか」
　石舟斎が予期していたように訊く。
　新次郎は右に重心を移し、左の杖を持ち上げた。再び、かしゃっ、という音が起り、やや短めの槍の穂が先端からとび出した。
「成程」
　石舟斎の声に、かすかだが嘲りがある。
「利平は玩具を作るのが巧いな」
　仕掛杖など児戯に類すると云っているのだ。
　新次郎は冷然と応えた。
「健やかならざる者も、生きねばなりませんから」
　そのまま礼もせず、相変らずひょこたんひょこたんと戸口へ向った。
　その背を見つめていた石舟斎の顔に、僅かに驚嘆の色が浮んだ。その背は斬ることが出来なか

った。平衡を失っている分だけ次の動きの予測がつかないのだ。

「新次郎」

戸口をくぐりかけた新次郎に石舟斎が声をかけた。

「明日から道場に参れ」

新次郎が振り返って石舟斎を見た。その眼が〈何のために〉と訊いている。

「一刻でよい、坐っておれ」

新次郎は肩をすくめ、姿を消した。

石舟斎の胸から深い溜息が洩れた。

殺人刀

翌日から道場の片隅に新次郎の正座した姿が見られるようになった。勿論、稽古をするわけではない。父に云われた通り、きっかり一刻だけ黙然と坐っているだけだった。その他の時間は従来通り、利平と共に柳生の山野を歩き廻ることで過した。

七年後、宗はまた男の子を出産した。兵介と名付けられた。更に二年後、三男の権之助が生れる。

その間に松永弾正久秀は織田信長に殺され、信長はまた明智光秀に殺された。光秀が百姓の槍

にかかって死に、天下は羽柴藤吉郎秀吉のものとなったが、此処柳生の庄では何一つ変ることはなかった。柳生石舟斎の剣名は高くなったが、依然として一介の牢人である。文禄三年（一五九四）石舟斎は二十四歳になった五男宗矩をつれて京に行き、徳川家康に無刀の術を披露し、そくばくの扶持を貰うことになったが、生活が変るほどのことではなかった。

慶長二年（一五九七）十二月、新次郎の長男久三郎は朝鮮の役に加わり、蔚山で戦死した。二十二歳である。久三郎は結局、石舟斎が柳生新陰流の道統を託すべき天才を持たなかったことになる。

皮肉なことに石舟斎の正室の子は、五郎右衛門といい、又右衛門宗矩といい、凡庸の剣士であり、どこから見ても天才ではなかった。一人、新次郎の次男、兵介だけが、その天才の萌芽を示した。石舟斎はほとんど狂喜したと云っていい。明けても暮れても兵介一人にかかり切りになった。柳生家のすべての男子の中で、兵介だけが石舟斎と全く同じ体型をしていたと云う。師と同じ体型をした弟子の方が容易に師の技術を受け継ぐことの出来るのは自明の理である。柳生家にかかわる者、特に五男の宗矩は嫉妬の念を籠めてそのことを云い立てたが、実情は違っていた。

石舟斎に最も似た体型をしていたのは新次郎だった。少なくとも十六歳で鉄砲傷を受けるまでの新次郎は、父と瓜二つだった。兵介が生れた時、新次郎は三十二歳だったが、次第に育って来る兵介が若年の自分にあまりにも似ているのを見て、強い衝撃を受けた。

年と共に兵介は益々新次郎そのままになり、性格まで似て来たようだった。新次郎の心に奇妙

な悦びが生れたのは、兵介が十歳の頃である。新次郎は四十二歳。柳生の者たちに知られることなく、秘かに磨き上げて来た独自の剣法は漸く円熟の期に達しようとしていた。

この頃になって、新次郎はやっと父の気持が判って来た。己れが骨身を削る思いで磨き上げて来た剣法が、受け継ぐ者とてなく、己れ一代で絶えるという思いは、耐えがたい寂寥感を生むのである。

ある夕暮、新次郎は裏庭で独り稽古に励んでいる兵介を見た。石舟斎の作った型に遮二無二自分をはめこもうとする努力が痛々しかった。それでつい声をかけてしまった。

「そんなことをしなくていいんだ」

兵介は驚いたように新次郎を見た。

気がついた時は、新次郎は右手にひきはだ竹刀を握り、左手で杖をつきながら、その型への別様な入り方を見せていた。少なくとも自分にとってはその方が自然に出来た入り方だった。二、三度やって見せて竹刀を返した。

「やってみろ」

新次郎は竹刀のかわりに杖を使い、打太刀をつとめてやった。兵介は最初は戸まどったが、二度目には正確に新次郎の教えた通りの入り方で自然な使太刀を見せた。前の入り方より楽な感じでしかも迅かった。この方が躰に合っていたのである。そうとしか思えなかった。

〈見たか〉

新次郎は腹の中で石舟斎に毒づいた。

奇妙な快感があった。

「わしが教えたと云うでないぞ。咎められたなら自然にこうなったと申せ」

兵介は目を丸くして、こくんと頷いた。

次の日、兵介は新次郎に授けられた通りの入り方で使太刀を使った。わざとしたわけではない。使っているうちに自然とそうなったのである。それだけしっくり躰に合った感じだった。

一瞬、石舟斎が息を止めたように見えた。眼の光が僅かに増した。だが何も云わなかった。兵介の入り方を認めたことになる。兵介は覚悟していた叱責がないので安心してその独自の入り方を繰り返した。石舟斎が兵介の小さな躰に新次郎を重ね合せて見ていようとは、兵介の稚い考えの思い及ぶところではなかった。

以後、兵介が裏庭で業を使うのを見てやるのが新次郎の日課になった。殆んどの場合、新次郎は口を出さなかった。打太刀をつとめてやることはあっても、批評はせず、まして別個の太刀の使いようを教えることなど皆無に等しかった。新次郎は新次郎で、幼い兵介の向うに石舟斎を見ていた。そしてほんの時たま、石舟斎の業の無駄を見たと信じた時だけ、兵介に無駄を省く使い方を教えた。石舟斎はそれに気づいても一言の文句もいわず、咎め立てや再度の訂正もすることがなかった。石舟斎もそこに新次郎の影を見ていた。

いるかに見えた。兵介の躰が二人の立合いの場だったとも云える。

石舟斎と新次郎は、兵介を媒介として、お互いの業を見極め、お互いの隙を見定めようとしていたかに見えた。

慶長五年関ヶ原合戦の際、又右衛門宗矩は家康から直々柳生の庄の地侍たちを組織し、徳川の尖兵として石田方西軍を攪乱すべしとの命を受けて勇躍帰郷したが、石舟斎はうかつに家康の口車に乗って兵を起せば、石田方の大軍によってひとたまりもなく踏み躙られることを察し、断乎として拒否した。それに三成の侍大将島左近は、石舟斎の永年の友でもあった。宗矩は面目を失って僅かばかりの手兵を集めて戦闘に参加したが、華々しい手柄を立てることなく終戦を迎えた。それでも宗矩は柳生の旧領二千石を新たに与えられている。家康が柳生石舟斎の名に宣伝価値を認めた結果ではないかと思う。

柳生家の逼塞時代はここに終りを告げた。功労者はいわずと知れた宗矩である。石舟斎の判断通りに動いていれば、逆に新たな弾圧を受けたかも知れないのだ。

新たに自分用に千石を頂戴して、秀忠の側近になった宗矩の最大の不満は、上泉伊勢守から石舟斎が貰いうけた、一国一人の新陰流の道統が、自分にではなく、甥の兵介に授けられたことだった。確かに宗矩は兵介ほど長期間石舟斎手ずからの教えは受けていない。柳生以外の土地に立身の道を求め、若年の頃から諸国を流れ歩いていたからである。だがそれも結局は柳生家のためではないか。旧領を恢復出来たのは誰のお蔭か。宗矩はそう云いたかったに違いない。だがさす

がの宗矩も石舟斎に苦情を云う勇気はなかった。

慶長十年六月吉日、兵庫助利厳と名を改めた兵介は、二十三歳にして石舟斎の手から一国一人一子相伝の新陰流の印可を受け、その道統を継ぐただ一人の男となった。

翌慶長十一年の元旦早朝。

当時五十五歳の新次郎は、七十歳に近いがまだ壮者のように頑健な利平と共に、いつものように柳生の庄内を歩き廻るために出かけて行った。

山間の村は雪に埋れ、寒気は例年になく厳しかったが、この二人の老人には全くこたえる様子もない。永年にわたって鍛え抜いた躰はまるで岩石同様だった。誰が岩石に向って寒暖を問うだろうか。

村はずれまで来た時、新次郎の足が自然にとまった。利平が怪訝そうに見た。眼に入る限り白一色の風景しかなかった。動くものは何一つない。

「八人」

新次郎が呟くように云った。

「いずれも一流の剣だ」

この頃、新次郎が観法の修行に身を入れていることを、利平だけは知っている。こればかりは利平にもついてゆける境ではなかった。

「近づいて来る。わしらの歩き癖を心得ているようだ」

利平は首を振った。容易には信じ難かった。

柳生一族の中で、新次郎一人は落ちこぼれである。道場で一刻を過しても、一度として打合ったことはなく、ひきはだ竹刀を握ったことさえない。壁のしみのような存在だった。特に近年は、壁を背にして眠っているとしか見えない。よくあれでお師匠さまは黙っていられる。門人一同、そう云い合っていることを利平は知っていた。そんな新次郎を狙う者がいるとは思えなかった。

「さて、どうしたものかな」

他人事(ひとごと)のように新次郎が云った。

「逃げるのも面白くないな。どうだ。やって見るかね、利平」

「やる、って……」

利平は不思議な物を見るように新次郎を見た。

「あのことですか」

「久し振りに戦って見るか、と云うのさ。刀をくれ、利平」

利平はこの頃、新次郎の供をする時はいつも途方もない長い刀を背に負ってゆく。刃長三尺六寸はあろうという化け物のような大業物(わざもの)である。こんな長刀は常人なら抜くことも出来ない。厚重ねの剛刀(ごうとう)で、目方も並大抵ではなかった。利平にこんな刀が使えるわけがない。新次郎のため

だった。

利平はその長刀の下緒(さげお)の紐をほどきながら、

「本気ですか」

と呟いた。三十五年の永い間、独り稽古しかして来なかった新次郎である。まして真剣勝負などするわけがない。新次郎の底知れぬ腕のほどを知っているのは利平だけだが、その利平でさえ真剣勝負となっては自ずと顔色が変って来るのだった。

「着けてくれ」

新次郎が背を向けた。利平がその背に長刀を背負わせ、下緒を前で結んだ。柄の長さをいれれば五尺になんなんとする刀である。腰をやられてから背の縮まったような新次郎が背負うと鐺(こじり)が地べたに触れそうだった。

「ほれ」

新次郎が顎をしゃくった。

確かに八人だった。武者草鞋(わらじ)で厳重に足もとを固め、いずれも深編笠で面態(めんてい)を隠している。その一団が黒々と雪原の上に拡がっていた。

「待たせては悪かろう」

気楽に云うと、ひょこたんひょこたんと歩きだした。いつもより速度が遅いのに利平は気づいた。慣れない長刀のせいかもしれなかった。利平もゆっくり後を追いながら、道具袋の中から棒

手裏剣を出して、両手に一本ずつ握った。
「お前はひっこんでいろ。決して手を出すな」
新次郎は背後が見えるかのように云った。
八人の黒い影の足どりが早まり、忽ち距離を縮め、素早く半円に新次郎を囲んだ。
「柳生新次郎殿ですな」
中央の男が声を掛けた。この一言で八人が他ならぬ新次郎目当ての刺客であることが明らかになった。新次郎の観法が既に見抜いた通りだった。
「一人ずつか。それとも一斉にかね」
新次郎が穏やかに訊いた。
「どちらでも好きにしなさい」
恐ろしい自信だ、と利平は思ったが、八人には破れかぶれの大言と聞こえたかもしれない。
「立合いではありませんので……」
またしても中央の男が云った。どこかすまなそうな口調だった。次いで奇妙な言葉をつけ加えた。
「元旦のことではありますし……」
「元旦の刺客は手早くすますのが習わしかね」
新次郎が破顔した。

中央の男は答えず、抜刀した。同時に他の七人も抜く。
新次郎はゆっくり、八人の剣を見廻し、驚くべきことを云った。
「揃いも揃って無形の位か」
利平は思わず戦慄した。新次郎の言葉はこの八人の男が新陰流の剣士であることを明らかにしていた。中央の男の丁重なもの云いの理由もそれで判ったし、元旦ではあるし、という言葉の意味も明らかになった。この男たちは早急に仕事をすませて、道場にかけつけ、恒例の正月の雑煮を喰わなくてはならないのだ。
「御無礼つかまつる」
又しても中央の男が云い、するすると間合をつめて来た。
かしゃっ。音と共に新次郎の右手の杖に槍の穂が生えた。だがこの連中は先刻承知だったらしく、動揺の様子は見せなかった。
新次郎は左の杖一本で身を支え、右の杖を八人と同じ無形の位に置いた。だが動かない。
いや動けないのだ、と八人の男たちは思ったかも知れない。
新次郎の当面の相手は三人だった。中央の男を含めた残りの五人の内三人はそのうしろに立ち、二人は利平に迫っていった。
前面の三人が同時に間境いを越え、斬撃を送って来た。背後に跳ばぬ限り、この斬撃に対応出来るわけがなかった。新次郎の杖は二本しかないのである。

だが新次郎の杖は異常な迅さを見せた。躰を支えていた杖がはね上り、槍の穂を生やすと同時に左側の男の胸を刺した。新次郎はその杖を支点としてなんと前方に跳んだ。右手の杖が一閃し、真中の男の顔を横一文字に断ち割ると、そのまま右端の者の胸を深々と貫いた。

更にその右の杖で身を支え、左の杖を抜き、それで身を支えながら、元通りに構えた。

三人が地に倒れた時は、新次郎は何事もなかったように先程と同じ姿勢で立っていた。

残り五人の男たちは身を固くして茫然と立っていた。信じられぬ動きであり迅速さだった。

「どうした、凍りついたか」

嘲るような新次郎の声に、五人は我に返り、改めて新次郎を囲んだ。もう利平にかかろうとする者はいなかった。

五人の剣が同時に上段に上った。これは味方を斬ることを覚悟の上での必殺の斬法だった。新陰流のいわゆる殺人刀の窮極の形だった。刺客にのみ許される裏の刀法である。同時に振りおろされる五本の剣を受ける術はどんな剣法にもありはしない。そのような形に追い込まれぬために剣法の技はある。

新次郎は平然と五人にその形を許した。

じりっ。間合が縮まった。新次郎の躰が低く縮まった。五人が必殺の間境いに達するまでに、その躰はほとんど地を這うほどになった。

五人は気にもかけない。これを新次郎の目くらましととったのである。じりっ。五人の足が同

時に間境いを越えた。

それは正に一挙動の動きに近かった。

新次郎の術は何人の予測をも超えた。二本の杖を投げ、背に負った刃長三尺六寸の長刀を抜くなり、逆袈裟に一人を斬り上げ、更にその勢いに乗って宙天高く翔んだのである。投げられた杖は正確に二人の胸を貫いていた。更に新次郎の左手は長刀の鞘を杖にしていた。それを支点として跳んだのである。

新次郎が跳べるとは誰一人思ってもいなかった。完全な盲点である。そして飛翔しながら新次郎は恐るべき迅さで残る二人の男を唐竹割りに切り裂いていた。

着地した新次郎は異様な態度をとった。鞘で躰を支えたまま、長刀を木立に向って投槍のように投げようとしたのである。凄まじいまでの気迫だった。

「やめろ！」

木立ちの蔭から声がとび、石舟斎の姿が現れた。その顔は地面の雪よりも白かった。

「その刀はこの木を貫くか」

石舟斎は確かめるように云った。新次郎は黙って頷いた。

「今更、わしを殺すことはあるまい。兵介の新陰流はお前とわしの刀法ではないか」

新次郎は暫く投剣の形を崩さなかった。やがてゆっくりと長刀をおろし、鞘におさめた。

「それもそうですね」

そう新次郎は呟いた。

石舟斎が新次郎に新陰流第二代の道統を譲る印可を与え卒然として去ったのは、この年四月十九日のことだ。享年七十八歳。

新次郎は更に十年を生きて元和二年四月五日、六十五歳で死んだ。

柳生家の系譜を書いた『玉栄拾遺』の新次郎の項目は次の言葉で終っている。

『後年有レ故柳生ヲ辞シ、他邦ニ経歴シ玉フ。元和二丙辰四月五日客中ニ逝去シ玉フ。号ニ春江宗桂禅定門ニ』

元和二年は大坂夏の陣の翌年である。平和と安逸がようやく世の中に定着しようとしていた。その世の中に背を向けるように、ひょこたんひょこたんと果てしない流浪の旅を続けていったであろう新次郎の姿を憶（おも）う。利平はいつまでその新次郎について行っただろうか。

逆風の太刀

松尾山凄惨

柳生五郎右衛門宗章は生涯その異様な静寂を忘れることが出来なかった。
美濃関ケ原の西南、標高二百九十三メートルの松尾山山頂に五郎右衛門はいた。
慶長五年九月十五日。時刻は午前十一時を廻っている。
この日、朝八時から始った合戦は、延々四時間にわたって行われていた。
この山頂からはその死闘の様が一望の下に見える。凄まじい闘いだった。何千挺の鉄砲が火を吹き、大筒の強力な発射音までする。至るところで肉弾相拍つ白兵戦となり、敵味方入り乱れての格闘が行われている。
だが暫く見ているうちに、五郎右衛門は奇妙なことに気付いた。
西軍の軍勢八万五千、東軍七万五千といわれるにもかかわらず、現実に戦闘に参加している西軍の実数は、半ばにも足りぬ三万五千程度しかいないのだ。あとは形勢を伺うように鳴りを鎮めている。本来なら互角以上に戦える筈の西軍が追いこめられがちなのはそのためだった。

それでも石田三成・宇喜多秀家・小西行長・大谷吉継の諸隊は、血みどろになりながらもよく戦い、数にまさる東軍と互角の戦況を保っていた。

ここ松尾山に陣した小早川秀秋は西軍に属している。既に共に伏見城を攻め落としている。そのくせこの四時間に亘って味方の激戦をよそ目に、一兵も動かさず、ひたすら観戦につとめて来た。

小早川秀秋、この時十九歳。まだ少年のあどけなさと繊細さを顔に残している。ここ一刻（二時間）あまりずっと床几に坐り、せわしなく爪を噛みながら戦況を見ていた。

熱でもあるかのように眼が潤んでいる。だが空ろだった。

柳生五郎右衛門は側近というより護衛役として、ぴったりその斜め後方に蹲っていた。

五郎右衛門は柳生石舟斎宗厳の四男であり、その卓越した剣技を買われて小早川藩に抱えられた男だ。事実、家中で剣をとって彼の右に出る者はいない。そこを見込まれたのだろう、昨夜の雨中の行軍の時から呼ばれ、

「ずっとそばにいてくれ」

秀秋直々に云われていた。実際に身の危険を感じている暗い眼付だった。

〈可哀そうに。もうどうしていいか判らなくなっているんだ〉

秀秋が身の危険を感じているという事自体が、そのことを明かしていた。

それも決して秀秋自身の優柔不断や狐疑逡巡のせいではない。秀秋の立場の難かしさがそうさせているのだ。

秀秋はもともと豊臣秀吉の正妻北政所の兄木下家定の子である。北政所に子が出来なかったため、秀吉の猶子となって北政所に養育された。猶子とは『猶お子の如し』の意で、つまりは養子のことなのだが、姓名は実家のものを名乗っていいというような微妙な差があったらしい。左衛門督を称してからは、その唐名が金吾だったため、金吾と呼ばれた。後に中納言に任ぜられて金吾中納言という。

秀吉は一時は自分の跡を継がせようかというほど可愛がったのだが、実子秀頼が生れてはどう仕様もない。九年前の天正十九年、突如小早川隆景のもとへ養子として出された。

隆景が死ぬと、小早川家の所領、筑前一国と筑後二十二郡、併せて三十五万石を相続したが、この頃から秀吉の眼が漸く厳しくなった。文禄元年と慶長二年、二度にわたって朝鮮に出陣した。特に慶長の役では十六歳の少年とは思えない大胆不敵さで転戦しては勇猛に闘ったのに、逆に秀吉の不興を買い、九州の領地は没収され、越前北の庄十六万石に左遷される結果になった。

この理由が実のところ五郎右衛門にはよく判らない。軽挙妄動というが攻撃は成功しているのだ。そのために全軍の敗北を招いたなどということもない。無闇矢鱈にはしゃぎ廻って、遊びでもするように戦ったという節はあるが、それが何故いけないのか。五十歳の武将と十六歳の武将が同じ型で戦えば、五十の者が勝つにきまっている。十六歳の武将は五十歳の武将の思いもかけぬ型で攻撃をかけてこそ、初めて勝つことが出来るのではないか。

この秀吉の譴責は、お前は十六歳ではいけなかったと云っているように見えた。あるいは国元の人手不足による収穫の大幅な減少と、秀吉の収奪の激しさという非常な無理を押して朝鮮へ派遣したために生じた全軍の不満を抑えるために、秀吉は敢て身内である秀秋を罰してみせたのかもしれない。つまりは一種のみせしめだったのではないか。

五郎右衛門にはそうとしか考えられなかった。

当然秀秋のうけた衝撃は大きい。

強くあれ。勇猛であれ。生れた時からそう教えこまれ、その通りやって来て罰を蒙るとしたら、今後どう動けばいいか迷うのはむしろ当然ではないか。十六歳の少年にこの減封は不当の処置としてしか受けとめることは出来なかった筈だ。

秀秋の抗議釈明は一切容れられず、不安のうちに北国へ、秀秋自身の感覚からいえばさいはての国へ送られるのを救ってくれたのは秀吉の死であり、それに継ぐ徳川家康の決定だった。家康以外の誰一人、この非常の時に少年の処遇など考える暇を持たなかったのである。その意味からいうなら、現在十九歳のこの少年にとって唯一の恩人は、家康しかいないということになる。豊臣家は身内だというだけで、武将として、男としての運は徳川家によって与えられた。それが現在の秀秋の立場だった。

秀秋の正直な気持は徳川方東軍に味方することである。だが開戦当時大坂にいたのが不運だった。石田方につかなければ包囲攻撃を受け、全滅させられるにきまっていたからだ。だからとり

あえず西軍について伏見城を攻めながら、一方で東海道を下向中の家康のもとに使者を送って謝罪にこれつとめた。

小早川家の重臣平岡頼勝と稲葉正成（後の春日局の夫である）の二人がこの手配をした。特に稲葉正成は、自分の子が家康の近臣として仕えていたし、正成自身も東軍についた黒田長政、家康の腹心村越茂助などと親しかった。この二人の重臣にとって秀秋の気持などはどうでもいいのだ。小早川家の方が大事だった。だから敢てぎりぎりの時点まで待って突如西軍を裏切れ、という家康の無理な注文を易々として引き受けてしまった。秀秋にはしらせていないが黒田長政のもとに証人（人質）まで送っているし、黒田家の家臣大久保猪之助が万一の場合に備えて秀秋の本陣に送りこまれてもいた。つまり裏切りについて万全の態勢がとられていたわけだ。

ところが昨夜になって、石田三成から書面が届いた。これがなんと、石田三成・大谷吉継・小西行長・安国寺恵瓊・長束正家の連署で、秀頼が十五歳になるまで秀秋を関白にする、という途方もない条件をつけて、固く西軍との約を守って貰いたいというものだった。

『関白』という一字が秀秋を狂わせたといっていい。『関白』はこの当時、武人に賜られうる最高位だ。現代でいえば首相の地位を賜られたに等しい。現代の代議士が一度は首相の地位に立ってみたいと夢見ると同様に、当時の武将は生涯に一度は秀吉のように関白の座について見たいと思っていた筈である。

十九歳の少年が狂うのはむしろ当然ではないか。

そこからこの松尾山の静寂が生れた。

平岡・稲葉の老臣がどれほど力を持っていようと、合戦の場で兵士たちが見つめるのは殿様である。総大将の采配である。たとえ十九歳の少年の握るものだろうと、その采配に絶対の力がある。『いくさ人』はそう叩きこまれて来たし、今更その習慣を破ることは出来ない。秀秋が死なない以上、平岡と稲葉もこの采配を握ることは出来ない。この一点だけは秀秋の自由なのだ。采配が東に振られれば東を攻め、西に振られれば西を攻める。小早川隊一万五千六百の兵が、それを承知し、それを待っている。

この乱戦の中で、手つかずの一万五千六百の兵力がどれほどの力を持つか、それこそこの関ヶ原にいる者なら誰でも知っている。現在が伯仲状態なのだから、秀秋の采配を振られた方が当然大きく崩れることになる。天下分け目といわれた関ヶ原合戦の勝敗を分ける力は、今、秀秋の采配にあずけられているわけだ。

黒田長政の家人大久保猪之助は家老平岡頼勝の鎧の草摺をつかみ、じわじわと秀秋に近よっていた。万一秀秋が西軍につくときめた時は即座に殺す気構えでいる。

柳生五郎右衛門はとうに大久保の殺気に気付いていた。大刀を引きつけていつでも抜き討てる態勢にある。五郎右衛門の不安はむしろ逆の場合だ。この軍勢の中に必ずや石田方から放たれた密偵がいる筈である。采配が西に振られた場合、それらの密偵は即座に刺客に変る筈だった。五郎右衛門の注意は七割方そちらの方へ向けられている。

不意に轟音が聞こえた。

五郎右衛門は秀秋と共に頭をめぐらせて見た。

どんよりとたれこめた黒い空に、一筋の白煙が上り、ゆらゆらとたなびいた。狼煙である。場所は石田三成隊の本陣笹尾山だった。これは小早川隊と同時に、南宮山にいる毛利秀元・吉川広家隊への攻撃参加を促したものだ。

時機が来た。去就を決する最後の時機である。

五郎右衛門は思わず秀秋を見た。

視線を感じたのか、秀秋も五郎右衛門を振り返った。二人の眼がかちりと合った。

〈好きなようになされ〉

五郎右衛門は心の中で呟いた。

〈誰のことも考え召さるな。己れ一人の好きになされ〉

不意に秀秋がにっと笑った。十九歳らしい茶目っ気がちらりと洩れた。

〈そうそう。それでいいんです〉

五郎右衛門の胸に熱いものがこみ上げて来た。実のところ五郎右衛門は平岡・稲葉の両家老が嫌いだった。大名家の家老としては当然のことかもしれないが、あまりにも露骨に秀秋より藩大切の態度を見せつけすぎる。秀吉の甥など主君に押しつけられていい迷惑だ、という感じなのだ。朝鮮でいい加減迷惑しているし、一度は減封の憂き目まで見ているのを忘れたか。今は黙っ

て自分たちのいうままに動いていただく。はっきりそういう態度を示している。
五郎右衛門は弟の又右衛門宗矩とは対照的なまでに直情径行の男である。それは剣技の上にまで現れていて、柳生新陰流の本筋である活人刀よりむしろ古形の殺人刀の方を好む。活人刀とは敵に充分に技を出させ、その裏をとって勝つ剣であり、殺人刀とは敵に技を出す余地を与えず、こちらから積極的に打って出て勝ちをおさめる剣だ。もっとも新陰流にいう殺人刀はそれほど単純ではない。これは本来敵が守勢に廻って技を仕掛けて来ない場合の剣だ。わざとこちらから激しく仕掛け、敵がそれに乗じてこちらの裏をとろうとするところを、更にその裏をとって勝つという剣だ。五郎右衛門の殺人刀にはそれだけのねばりがあることになるが、何より果敢に打って出るのが彼の性格に合っていた。
十九歳の少年を何だと思っているんだ。
五郎右衛門の腹の底には、火のように燃えるものがある。幼年が少年期への過渡期ではなく、それ自身完結し充足した一つの時期であるように、少年は青年期或るいは成年期への単なる過渡期ではない。それだけで完結した一つの世界なのだ。少年には少年の熟成があり、円熟した少年期というものが確かにある。少年期に自殺が多いのは、充足した少年期を送った者が青年期に入ることを躊うからであり、これを忌避するからなのだ。
本人にとっては美しく充足した秀秋の大事な少年期をめちゃめちゃに破壊したのは薄汚れた大人の秀吉であり、その仕上げをしようとしているのがこの家老たちだった。五郎右衛門は理屈と

してでなく実感としてそれを知っている。そして反撥していた。
「殿！」
稲葉がせきこんだ声をあげた。
動くなら今だ。家康について西軍を攻めるなら、今なのである。今、小早川勢が動けば、西軍側としては自分たちの狼煙を見てのことと思い、当然東軍を討つものと思うだろう。それが西軍自身に向って来たと知った時の驚愕ぶりは大きい筈である。それこそ乗ずべき隙であり、合戦の好機なのだ。
その好機がみすみす去ってゆこうとしている。
狼煙がようやく消えようとしているのに、秀秋はぴくりとも動かないのである。
「おのれ！」
大久保猪之助はこの時を見届けるために黒田長政から送りこまれた男である。秀秋の不動を東軍への反逆ととった。いきなり大刀を抜き放って秀秋に駆けよろうとした。
「推参」
五郎右衛門は一言のもとに抜き討ちに斬った。大久保は声もあげず倒れた。但し五郎右衛門が斬ったのは峯打ちだった。大久保は首筋を強打されて失神したのである。この肝心の時に、東軍の軍目付を斬るほど五郎右衛門は不覚悟ではない。とにかくまだ決定は下されていないのだ。
秀秋がすっくと立った。

平岡・稲葉両家老が息を呑んだ。蒼白である。五郎右衛門の態度から見て、秀秋の西軍肩入れを確実と見たのだ。今までの工作はすべて無駄に終った。家康公がこの十九の小僧にしてやられたのである。東軍はこの新手を迎えて一気に崩れるだろう。家康は敗れ、豊臣の世が続くことになる。

秀秋の采配が今まさに動こうとした。

その瞬間である。銃声が湧いた。同時に松尾山本陣に鉄砲玉が飛んで来た。

五郎右衛門は身をもって秀秋をかばいながら、楯の蔭に入れ、自分は立って情況を見た。

鉄砲を撃ちこんで来たのは徳川勢だった。三十人ほどの鉄砲足軽が陣地を離れ、松尾山近くに方陣を張って、切れ目なく発砲を繰り返していた。これは家康の鉄砲頭布勢孫兵衛と福島正則の鉄砲頭堀田勘右衛門の率いる鉄砲隊の一部だったという。秀秋の逡巡に堪忍袋の緒を切らした家康がとった強行策である。同時に恫喝でもあった。

秀秋が五郎右衛門と並んで、この鉄砲隊を見ている。意外に落着いていた。

「家康殿ご催促か」

はっ、と声をあげて嘲笑って見せた。

「知っているか、五郎右衛門。今頃あの爺さま夢中になって爪を喰ってるぞ。俺と同じ癖なんだよ」

憑かれたような話し方だった。

「もう何本分喰ったかなあ。気が小さいんだよ、あの人は」

「殿!」

稲葉正成が叫んだ。血相が変っている。

「殿は小早川家を潰すおつもりか」

「うるさいな。俺の藩だ。俺が潰して何が悪い。そうだろ、五郎右衛門」

「勿論です」

柳生五郎右衛門はこの一言のために後に仕官の途を鎖されることになるのだが、この時は全く気づいていない。また気づいていても敢て云ったかもしれぬ。

「殿の一生の大事。悔いを残されるな」

「関白になりたい」

はっきりいった。

「俺が関白になるなんて、あははは」

天を仰いで笑った。からっとした、いかにも少年らしい良い笑いだった。秀秋はやっと本来の自分を取り戻したかに見えた。

「おかしいな、ははは。俺が関白さまになれると思うか、はははは」

笑いがとまらなくなっている。真実おかしくておかしくて仕方がないのだ。

「いくらなんだって無茶苦茶すぎるよなあ。関白なんて三日もやったら放り出されるさ。殺され

るかもしれないな。治部のやることなんて大方そんなとこだ」
治部とは石田治部少輔三成のことだ。朝鮮の合戦で三成は軍監として依怙の沙汰が多く、更に出征軍の故国を苛斂誅求で苦しめたため蛇蝎のように嫌われていた。秀秋とて例外ではない。
また一斉射撃が起った。鉄砲隊が数を増したようだった。
「くそ親爺」
東軍の方を見て秀秋が喚いた。
「でもあのくそ親爺は、嘘はいわないよ。爪も喰うしね」
またおかしそうに笑った。
「三方ケ原のいくさじゃ、こわくて馬上で糞をひったんだって。俺にそういったよ。驚いたね。何が海道一の弓取りだ」
この饒舌は何だ、と五郎右衛門は思う。気の昂ぶり以外の何物でもない筈だ。その証拠に次第に喋り方が早くなっている。
「殿!」
平岡と稲葉が喚く。
〈放っておいたらどうだ。尻を叩くんじゃない。この子にとっては正念場なんだ〉
いっそぶった斬ってやろうかとさえ、五郎右衛門は思った。その気持を感じとったかのように、秀秋が五郎右衛門の肩に手を置いた。

「話相手になってくれて有難う。じゃあ、行くかね。くそ親爺を助けてやろう。また糞をひらせちゃ可哀想だ」
うふっ。思わず五郎右衛門は笑ってしまった。こりゃあいい。これでこの子も立ち直った。
秀秋がぱらりと采配を振った。はっきりと西北を指す。
「刑部の陣を撃て!」
全山を埋めた旗差物が揺れた。一斉に鬨の声が挙り、松尾山が鳴動したかの如く動き出した。六百の鉄砲が一斉に火を吹き、大谷刑部吉継の隊に撃ちこまれ、小早川隊は刀槍をきらめかせながら、雪崩のように山をかけ降りた。秀秋も馬を駆り、五郎右衛門も槍を握ってその横を走っていた。
時刻はようやく午の刻を廻ろうとしていた。空はいよいよ黒さを増し、雨雲が大きく拡がりを増していた。

飯山城最期

吹雪だった。
慶長八年十一月十五日の朝はまだ暗い。
伯耆国米子の飯山城には三百の兵が立て籠り、夜を徹して篝火を焚いて警戒を絶やさなかっ

た。

柳生五郎右衛門は焚火のそばから身を起した。具足をつけ、大身の槍を握ったまま眠りこけていた。寝の足りた顔に当る吹雪が気持よかった。腕をあげて大あくびしながら、三年前の関ケ原もここと同じ暗さで、同じくらい寒かったことを思い出した。

〈晴れ上った空の下で戦ったのは、朝鮮でだけか〉

なんとなく因縁めいたものを感じて、おかしかった。

関ケ原合戦は小早川秀秋の裏切りによって、東軍の大勝に終った。秀秋は正しくこの合戦随一の大手柄をたてたことになる。家康から筑前の国を転じて備前美作両国において五十一万石を貰ったのも当然だった。

だが秀秋はやはり最後まで少年である宿運だったのだろう。僅か二年後の慶長七年十月十八日、岡山城で死んだ。二十一歳である。

子供がいなかったために小早川家は断絶となり、五十一万石は公収された。

「俺の藩だ。俺が潰して何が悪い」

松尾山で秀秋が怒鳴った通りになったわけだ。

〈殿もご満足だろう〉

お蔭で再度浪々の身になった五郎右衛門だが、いっそさばさばして心の中は爽やかだった。

その五郎右衛門が米子の城へ来たのは、米子藩主中村忠一の筆頭家老横田内膳村詮が自分の古い弟子だったためだ。内膳は主君忠一に五郎右衛門を推挙して召し抱えを願うつもりだったが、急にそれがかなわなくなった。殿様との仲がおかしくなって来たためだ。

中村忠一は中村式部少輔一氏の子で、まだ十四歳の少年だった。父の一氏は豊臣家三中老の一人に撰ばれたほどの器量人で、もともと駿河を領国としていた。横田内膳はその頃からの家臣であり、初めて駿河一国の完全な検地帖を作って名をあげた治世の功臣である。六千石の大禄を喰み一氏の妹を妻にし、米子へ移ってからも良港を持つ町人町として商業を発展させることに功があった。幕閣にまでその才を認められた家老である。

主君忠一の叔父に当ることでもあり、若すぎる主君に歯に衣着せず意見をいう内膳を忠一が煙たがったのは当然だろうが、十四歳の少年が殺すほど憎む相手ではなかった。誰かが裏にいて、少年の心を殺意にまで誘導したに違いなかったし、それが町人町米子の異常な発展によるひずみだったことも間違いない。藩の重職となり、大町人と結託すれば容易に巨富を積むことが出来たからだ。

十一月十四日は三年前に中村家の伯耆移封が決まった祝日だった。家中の者ことごとく城に登って祝う慣しだった。

内膳も登城し、そのまま帰らなかった。城中で謀殺されたのである。

その子主馬助（弟という説もある）は内膳の館だった飯山城に三百人の家臣と共に籠り、主君

に楯つくことになった。
　この当時の歴史を見ると各地で同様の事件が起っている。若い苦労知らずの二代目主君が、初代藩主と苦労を共にした古い家臣を邪魔にしこれを排除しようとして戦いになる。いずれも旧臣側が一族一党と共に屋敷に籠り、昨日までの同輩に囲まれ、これと闘って全滅している。一つの時代の大きな変り目だったのかもしれない。
　いずれにしても主馬助はじめ横田一族の命運は既に絶えたと同様だった。
　主馬助は父の師であり、客人でもある五郎右衛門に速やかな退去を乞うた。ここにいれば万に一つも生きのびられる筈がなかった。中村忠一は今頃になって事の成行に恐慌を来たし、なんと隣藩の出雲富田（とんだ）城主堀尾吉晴に援兵を頼んだのだ。堀尾吉晴は半ば呆れながらも、忠一の父一氏との親交に応えるため五百三十人の軍兵を派遣してくれた。米子の藩兵は二千余人。併せれば三千人を越す人数が飯山城を囲んだことになる。城兵の十倍だった。
　五郎右衛門は笑った。
「浪々の身に倦（あ）き申した。ここらで終れれば誠に有難い」
　実感だった。関ケ原での秀秋の放言に対して賛意を示した五郎右衛門は両家老の目の敵にされ、浪々後は彼等の流した噂のためにどこでも召し抱えを拒否されて来たのだ。
　五郎右衛門ほどの腕なら、どの城下町でも道場を開き、柳生新陰流の看板を掲げることは出来たが、五郎右衛門にはその才覚もない。厄介なだけだった。華々しく戦って討死することが出来

れば本望というべきだった。
　それにみすみす一族全滅を覚悟した、愛弟子の息子を見捨ててゆくことは五郎右衛門には出来ない。『恥じを知る者』というのが当時の武士の心底にある言葉だった。五郎右衛門はその言葉に従って、死を覚悟したのである。
　五郎右衛門は従者を一人つれていた。柳生の庄に育った森地五郎八である。五郎八もまた『恥じを知る者』だった。主と共に踏みとどまって討死の覚悟をきめた。
　その五郎八がどこからかそっと現れ、五郎右衛門に囁いた。
「そろそろのようです」
「そうか」
　五郎右衛門は武者草鞋（わらじ）の紐を結び直しながらもう一度空を仰いだ。吹雪は前よりも勢いを増して来たように思えた。
　自分が妙に少年に縁のあることに気づいて五郎右衛門は苦く笑った。
「秀秋さまに忠一さまか」
「何と申されました？」
「独り言だ」
　五郎右衛門は雪の中に秀秋と忠一の顔を並べて見た。
　どちらも少年だった。そしてどちらも、

「俺の藩を俺が潰して何が悪い」

そう云っているように思えた。

事実、中村忠一も六年後の慶長十四年五月十一日に頓死し、秀秋同様子がなかったために米子藩は潰れ十七万五千石は公収されている。この横田内膳親子を殺したことが痛く家康を怒らせ、参勤交替で江戸に上った時も品川の宿でとめられ、江戸へ入ることを許されなかったと新井白石の『藩翰譜』にある。忠一は狂死したという説もあり、『徳川実紀』には、

『この家絶たるは子なきのみにはあらざるべし』

とまで書かれてある。

もっともこんなことは五郎右衛門の知ったことではなかった。

突然、夥しい鉄砲の一斉射撃の音が轟き、いきなり弾丸が飛んで来た。館の門は既に壊されたらしい。

五郎右衛門は焚火にざぶりと手桶の水をかけると、

「松尾山によく似ているな」

また独り言をいって、槍を抱えて飛び出していった。

森地五郎八はその主の後を追いながら思わず身震いしていた。何年も仕え、主人のことは隅から隅まで知っている筈のこの男が、今日の五郎右衛門にいまだかつて見たことのない姿を見ていた。それは戦いの鬼だった。この世のすべてを絶ち切ったために、戦うことしか脳裏になくなっ

てしまった魔物だった。五郎八は寄手側の死者の数が莫大なものに上ることを予見した。

五郎八の予見通りだった。

米子藩兵はこんな凄まじい闘いを初めて味わった。十倍の数を誇る藩兵の方が、魂をとばして逃げ廻らねばならなかったのである。それも柳生五郎右衛門を先頭とするたかが一握りの戦闘集団のためだった。

横殴りの吹雪がいけなかった。とにかく相手の姿を正確に捕捉することが出来ないのである。真白な白昼の闇の中から、突如として長槍が繰り出され、あっという間に殺戮に巻き込まれている。至近距離で闘えば必ず殺されるのである。捕捉出来ないから弓矢、鉄砲で撃ち倒すことも出来ない。かかっては逃げ、かかっては逃げることになるのだから、相手には息を継ぐ暇を与え、こちらは死骸の数を増やすばかりだった。

朝のうちに終る筈の戦いが、午近くまでかかってまだ終るどころか、飯山城の中へつき進むことも出来ない始末である。

たった一つ、寄手にとって倖いなことに、さしもの猛吹雪が熄み、薄日さえ洩れはじめたことだ。

〈これならなんとかなる〉

寄手は安堵の息をつき、横田方は、

〈遂に終るか〉
最期の確固を決めた。
銃撃戦が再び始った。
「一発の弾丸も残すな。一本の矢も残すな」
横田主馬助は眦を決して叫び、城方は文字通り最後の一発まで撃ちつくした上で、全軍突撃に出た。
五郎右衛門は突撃の前に放胆にも屋根に登り、寄手の陣構えを見渡した。意外に近くに本陣が見え、馬に乗った少年の姿が見えた。藩主の忠一である。援軍の堀尾勢の手前もあって、藩主自身出馬せざるをえなかったのだ。
五郎右衛門はにこりと笑うと屋根を降り、馬に乗った。五郎八に一声かけると真先に城門をとび出した。恐ろしい迅さで疾走する馬上で槍を振り廻し、どこまでも突っこんだ。敵陣が二つに割れたように見え、その割れ目に五郎八と横田勢の生き残りたちが一団となってつっこんだ。収拾のつかない混乱が起った。寄手ももう鉄砲は使えない。撃てば味方を殺すことになる。積った雪を蹴立てての白兵戦になった。
五郎右衛門の馬が槍を受けて倒れた。五郎右衛門は槍を捨て、太刀を抜いた。左八双に構えると叫んだ。
「柳生新陰流逆風の太刀」

再び疾走を開始した。一人斬り二人斬った。左構えから右袈裟に斬り、次に右逆車にとった太刀で左袈裟に斬る。この繰り返しだった。鎧武者たちが鮮血を撒き散らしながら巻藁のように斬り殺されてゆく光景は、信じられぬ恐ろしさだった。
五郎右衛門はなんと十八人の鎧武者を斬ったと柳生流の伝書は書いている。まさに戦鬼であり、魔神だった。
いつか本陣に突入していた。忠一の凍ったような顔がすぐ近くにあった。
「忠一殿、見参」
殺到した。割って入った側近二人は忽ち斬り倒された。忠一は馬に乗ろうとしていた。斬れば斬れる間合だった。十四歳の痩せた尻が馬にかぶさるようにして眼前にある。五郎右衛門はその尻を浅く斬った。忠一が女のような悲鳴をあげた。同時に一斉射撃の銃声が起った。
〈子供は斬れないなあ〉
五郎右衛門はにやっと笑うと弾丸に蜂の巣のようにされながら倒れた。

あとがき

いつごろから柳生一族に惹かれるようになったのか、定かではない。

だが戦場を知っている私には、精神修養のための剣と云う言葉に大きな抵抗があった。剣は人を斬るための術だ。どんなに言葉を飾ろうと所詮人殺しの術である。そこに徹しない剣など絶対に強いわけがない。頑なにそう信じていた。

だから剣の達者とは人殺しの達者である。根底において人殺しを是認していない者が、剣を習う筈がない。だが人と生れて、人殺しを是認するとは異常ではないか。

ドストエフスキイの作品、確か『白痴』だったと思うが、その中に、人を殺した者は人間の埒外にとび出してしまった者だ、と云う意味の言葉があった。つまり『人でなし』になったと云うのだ。どんなに努力をしようと、二度と人の中に戻ることは出来ない、ともあった。

その意味で剣術者は『人でなし』である。『人でなし』の恐怖と辛さを、夢に脂汗を流すばかりに味わいながら、醒めればまた平然として常人の如く装って生きねばならぬ男たちである。

そんな男たちに尋常の生がある筈がない。私はそう確信したし、今も確信している。

そしてその眼で柳生一族を見た時、そこには惨澹たる肉親相剋の地獄変相図が見えた。

幾つかの根本史料の、さりげない記述を透かして、その地獄変相図が散見している様を、はっ

きりと見た。

ことわっておくが、私は剣術者をおとしめているわけではない。彼等の『人でなし』故の辛く凄絶な生きざまを、男としてむしろ讃嘆する者である。『人でなし』だからこそ、人がはっきりと見えるのである。『人でなし』だからこそ、冷厳な世のからくりに涙することが出来るのである。そして『人でなし』だからこそ、時として『覚者』になることも出来るのではないか。

私はこの本の中で、私の見た、と云うより私にはこう見るしかなかった柳生一族を書いたつもりである。通説とはかなり違っているかも知れない。だが私はほしいままに彼等を創ったわけでは決してない。史料の底に生きているままの彼等を、『人でなし』としての彼等を、見えるがままに描いただけだ。

終りに、かかる異形の小説の掲載を許して下さった『オール読物』の名取昭氏、『歴史読本』の田中満儀氏、『週刊小説』の土山勝廣氏、並びに一本にまとめる労をとって下さった講談社の川端幹三氏に、深甚な謝意を表するものである。

1988年11月

隆慶一郎

解説

山口昌男

講談社版の「柳生非情剣」のあとがきの中で、作者隆慶一郎は、「オール讀物」「歴史読本」「週刊小説」に別々に発表されたが、一冊の本に纏められると、連作とも云うべきものになったこれらの作品群を「異形の小説」と自ら名づけている。

異形とは、常人とは異っているために、ふつうの人々のように平和な生活を営むことができないような状態を云う。異形は、色々な形で現われる。先ず一番現われやすいのは身体の形のくずれとしてである。元来、大衆小説、それも時代小説と云われる分野の主人公の多くは、こうした身体的異形性を帯びた存在であった。すぐ思いつく例に、林不忘の「丹下左膳」がある。あの隻腕・片目は、本来、暗い時代に向う日本の当時のやるせない、ニヒルな気持を表現する何よりもよい形姿であったとふつういわれている。時代小説の中の異形のもう一人の代表選手は、「大菩薩峠」の主人公、机龍之介であった。机龍之介は全盲の姿で無明の闇を救いを求めて彷いつづける人間の妖しい魅力を惜しみなくふり撒いて、大正時代の読者を魅了した。戦後のこの意味での

スターは、小説よりも映画の世界の、勝新太郎演ずる座頭市であった。

こうした異形について二つの考え方がなり立つ。一つは「スティグマ」という言葉で云い現わされるものである。スティグマは「聖なる刻印」と云えるものである。天によって選ばれたしるしとして、何か人とは違った刻印とかしるしを背負った存在をさす。こうした刻印のゆえに、これらの人々は、ふつうの人の生き方の軌道から外れることになる。そしてそこに物語が発生する。こういう人の物語を通して、人間を越えた存在は、何らかのメッセージを送って来る。読者は、こうしたスティグマを背負った主人公を通して、世の中を少し違った眼で見ざるをえないような物語の「迷路」に誘いこまれて、ふと日常生活における「吾れ」を忘れてしまう。国枝史郎の「神州纐纈城」の主人公は富士の人穴の底から地上の世界の擾乱をはかる癩者であった。

そもそも、この片目とか全盲というのは、日本の中世でいえば、死者の世界とのつなぎの役を果し、平家物語誕生のきっかけをつくった、琵琶法師と呼ばれる盲僧というような先祖を持ち、更に古代に遡れば、柳田国男が「一つ目小僧」で説いたように、「見者（ヴォアイヤン）」又は詩人の能力をたかめるために片目をつぶされたシャーマンの姿にさかのぼれるかも知れない。

こうした異形という存在は、考えようによっては、世間から排除されるあらゆるタイプの人々についても云えるかも知れない。その生まれ故、社会階層故、過度に美点を持つ（強すぎ、又は美貌）故、という具合に様々の動機故に、ふつう人の人生コースと距りを持ってしまう人達が異形性の中に含まれて来る。

隆慶一郎は、晩年の短い期間に矢次早に刊行された数多くの作品群の中で、社会的に排除され続けて来た、くぐつ師、芸能によって生きる遊行の民つまり「道々の輩（ともがら）」、流離する貴種を描き続けた。そして、貴種の主人公とこうした社会的異形集団との秘かなつながり、又は入れ替りといった操作によって物語の原動力といったものを発動させて来た。

この「柳生非情剣」において、著者は、柳生一族を全体として異形集団であるという前提で、この連作を書きはじめたようである。

「慶安御前試合」では、家光の憎悪の対象となり、滅亡させるための御前試合で対決させられる尾張の新陰流の正統の継承者連也斎と、江戸の表柳生の飛騨守宗冬の試合をめぐって、柳生が外部との関係においても、内部的な、血みどろの対決を通じて一統そのものが異形化せざるを得なかった環境が小説化され描かれている。この作品の中では特に異形というべき存在は出てこない。柳生全体の異形性が描かれているからである。

「柳枝の剣」では、類い稀な美貌故、将軍家光と同性愛の関係に陥り、宗矩の命を受けた十兵衛に暗殺される友矩が、死ぬことによって相手に勝つ心境と技術を得ていたことが語られる。友矩は、過度の美貌故に、生のコースからはみ出してしまう例である。

「ぼうふらの剣」は、左門友矩とは反対に、その醜さの故に、人に嘲られて、無視され、道化術を身につけて、生き残る飛騨守宗冬が描かれる。この一篇の中で、宗冬が、猿楽師金春大夫七郎重勝から能の秘伝を授けられたことが明らかにされている。或程度の史実に基いて、重勝の父七代目金春大夫七郎氏勝に石舟斎が新陰流兵法の秘伝を、金春流の秘事「西江水」と交換に授けたと著者は説いている。三年前、ハワイ大学の東西センターで開催された「能と狂言」シンポジウムにおいて、私は、腰の構えと足の運び方において、能は武術、ひいてはスポーツと深い関係にあることを説いた。観阿弥が伊賀の忍者の系譜との関係が明らかにされている今日、隆氏のこの指摘は、歴史についての氏の他のユニークな洞察と共に、興味尽きないところがある。

「柳生の鬼」は、連也斎と共に五味康祐によって、戦後日本の時代小説の人気主人公の一人になった十兵衛が、『あほの太平』の剣によって、柳生新陰流の秘中の秘ともいうべき『無刀取り』の術を体得する話で、「あほ」の異形性が、この作品の原点に据えられている。体得後の十兵衛は、「最早常人の世界」にはいなかった。通常人の重力圏を脱することによって十兵衛も又、異常化するのだ。

「跛行の剣」は、題からも推しはかられるように、戦場で被弾して腰を砕かれて、異常そのものになった新陰流第二代新次郎が、流浪の旅の中に消えていくまでの過程を語る作品である。身の辺りを世話する利平は、万能の技術者で、バネ（発条）を使った仕込み杖を発明するあたり、江戸初期のからくり（機巧）の盛行を想起させられて興味をよぶ。

「逆風の太刀」では、秀吉の甥であり乍ら、関ケ原で東軍に参加した小早川秀秋に仕えたため、表面的に云えば、滅びの道を歩んだ、五郎右衛門宗章で、難しい撰択の中で、呆けたようになる十九歳の秀秋の状態に魅了され、その判断に賭ける「遊び心」に満ちた「いくさびと」としての

姿が描かれる。

とかく、剣豪小説といえば、円月殺法などと云い乍ら、具体的に剣の技法が書き込まれること が少いが、この連作において、作者は、その部分を補強している。作者は身体を仕掛け（からく り）と見ている。だから、身体の部分が破壊されても、その負の部分を逆手にとって、独自の剣 法の技術を生み出すことが出来ることを示している。「跛行の剣」の新次郎がその良い例である。 又作者は柳生新陰流では「構え」という言葉は静的なので、能と同じ「位」（くらい）という言 葉を使うと云っている。「位」の中には静の中に動が含まれているという指摘も日本文化の 「型」という言葉の本質を衝いた洞察である。

こうした視点から、柳生の剣法が能に通じていることを説く作者の眼はたしかで、芸能の歴史 に対しても鋭い切り込みになっている。

他の作品群においても作者は、「道々のやから」や「くぐつ師」などの制外者（にんがい）を通して歴史の光 の部分と闇の部分を交錯させている。この作品群において作者は身体の正と負の部分を妖しく交 錯させて、読者を倦ませるところがない。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫最新刊

著者	書名	内容	価格
遠藤周作	反逆(上)(下)	神をも畏れぬ信長への憎しみと執着……村重、光秀の心に揺らめく反逆の光を克明に描く。	各540円
藤沢周平	市塵(上)(下)	幕政改革に燃えた偉大な儒学者新井白石の破乱万丈の生涯を、暖かい眼で描く歴史長編。	各420円
津本陽	千葉周作(上)(下)	剣の天稟で名をなした、北辰一刀流の開祖を、江戸剣道界に華やかに描く、傑作時代長編。	上460円 下480円
陳舜臣	中国発掘物語	二十世紀に入り、次々と発掘された中国の遺跡。地中からの歴史の響きを詳細にさぐる。	460円
森村誠一	忠臣蔵(上)	江戸中を震撼させた松の廊下刃傷事件をあらゆる資料を渉猟し、現代的視点から描破する。	780円
隆慶一郎	柳生非情剣	剣に生きる柳生一族のなかでも十兵衛、宗冬など異形の剣士ばかりを斬新な視点で描く。	360円
南條範夫	有明の別れ	男装の姫君の数奇な運命。八百年ぶりに発見された王朝の愛の物語を、見事に活かす長編。	400円
柴田錬三郎	鈴姫異変	将軍の命を狙う鈴姫の危機一髪を救う浪人者とは？　鈴姫の命運は？　傑作時代小説集。	440円
咲村観	源頼朝(上)(下)	徒手空拳の頼朝が、なぜ天下をとれたのか？策謀うずまく乱世の覇者となる生涯を活写。	上740円 下660円

表示価格はすべて税込み定価です

講談社文庫 最新刊

安能　務
春秋戦国志（上）
殺戮の中で秀でた思想家を輩出させ、世界初の帝国を生んだ五百五十年を描く。全三冊。
580円

日本文芸家協会編
大川端上げ潮どき〈時代小説傑作選〉
ギャグ・推理・実録・伝奇――現代を代表する作家十三人が健筆を競う時代アンソロジー。
640円

高橋克彦
浮世絵ミステリーゾーン
自由・斬新な視点から、浮世絵の新たな魅力を発見する喜びと興奮に満ちたエッセイ集。
480円

森　雅裕
ベートーヴェンな憂鬱症
ベートーヴェンこと作曲家そして心ならずも探偵。楽聖主演のハードボイルドミステリー。
520円

東野圭吾
浪花少年探偵団
浪花の美人教師しのぶセンセと教え子たちが殺人事件の真犯人を追って獅子奮迅の活躍。
480円

アーウィン・ショー
平井イサク訳
はじまりはセントラル・パークから（上）（下）
真実の愛ある人生を求めて、悩み傷つき、そして再生へと旅立つまでの感動の長編小説。
上680円
下520円

小川和久
仮想敵国ニッポン〈アメリカの対日戦略シフト〉
日米摩擦は、経済の土俵だけでは解決できない。日本の戦略的脆弱性をどう克服するか。
500円

御田重宝
特攻
最後の証言と機密資料を掘り起こし、人間兵器にまつわる悲痛なドラマを綿密にたどる。
740円

表示価格はすべて税込み定価です